

---

# 魔法少女リリカルなのは～夜天の光の影～

デスサイズ・0

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～夜天の光の影～

### 【Nコード】

N8266W

### 【作者名】

デスサイズ・0

### 【あらすじ】

「光の裏には影がある」

全てを失った少年は、飛ばされた世界…地球で一人の少女と出会う

その出会いは…少年と少女を変えた…

魔法少女リリカルなのは～夜天の光の影～

派手に始まります

プロローグ」らしいな。」(前書き)

どうも、デスサイズ・0です

やっちゃまったぜ……だが後悔はしてねえ!!

後、A・sとか言ってますけど無印の少し前から始まります

「プロローグ」…らしいな。」

どこかの無人世界

少年「ハア…ハア…ハア…父さん！母さん！何処に…ハッ！」

少年は傷だらけで歩いていた

その周りは炎で囲まれている

そして視線の先には

一組の男女が腹部に剣が刺さった状態で倒れていた

それは少年の両親だった





その世界は崩壊した

地球

海鳴市



零夜「だあああああああ！……！！！」

ドゴドゴオオオオオン！……！！

零夜「グフツ……」

零夜は気を失った……

魔法少女リリカルなのはA・S・S  
S 夜天の光の影

派手に始まるぜ……！！

プロローグ」…らしいな。」(後書き)

俺ははやて好きです

つまりヒロインははやて

派手に行くぜ！

第1話 少女と少年の出会い「…だってさ」(前書き)

第1話

はやての口調が有ってるかかなり心配

間違っていたり、これは違うだろうって所はバンバン言ってください

第1話 少女と少年の出会い「…だつてさ」

俺に……もっと力が……

力があれば……

父さんも……母さんも……

あの世界も……

守れたかもしれなかったのに……！！！！

力を……

もっと……

もっと俺に……力を……

俺に力をくれ……！！

悪魔に魂を売ったっていい……!!

俺に……!もつと……!力を……!!!

零夜「う……」

??「あ、起きた?」

零夜「うつつ……」

いまだぼんやりする意識の中、視界はまだはっきりしないが、俺は眼を開ける。

そして目の前に……

零夜「…天……使……？」

??「？ウチは天使とちゃうよ、普通の女の子や。」

しかし、今の俺には…最初…天使にしか見えなかった。

零夜「ああ…すまない…うっ！」

起きあがるうとした俺の全身に激痛が走った、だがなんとか起きあがった

??「あかんよ、一応手当てしといたけど、傷だらけで突然現れて倒れてたんやから。」

零夜「…倒れてた？」

??「ウチの部屋のと真ん中にな、本よんでたら、突然光ったかと思つて振り返ったら、倒れてたんよ。ほんまびっくりしたわ…」

零夜「そうか…ありがとう…え」と

??「ウチの名前は八神はやて。ひらがなではやて…変な…名前やろ…？」

零夜「いや、綺麗ないい名前だと思つぞ、俺は。俺の名前は零夜、かげみやれいや影宮零夜だ。」

はやて「ほんま？ありがとう…零夜君…」

零夜「あのさ…此処って…地球だよな？」

はやて「？そりゃあそうやる。」

零夜「そう…か…なら…父さんも…母さんも…」

俺ははやてに聞かれない程の声で呟いた

はやて「なんで…泣いてるん？」

零夜「え？」

俺は手を眼に当てた

確かに俺は泣いていた

はやて「なんか…あつたんか？」

零夜「ああ…少し…ね…」

はやて「…泣きたかったら、泣いたらええよ。」

その言葉を、聞いた瞬間

零夜「う…ぐ…う…う…う…」

俺は



泣き出していた。

はやては俺の背中をさすったり、頭を撫でていてくれたらしいが、今の俺にはあまり感じ取れなかった…

俺はどのくらいの時間泣いていたのだろうか？

俺の感覚では10分程なのだが…

はやて「落ち着いた？」

零夜「あ…ああ…」

はやて「そっや、零夜君、お腹空いてないか？もうそろそろ、晩御飯を作るうかと思ったんやけど…」

零夜「…いや…さすがにそこまで世話になるわk『グギユルルル…』  
…あ…」

はやて「どっやら、お腹は減ってるみたいやな、ちょっと待っててな、今から作るから。」

零夜「あ…あの…俺も手伝っよ、俺…料理得意だからさ…」

はやて「いや、怪我してるんやし、無理はせんほっがええよ。料理は、私も得意やし。」

零夜「でも、少しぐらいは手伝わせてくれないか？じゃなきゃ俺の気が済まないんだ…」

当然だ、突然現れて、手当てをしてもらって、「ご飯を食べさせてもらうなら手伝わなければ俺の心が持たない。

はやて「うん…無理はしたらあかんよ…」

零夜「大丈夫、体はだいぶマシになってきてるから。」

はやて「じゃ、行こか。」

そう言うてはやては車椅子を動かした

俺も立ち上がってついて行く

零夜「車椅子…足…悪いのか…？」

はやて「うん…よく分からんけど、動かないんよ…」

零夜「…そうか…」

はやて「じゃあ何作ろかな、零夜君はなんか、嫌いな食べ物とかある？」

零夜「…いや、特に無いな。」

はやて「じゃあ…カレーでいいかな？」

零夜「ああ、頼むよ。」

そして、俺はカレーが出来るのを待っていた。

少しして、カレーが出来たので、二人で食べ始めた。

はやて「そう言えば、此処は地球か？て聞いてきたけど、何でまたそないな変な質問を？」

零夜「あゝ…それはだな…」

俺は自分のことをはやて話すことした

続く…

第1話 少女と少年の出会い「…だってさ」(後書き)

零夜がはやてに、そしてはやてが自分達の事を語りあっている間に、  
次回は主人公設定とかを書きます

## 主人公設定とか

名前

影宮零夜

(かげみやれいや)

年齢 9歳

髪色 黒

眼の色 スカイブルー

魔力色 漆黒

魔力変換資質 雷、???

所持デバイス

極夜 日本刀

ソウルイーター 両刃剣

Shadow & Light (シャドウ&ライト)

二挺銃

極夜は最初から自分のデバイスだがソウルイーターは父親の、シャドウ&ライトは母親の使っていたデバイス

遙か昔から続く<sup>ソルジャー</sup>戦士の継承者

ある日、住んでいた世界が何者かの手により消滅

その際、昔住んでいた地球の海鳴市に両親によって転送され、はやての家に落下。

そのままはやての家に居候

両親は恐らく死亡

しかしチート過ぎるので生きているかもしれない

<sup>ソルジャー</sup>戦士の継承者として両親に鍛えられ、何でも出来てしまうようになった。

また、あらゆる戦闘技術から学問を学ばされた。  
本人も、積極的に取り組んでいた。



ソルジャー  
戦士とは

金で戦う傭兵とは違い、自分で戦う戦場を選び、人々のために戦う傭兵のこと

ソルジャー  
戦士は戦いではなく、便利屋のような仕事を普段はしていたり、管理局員だったり、普通に働いていたり、これまでの継承者によって様々である

第2話 「こつこつ展開はお約束」…なのか…?」(前書き)

今回は短いです

## 第2話 「こいつ展開はお約束」…なのか…?」

はやて「へえ…違う世界から…」

零夜「そう、そしてこの刀の形のペンダントが俺の相棒の極夜。」

極夜「…よろしくお願いします。」

はやて「おわっ…喋った…!…凄いなあ…」

零夜「で、このブレスレットが父さんの相棒ソウルイーター。」

ソウル「よろしく…!」

零夜「で、この白黒のカードがシャドウ&ライト」

S&L「よろしくね。」

はやて「…じゃあさっき泣いてたのは…」

零夜「…父さんも母さんも…死んじゃったからね…あ…でも生きてる気がしてきた…あの二人なら…」

はやて「?」

零夜「なんせ、馬鹿でかいドラゴンに食われたのに普通に生きてた

し、ここに来る前も、腹に剣刺さってるのに普通に喋ってたし、地震を止めるために地層を叩き斬ったり…砲撃で台風を消し去ったり、次元を斬り裂いたり、空間に穴開けたり…ムチャクチャだったからなあ…なんか普通に生きてる気がする…」

はやて「それチートすぎるやろ!!」

零夜「ほんとチートすぎだったなあ…なんか今まで自分がよく耐えたと思うよ…でも…ハア…」

はやて「…まあ…よく分からなかったけど…一つ確実に分かった事があるわ。」

零夜「…」

はやて「どこも行くところ無いってことやな。」

零夜「うっ…」

はやて「なら、ここにいたらええよ。1人より、二人の方が寂しくはないから…」

そこで俺は気付いた

この家には他に誰もいないと

零夜「はやては…1人で…?」

はやて「うん…随分まえから…」

俺はすぐに分かった

はやてはずっと寂しかったんだと  
だから、俺の答えは…

零夜「…これから、お世話になります………」

はやて「ホンマか!?!」

零夜「ああ、よろしく頼むよ。」

続く…



第3話 父の本があるらしい」「…マジかよ…」「(前書き)

まーたムチャクチャな駄文になっちまった…

だが後悔はしてません

派手に行くぜ

### 第3話 父の本があるらしい」「…マジかよ…」

零夜が八神家に来て数週間

はやて「そう言えば零夜君、普段着は今着てる服以外無いよね？」

零夜「まあ、そうだな。」

そう、俺は普段着を洗濯してるときはバリアジャケットで過ごしているのだ

ただ、真っ黒なロングコートだから町を歩くと視線が凄まじい。

カッコいいと思うんだけどな…俺は…

まあ季節はずれなのは分かってるよ  
今は5月の末だからね。

はやて「だから、今日買いに行かへん？」

零夜「いや…家に居候させてもらって、飯も食べさせてもらってる



のに、さすがにそこまでは世話にはなれないからいいよ……」  
はやて「遠慮せんでええよ、お金はお父さんの知り合いの人に、  
っぱいもらってるから。」

零夜「そう言う問題ではなくてだな……」

はやて「じゃあ自分に似合う服があるか心配とか？」

零夜「そうでもなくてだな……」

はやて「じゃあ何が問題なん？」

零夜「俺の精神的な問題だ……何から何まで世話になるのは……ちよっ  
とな……」

はやて「だからそんな事気にする必要無いって……！なんなら、出世  
払いにしといたるか？」

零夜「本気でそうさせてもらおうかな……」

はやて「んじゃ決まりやな！準備して行くで……！」

零夜「お……おっ……」

零夜「で…どこに買いに行くんだ？」

はやて「あのデパートや!!」

零夜「うおお…でけえ建物だな…」

はやて「さ、行こか。」

零夜「おお…」

零夜「…。」

一番安い服はどれだ…

似合わなくて良いから一番安い服を買おう…それとそれに安いのを…

零夜「これ安いな…」

何？別世界に住んでいた俺が何でこんなに地球に詳しいかって？  
前にも言ったが、俺の両親は地球の日本の此処、海鳴市の出身で、

俺自身5歳までは此処にいたからな。

まあ随分変わってたし、あの頃のこととははっきり覚えてないから情報に全く役に立たんがな

はやて「零夜君、ここにいたことあったんや。」

零夜「何故にそれを…」

はやて「考えてる事口に出してたよ。それと誰にしゃべりかけてたん？」

零夜「…ちよつと虚無の存在にな…」

はやて「なんやそれ…」

零夜「そ、そんな事より服はコレにするよ。」

はやて「…うわ…ダサ…さすがにこれはいくら何でも無いわ…」

零夜「まあ…値段安いのを取ってきたからね…」

はやて「あかん！ウチが選んだる…！」

零夜「え、いや…」

はやて「お！これええんちゃう！？ちよつと着てみて…！」

零夜「あ、いや…その…」

値段たけえ…

はやて「あかんかな…？」

零夜「……………分かった…着てみる…」

…………無理、断れないよ

上目使いで頼まれたんだぜ…

絶対に断れない…

けど、正直凄くかわいかった

一瞬見とれてしまったな

で…まあ…なんやかんやで俺の服は買い終わった。

出来るだけ値段は抑えたけど…けっこう高かった…

で、今は昼ご飯を食べ終わって二人でうろつろしている

はやて「ほんなら、また図書館に行こか。」

零夜「分かった、道はこつちだっけか？」

はやて「うん、あってるよ。」

はやては本当に本を読むのが好きだな。

俺もけっこう読むけどね。

けど…図書館…中広いからまだ、ちょっと迷いそうだ…

そんな不安をわずかに抱きながら俺は図書館へはやての車椅子を押しながら向かう

はやて「また本借りてくるから、零夜君もなんか見てきたら？」

零夜「いや、はやてが借りたい本が手の届かない所にあつた時の為について行くよ、俺は別にいいからさ。」

つーか面白そうな本が無いんだよ…  
見つけた面白そうな本は全部読んだからな…  
だから必然的にはやてに書いていくことになるんだが…  
もしかしたらいいのが見つかるかもしれん  
ちよつと期待してみるか。

はやて「え」と…あつたあつた…」

零夜「…ん…？なんだ…？」

俺の視線の先には、漆黒の分厚い本が目にとまった

何故か俺は、その本に吸い寄せられるように、近づき…

手に取った

そのままページをめくる

しかし、ページには何語か分からない言葉が書かれていた  
数ページ、絵が描いてあるものもあった

零夜「これは…まさか…」

間違いない

これは父さんが昔持っていた…魔導書に違いない…

なぜこんな所に……あ…確かなくしたとか言ってたな…

まあいいや、パクっていいこう。

いや、元々父さんの物だから返してもらおうと言っ方が良いかな。

「れ……く……零……君……夜君………零夜君!!!!」

零夜「……ハッ!」

はやて「零夜君、どないしたん? さっきからずっとその本持って突っ立ってるけど……」

零夜「これ……父さんの物なんだ……証拠に……ほら、影宮剣夜って、父さんの名前が書いてある……」

はやて「何でこんなとこに……」

零夜「父さん……確かどっかで落としたりとか言ってたけど……」

はやて「訳わからん……」

零夜「俺も訳分らない……」

まあ今そんな事話したって意味はないのでとりあえずこっそり持つ



て帰った  
ってか読め無いけど…

続く…

第3話 父の本があるらしい」「…マジかよ…」（後書き）

さて…続きを…

そろそろ出すか…

第4話 新しい家族が増えるらしいぜ」「…マジかよ。」「(前書き)

ヴォルケンリッター登場の回

そして零夜とはやてのデート？

第4話 新しい家族が増えるらしいぜ」「マジかよ。」

6月3日

夜

とりあえず今はちょっと眠い  
…まだ夜8時か…

しかし気になることがあり、俺は眠れずにいた

零夜「なあ…極夜…」

極夜『どうしました…?』

零夜「あの本…はやての部屋にあった鎖で封印された本…あれって  
何だろうな…何か知ってるか?」

極夜『いえ…すみませんが…私にはわかりません…』

零夜「ソウルと、シャドウライトは?何か知らないか?」

ソウル『ん〜…何か昔…見たことがあるような…無いような…』

S & L『私も…見たことあるような…無いような…感じね…』

今更だが、実はこのソウルイーターとシャドウ&ライト、遙か昔から存在するデバイスらしい  
それこそ何千年前とかの領域らしい…

しかしメモリが容量が少ないらしく、記憶は重要な事以外、全て消えていくらしい

だから昔の持ち主の事はほとんど覚えてないとか。

それと、実は物凄い危険だとか…

でも詳しくは全く分からない

極夜はこの二つを参考に、現代の技術で父さんと母さんが作ってくれた

おっと…長くなりすぎたな…

極夜『零夜…誰に話しているのですか？』

やべえ、また口に出してたか。

零夜「…読者の方虚無の存在にだ…」

極夜『…またですか…』

零夜「…それにこの父さんの本…何語だ…？全く読めない…」  
S・L「これは…古代ベルカ文字ね…さすがにこれは…ちよつと読  
むのは難しいわ…」

ソウル「つーかよオ、何でその本…影の書が図書館にあつたんだ？」

零夜「この本は影の書って言うのか。」

極夜「お二人とも無理やり話題を変えられたことには突っ込まない  
んですね…」

零夜「あー…ちよつと眠いな…極夜、今何時？」

極夜「午後九時です。」

零夜「…若干早いがもう寝るか…」

実は俺は今日と明日、はやてと一緒に寝ることになっている

理由は明日がはやての誕生日だからなんだが、俺はプレゼントをあ  
げることが出来んからな、はやてのお願いを何でも聞く  
と言うことにしたんだが…

そしたらはやてに

「じゃあ今日と明日、ウチと一緒に寝て！…」

と言われた

おっと、読者の方虚無の存在に話している間にははやての部屋に付いたな

コンコン

零夜「はやて、入って良いか？」

俺はノックして、呼びかける

はやて「うん、ええよ〜」

ガチャ

零夜「はやて、俺…もう眠いから寝ようと思ったんだが…はやては  
まだ起きてるか？」

はやて「うん、でもこの本読み終わったら寝るから、もうすぐ寝る  
よ。」

零夜「んじゃ、俺もう此処に居て良いか？」

はやて「…うん。」

零夜「……」

はやて「……………」

はやてはまだ本を読んでいたようだ

はやて「あっ……もう12時……」

もうそんな時間か、はやてを待ってたらいつの間にかそんなに時間がたってたとは……

午前0時

その瞬間

本棚の、鎖が巻かれた本が紫色に輝き出した

はやて「?……」

はやては向こう側を向いていたが光に気が付いてこちらを向いた  
そして家が揺れた



俺は飛び起き、はやてを守るように移動する

零夜「…はやて…俺の後ろに……極夜、セットアップ。」

極夜『了解……。』

俺は極夜をセットアップし、漆黒のロングコートを着て、少し薄めの黒い鞆の日本刀を、いつでも抜刀できるように構える  
抜刀術の構えだ

本は空中に浮かび上がる

紫色の光がわずかに強まり、本が鎖を破壊せんとしている

はやて「零夜君……」

はやては不安なのだろう。

俺の背中にしがみついている

そして、鎖が弾け、ページが凄まじい勢いでめくられていく。

中身は全て白紙だ

『封印を解除します』

本が喋りやがった…

『起動』

床に円のような物が引かれた

そして円の上に突然4人の男女が現れた。

服は、全員黒いインナーのような物を着ている

「闇の書の起動を確認しました。」

「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士。」

「夜天の主に集いし雲。」

「ヴォルケンリッター。何なりと命令を。」

え〜〜〜……

これどういう状況だよ……

どないせえっちゅうねん……

……今なんかはやてみたいな喋り方になったな……

とりあえず……

零夜「あの……どちら様で？」

続くぜ……

第4話 新しい家族が増えるらしいぜ」「マジかよ。」「(後書き)

ヴォルケンリッターのセリフあってるかな…心配だ…

**第5話 とりあえず自己紹介と状況整理「…まずはそれからだ…」 (前書き)**

さて、今回は守護騎士の登場2

派手に行くぜ

**第5話 とりあえず自己紹介と状況整理「…まずはそれからだ…」**

零夜「えーと…とりあえず全員椅子に座っていただいで…」

はやて「とりあえず…名前とかから…」

何があつてこうなつたかつて？

それはな…

零夜「…主…もしかしてはやての事か？」



その後、はやてを病院へ連れて行ったのだが…

この人達が付いてきて、石田先生に色々言われたが、海外に住んでる遠い親戚で、はやての誕生日に驚かせようとしてきたと説明したら納得してくれた

…あんだ少しは疑えや…

ちなみに俺も親戚ってことになってるんだが、なんか俺達二人が一緒に居るのを見ているときだけ、視線が違う…気がする…  
なんかニヤニヤしてたし…



で、最初の場面に戻るわけだ。  
分かったか？

はやて「また始まった…零夜君の虚無の存在への語りかけ…」

おっと…口にててしまったか…

口に出してしまうのはなんとかしなきゃな…

で、そのあとシャルマルさんて言う金髪の女性が自分たちの存在や、  
闇の書とかについて、はやてに説明していた

俺か？俺はとりあえずお茶を入れていた

零夜「で、はやてはどうするんだ？」

はやて「せやねー…闇の書の主として……」

おそらく蒐集を命じられる思ったのか、全員の表情が真剣になる

はやて「守護騎士みんなの衣食住を私がしっかり管理せなあかな。

「……は？」「」「」

拍子のぬけたこえが4人からでた

ちよつと面白かつたかも

はやて「みんなの服とか、買ってくるから、サイズとか、はからせてな。」

はやて、どつからメジャー出した

はやて「ポケットから出したよ」

勝手に俺の心を読まないでくれ…

はやて「それは出来へんな」

零夜「……」

つてかいつの間に読心術なんざ身につけたんだ…

しかもしゃべりながらもサイズは計ってるし…

はやて「最近身につけたんよ」（ほんまは読心術なんか身につけてへんよ）零夜君、たまに顔によくでるしな」（「

零夜「俺…ちよつと部屋に戻るわ…」

ん？その後か？

服買ってきてみてみんなが着替えてた

だがザフィーラが犬：あいや、狼になってたから着替えなかったが…

まあ本人がこの姿の方が楽って言ってたからそれはそれで良いと思う

はやてとシャマルさんが残念そうにしてたが

まあザフィーラもたまに着るって言ってたから良いだろ。

こうして、守護騎士4人が新しく家族になりました

続く

第5話 とりあえず自己紹介と状況整理「…まずはそれからだ…」(後書き)

作者：H A H A H A H A H A H A H A

零夜「ダメだ、完全に壊れてやがる。」

はやて「どうする?」

零夜「斬つとくか。」

はやて「なんでいきなりそこへいくん!?!」

零夜「斬れば直ると聞いたから。」

はやて「だれに!?!」

零夜「蒼いコートの死神に…」

はやて「それ…作者の別作品の人や!」

作者：お前じゃ俺を斬れねえよ Adios!

零夜「あ、にげた。」

??「Die!?!」

シャキイイイン!!

作者：ギヤアアアアア！

はやて「作者：斬られたんやな……」

零夜「蒼いコートの死神に斬られたんだろっね……」

この悪ふざけコーナーは続く……

…のか…？

第6話 料理で最も大切なのは調味料「いや違うだろ……」 (前書き)

さあ、そろそろ零夜と守護騎士達を絡ませていくか…

派手に行くぜ

第6話 料理で最も大切なのは調味料「いや違うだろ……」

守護騎士たちが来てから一週間ちよつとたった

最初はみんな、表情が硬かったが、今はやわらかくなってきている

まあ俺に対する警戒心はまだごくわずかにあるみたいだがな

仕方ないよなあ…… 最初にあつた時に刀構えてたからなあ……

まあ多分、なんとかなるよな。

なんか心配になってきた……

零夜「はやて、俺…まだみんなに「く」僅かに警戒されてるけどさあ…大丈夫だよなあ…」

はやて「そうか？みんな警戒してるような様子はないけど…」

零夜「普通では気付かないくらいだからな。」

はやて「大丈夫やって！」

零夜「そう…だよな…！ま、なんとかなるか！よし、今日は俺が昼御飯作るよ！」

はやて「なんでそんな突然に…」

零夜「なんとなくな！それに俺の料理をまだ食べてもらってなかったしね。」

はやて「そういえばそうやな、零夜君料理得意って言ってたし。」

零夜「でも、はやてには勝てないかな…」

はやて「期待して待つとくわ。」



はやて「んじゃ、いただきます。」

「「「「いただきます。「「「「

昼御飯はとりあえず、シンプルにオムライスを作った。  
ちよいと、隠し味を入れたがな

「「「あっ…「「「

シグナム「…これは…」

シャマル「おいしい…!」

ヴィータ「…前食べた時と味がちよつと違う…はやて、味付け変えた？」

はやて「これは私が作ったんとちゃうよ、零夜君が作ったんやで。」

零夜「…はやてには全く勝てないけどな…」

シグナム「いや、とてもおいしい。」

シャマル「とってもおいしいわ!」

ヴィータ「美味い!おかわり、ある!?」

零夜「ああ、あんまたくさんは無いけど少しはあるぞ、ほね。」

ヴィータ「ありがとう!」

思っきりがつついてんな...

シグナム「ヴィータ...食べ過ぎだぞ...」

零夜「そうだぞ、おやつにいいもん作ってやるから食べ過ぎるなよ。」

ヴィータ「はい。」

なに?おやつが何かって?

ストロベリーサンデーだよ!!

作者の趣味全開な気がするが美味いから問題ナシ!!

ザフィーラは甘いのが苦手らしいからコーヒーをいれてやろう。

ヴィータ「美味〜い!」

はやて「びっくりやなあ…こんなも作れるなんて…」

零夜「味じゃあはやてには勝てないさ…」

はやて「でも、私はこんな作られへんわ…」

味

はやて > 零夜

レパートリー

零夜 > はやて

これが現実

続く…

第6話 料理で最も大切なのは調味料「いや違うだろ…」（後書き）

作者：あゝ…続きが浮かばねえ…

零夜「まさか行き当たりばったりで書いてるのか…!？」

作者：そりゃそうだ

零夜「駄目だコイツ…」

作者：H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A

まあお前ははやてといちゃつけるから良いだろ？

零夜「そんないちゃついた覚えは無いんだが…」

作者：こっから先がだな。H A H A H A

続くかも

第7話 見た目って結構大事だぜ?」「そりゃあそつだな……」(前書き)

もう無茶苦茶だ…駄文を極めたよ俺…

第7話 見た目って結構大事だぜ?」…そりゃあそつだな…」

はやて「騎士甲冑?」

シグナム「ええ、我らは武器は持っていますが、甲冑は主に賜らなければなりません。」

シヤマル「自分の魔力で作りますから、形状をイメージしてくださいねば…」

俺達は、図書館にいた。

ザフィーラは狼形態なので、ヴィータと表で待ってるだろう。もしくは、遊んでいるだろう。

はやて「そつか…そやけど、私はみんなを戦わせたりせえへんし…」

零夜「だったら、服にすれば良いんじゃないか?俺のコートみたいな。」

はやて「そつやな!騎士らしい服!それでええか?」

シグナム「はい、構いません。」

はやて「ほんなら、資料探して、かつこええの考えてあげなな！」

で、何故にはやて達はオモチャ屋にいくんだ？

ちなみに俺はザフィーラ連れて帰宅している。

晩御飯の準備しときたいからな。

ザフィーラ「零夜、聞きたいことがある。」

零夜「なんだ？」

ザフィーラ「何故刀のみで、その2つのデバイスを使わないんだ？」



零夜「前にも言ったけど…これは父さんと母さんのデバイスで…なんかかなりヤバい代物らしいんだ…だから無闇に使って何かあったら大変だからな…」

ソウル「オイ…零夜…言つとくが次元を斬り裂いたのは俺の力じゃなくて、剣夜之力だぞ…あとお前も次元斬のやり方は教えられてたじゃないか…」

S・L「空間貫通撃ちもね。」

零夜「……そうだけど……まだ一回もまともに出来てない…」

ザフィーラ「危険と言ってるが、そもそも何が危険なんだ？」

零夜「さあ…？詳しくは聞いたことがないから…」

ソウル「ハア…わかった。」

S・L「私達が存分に教えてあげるわ…」

ソウル「あんな、まず俺達はかなり古い……原初のデバイスの時代の代物だ。」

零夜「原初のデバイス！？そんな事初めて聞いたぞ！！」

S・L『そりゃあそうよ、今初めて言うもの。』

零夜「うおい!」

ソウル『原初のデバイスとっても、原初のデバイスの中でも俺は最新型だな。』

S・L『私はその一つ後くらい。』

ソウル『で、何が危険かって言うと原初のデバイス…第一世代の代物は魔力コントロールが非常に難しいと言うことだ。』

S・L『ちよつと魔力を込めただけで凄まじい破壊力が出たり、大量の魔力を込めたのに全く意味が無かったりするからコントロールが難しい。まあ私の場合は第二世代だから、かなりマシで、普通には撃てるけど…』

ソウル『俺はそうはいかない。まずは魔力を俺に完全リンクさせなければ、扱うことすら出来ん。』

零夜「じゃあ俺は起動すら出来ないのか…」

ソウル『出来る。まあ扱えるかどうかは知らんがな。』

ザファイラ「まだ起動してないなら一度起動してみた方が良いのではないか？」

零夜「そつだな…やってみるか…」

ソウル『まずは俺からだな。準備はいいか？』

零夜「ああ、ソウルイーター、セットアップ。」

俺は真紅のロングコートに黒いズボンに上半身の、コートの下は素肌と言う、父さんの使っていたバリアジャケットに姿を変える

手には長すぎず、短すぎずぐらいの両刃剣

Wのような形の鏢の中心に翡翠色の宝石のような物が付いている。

ザフィーラ「……素肌にコート……」

零夜「……父さん……何やってんだか……。」

作者の思惑全開な気もするが、父さんのせいにしておく。

ソウル「……魔力をリンクさせてみる。」

零夜「どうやるんだよ。」

ソウル「魔力を丁度良いくらいにコントロールしながら俺に魔力を込める。」

零夜「……難しいな……」

その後、俺は30分程で完全にリンクさせることが出来た。

ソウル『まさかここまで早く出来るとは...』

え？何？そんなに難しいのか？

ソウル『魔力コントロールが上手すぎるな...これは面白い...だが続きはまた今度だッ!』

なんでコイツはこんなにテンションが高いんだ…

だがそろそろ晩御飯の準備をしなければ…

晩御飯は…何にするかな…

夕方過ぎ位にはやて達は帰ってきた。

どうやらデザインは大体決まったらしい

ちよつと楽しみだ。

はやて「さて！みんなの騎士甲冑、いよいよお披露目や！」

零夜「おお〜…」

パチパチパチ…

地味に拍手しておく俺

はやて「さあ！みんな！着替えるんや！」

「」「」「はい！」

零夜「おお〜…みんなよく似合ってるな…」

まあその後、俺も着替えさせられて一緒に並ばさせられたのは秘密。

続く…



第7話 見た目って結構大事だぜ?」…そりゃあそつだな…」(後書き)

作者：はあああああ…

零夜「作者、落ち込んでるなあ。」

はやて「ほんまやなあ…」

零夜「続きがなかなか思いつかない上に、小説に手が着けられてない事に悩んでるらしいよ。」

はやて「なんでや…」

作者：なかなか思いつかず、さらにはFF13を一日始めたからな…

零夜「ヲイ」

続くかもな

第8話 模擬戦と言つ名の真剣勝負「いやそれおかしいから!」(前書き)

サアアアテエエエ!!今回は戦闘だアアアア!!  
俺の本領発揮だア!!

第8話 模擬戦と言つ名の真剣勝負「いやそれおかしいから!」

始まりは、はやての一言だった

はやて「零夜君はどれくらい強いん?」

零夜「何故こうなったし。」

シグナム「さあ!戦<sup>や</sup>るぞ、レヴァンティン!」

レヴァンティン(以下面倒なのでレヴァ)『ja wo hī!』

零夜「何故こうなったし。」

極夜『諦めたほうがよろしいかと。』

とにかく何があったか聞いてくれ

何？そんな事はどうでもいいから話を進めろ？

だが断る

はやて「零夜君は確か自分で戦士<sup>ソルジャー</sup>って言ったよな？」

零夜「まあな。父さんと母さんもそう名乗ってたからな。」

はやて「で、シグナム達が騎士…どう違うんかよくわからんなあ…」

シグナム「あ…その…なんと言いますか…」

シヤマル「えっと…凄くわかりやすく言ったら、ベルカの優れた魔導師って事ですね。」

零夜「んで、戦士<sup>ソルジャー</sup>ってのは簡単に言えば、”戦う場所を自分で決めて人の為に戦う傭兵”だと言われている。」

シグナム「言われている？」

零夜「詳しくは知らん。なにせ、俺の先祖の時代から…地球で言ったら戦国時代ぐらい…向こうで言えば…古代ベルカ時代ぐらいの時代から名乗ってるらしい…と言うか、別に一子相伝とかじゃないから多分、先祖ってのはあってんのか間違ってるのかわからない…  
…ただ…」

はやて「…ただ…？」

零夜「戦士ソルジャーの名を受け継ぐには、先代から継承を許可された時…俺は許可されたけど…まだ自分に自信がない…」

はやて「自信ない言うけど…零夜君はどれくらい強いん？」

零夜「さあ…前まで居た世界の原生生物は全種類倒したけど…後は父さんと母さんには全く勝てなかったくらいかな…」

シグナム「……！！では主はやて！私が強さを見極めて見せましょー！！」

零夜「いや、しんどいんだが。」

ヴィータ「諦めた方がいいぞアニキ…シグナムは戦闘狂だからな…」

マジかよ…

ちなみにヴィータはなぜか俺のことをアニキと呼ぶ

何でだろうな

シグナム「シャマル！何処かの無人世界かどこかに転送を…！」

ウワァーオ

この人本気で戦るつもりだよ…

で、最初の場面に戻る訳

Do you understand? (理解したか?)

零夜「ハア…極夜…頼む…」

極夜「了解。」

うーわ…シグナムの目がめっちゃ輝いてる…  
怖え…

今言つのもアレだが、シグナム達に  
「家族なのだから敬語は止めてくれ」  
と言われたので止めました。

ま、自分達からはやて対しては当たり前だけど敬語になるらしい。

……… ヴィータは普通に喋ってるけどな…

おっと…そろそろか…

零夜「…非殺傷設定ですよね…？」

シグナム「安心しろ、絶対に殺しはしない。刃は魔力で潰してある。」

零夜「…要するにそんな便利なもんついてねーよってことか…」



シグナム「さあ行くぞッ!」

ゴッ!

いきなり突っ込んできたアーーーーッ!!!しかもはええええええええええええ!!

ガキイン!!

零夜「ウオツ!」

シグナム「クッ!」

横薙の一閃を受け止める

シグナムが押し切ろうとするが、俺は押し返す

零夜「タアッ!」

そのまま俺が押し切る。

シグナムは後ろに跳ぶ

だが俺は追撃する。

逆袈裟からの斬り下ろし . . . . .

. . . . . 避けられる

そのまま斬り上げる . . . . .

受け流される

だが斬り上げた勢いで飛び上がり、後ろ回り込み、反転しながら斬りつける

零夜「タアッ！」

ガキン！

零夜「んなっ！？鞘！？」

鞘で防がれるとは…

シグナム「やるな…！」

零夜「クツ…」

俺は後ろに飛ぶ

予想外の事態が起きたときには一度下がり、体制を立て直せ。

父さんに言われた事だ。

シグナム「レヴァンティン！！カートリッジロード！！」

レヴァ 『explosion』

ガコン！！

ゴウツ！！

うおお…剣めっちゃ燃えてるし…マジかよ…この人本気で潰しにかかってきてるよ…

魔力で刃潰した意味無いじゃん…

シグナム「紫電…一閃！」

零夜「極夜、やるぞ。」

極夜「分かっていますよ。」

零夜「行くぞ…雷龍爪！」

バチバチッ！！

極夜が激しく帯電する。

俺は帯電した刀で燃え盛る剣を迎え撃つ。

零夜「オラアアア！！！」

ガキーン！

ゴオッ！！

ぶつかり合った衝撃波だけでクレーターが出来る。

そして罅迫り合いへなだれ込む

シグナム「ウグッ…」

零夜「ハアアア…！」

ガキン！

再び離れる

シグナム「レヴァンティン…！」

レヴァ『schlange form!』

零夜「うおっ!?!」

剣が伸びた!?!?

…いや…あれは…蛇腹剣…鞭状連結刃…か…厄介だな…

シグナム「ハアアアアッ…！」



シグナム「ああ…」

小さな声で言った。

んでもって帰宅。

続くッ！

第8話 模擬戦と言つ名の真剣勝負「いやそれおかしいから!!」(後書き)

作者：やはり戦いは良いものだなアアアアアアアアアア!!  
ヒヤハハハハハハハハハハ!!

零夜「出た…作者の病気が…」

作者：すげえどうでも良いけど、この小説の話の先が全くみえねえ…

零夜「物凄い突然だな！オイ!!」

作者：ま、気分とノリだけで書いてるからだろうけどな

零夜「オイ!!」

作者：H A H A H A H A H A H A



続けようかな。

第9話 とりあえず謙遜はしすぎるな」…意味分からん…」(前書き)

相変わらずサブタイが意味不明



シヤマル「零夜君だって黒い雷を刀に纏わせてたじゃない。」  
零夜「いや、あれは仕方なく…」

ヴィータ「アニキ！今度はあたしに見せてくれ！」

零夜「あ…ああ…」

何か物凄い気迫なんだが…

ま、いつか。

続  
く

第9話 とりあえず謙遜はしすぎるな」…意味分からん」(後書き)

零夜「短すぎんだろ!!」

作者：What's you say? (何か言ったか?)

零夜「…斬る!!極夜!」

極夜「…ハア…了解…」

零夜「うおらあああ!雷龍爪!!」

作者：H A H A H A H A H A H A H A H A H A  
!きかねえよ!!その技、誰が考えたと思ってるんだア!?

零夜「何ッ!？」

作者：わざわざ俺が体現して作った技だぜエ?

ハッハ―!!吹っ飛びなア!!

Real impact!!

零夜「ギヤアアアアアアアアアア!!」

きつと続くわー！

第10話 なんてことはないただの一日」…まあそれもいいか…」（前書き）

さあ、今回はなんてことのない一日

だがしかし…

今回も派手に行くぜ



第10話 なんてことはないただの一日」…まあそれもいいか…」

もうじき6月も終わり。

後僅かで7月だ

零夜「暑い…」

はやて「ほんまやなあ…」

ヴィータ「アイス…食べたい…」

零夜「お前さつき3本も食べたたる…これ以上は腹壊すぞ…」

ヴィータ「でも暑いし…」

零夜「まあ食べたければ食べればいい……どうなるかは知らんがな……」

零夜「昼御飯…何作ろうか…」

はやて「冷麺にせえへん？」

零夜「そうするか。」

はやて「それじゃ、いただきますー！」

「…………いただきます。」

ヴィータ「ん〜！やっぱりはやてとアニキの作った料理はギガうま  
だなー！」

シャマル「負けてられない…今度私も…」

「…………それだけは止めてくれ！！…………」

シャマルの料理は…ダメだ…壊滅的とかの次元じゃない…

あれは暗黒物質だ  
ダークマター  
いや、未元物質か？

まあとにかく不味いとかの話じゃない。

いや…もうアレは食べ物ではない…

一部見た目からヤバいのもあるしな…

食べた俺が3日間寝込んだからな。

さて…夜になった

…そろそろ…

行くか…

第10話 なんてことはないただの一日」…まあそれもいいか…」（後書き）

作者：さて…そろそろ本腰を入れますか…

零夜「まさか本気ではなかったのか!？」

作者：いや、俺の本領発揮の先を見せてやるよ…戦闘という名のな  
!!

続けてやるぞ

第11話 戦っている時こそ！俺も貴様も充実しているのではないのかッ！！

サブタイのネタが分かる方は居るでしょうか…？

あと、感想制限外しました

小説タイトル変更しました

今回も派手に行くぜ

第11話 戦っている時こそ！俺も貴様も充実しているのではないのかッ！！

深夜

零夜「……こっちか……」

俺は今、一人で町を歩いている。

はやてや守護騎士たちは全員よく眠っている。

何故、こんな事をしているかと言つと……



少し前から現れる、強力な謎の魔力反応を調べるためだ。

もし、はやて達に危害が加わるようならば、斬り捨て、撃ち抜かねばならない。

112

零夜「……………結界……………!!」

B i n g o ……

零夜「大当たりだ……………! 数日間粘ったかいがあった……………」

極夜『魔力や気配を隠さなくていいのですか?』

零夜「いや、いい。あの状況下で彼女達に気付かれるほど俺は弱くはないだろう？まずはただ隠れて観察だ。」

零夜「行くか…」

数メートル歩いた先

二人の魔導師…年齢は俺と同じくらいの女の子が…

白い服と黒い服…

その二人が今にもぶつかり合わんと対峙している。

よく見れば、間にはなにか…水色の宝石のような物が浮いている。

……ロストロギアの類か<sup>たぐい</sup>…

…あんなモンをあんな女の子達が欲しがるとはな…

恐ろしい時代が来たモンだぜ…

……何で俺こんなオッサンくさいセリフ言ってんだ…？

俺…まだ9歳だぞ…

はやてと同じ年齢だぞ…

極夜『彼女達…話は終わったみたいですよ…』

零夜「む…このままだと戦うになるな…止めた方が…っってもう無理か…！」

二人ともぶつかり合おうと既に突っ込んでいる

極夜『……！何者かが転移してきます！』

零夜「何ッ……！」

二人の女の子の間に黒い服の一人の少年が割り込む。

零夜「……管理局員……か……。」

しばらく様子を見ようとした瞬間。

黒い服の女の子の側に犬のような耳の付いた女性が魔力弾を放つが、少年の障壁に阻まれる。

さらに撃ち続けるが避けられている

その隙に、金髪の黒い服の女の子が宝石を回収しようとした時、真つ黒少年が魔力弾を撃とうとしている。

まさか本気で撃つ気か！？

そして……発射された……

この距離では回避は無理だろう……

そう思った瞬間

魔力弾が叩き斬られた。

俺のバリアジャケットに似た、少しデザインが違う黒いコートの少年が手にした刀で切り裂いたのだった

そして、俺はその少年の右手に握られた刀から目が離せなかった。

なぜなら

色違いの極夜が握られていたのだから…

黒いコートと金髪少女と犬耳の女性がそのまま飛び去った

そして…無意識の内に、俺はそいつを追いかけていた…

そして追いつき…転送される前に…

俺は斬りかかっていた…

ガキン！

??「チツ…管理局か…!? フェイト！アルフ！先に行け…！俺がこいつを引き受ける…！」

フェイト「でも…火彩ひいろが…」

零夜「うおおおおお…！！！！！！」

ガキン！

火彩「急げ…！！コイツは俺の仕事だ…！！」

アルフ「フェイト…」

フェイト「…絶対帰ってきてね…」



ガァン！

ガキン！ガキンガキンガキン！

ギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリ！

キーン！

火彩「……行つたか……」

零夜「……お前は何者だ……」

火彩「……どうした”刀夜”？もう終わりか？だらしないな。」

零夜「なんだと！負けているのはそつちだろう！……！？」

突然の問いかけに、俺は初めからどう返せばいいか知っていたかの  
ように返す

そして、”刀夜”と言う名前……

俺の名前は影宮零夜のはず…ならなぜ…” 刀夜”と呼ばれ、反応し  
た…

火彩「…ヤツパリな… ……会いたかった…会いたかったぞ！！  
刀夜アアアアア！！！」

ヤツ…ヒイロと言ったか…ヤツが突っ込んで来た

続く！





第12話 大切な思い出は決して消えることはない「…ああ…そうだな…」 (前)

今回は重要な話

第12話 大切な思い出は決して消えることはない「…ああ…そうだな…」

火彩「刀夜アアアアアア!!!」

ガキイン!

零夜「クツ…俺は…刀夜なんて…名前じゃ……ない!!!」

火彩「いいや!体は違おうとも、お前の魂は刀夜だ!!!」

ガキン!ガキン!ガキン!

零夜「訳のわかんねえこと…言ってんじやねえええ!!!」

シャキイン!

火彩「…チツ…やはり…記憶が…クソツ!」

ヤツの刀が燃え上がる

火彩「思い出せ!」刀夜”!!!炎龍爪!!!」

ゴウツ!

零夜「何なんだよ!お前はア!!!雷龍爪!!!」



「アア！！」

高速で踏み込みながら薙払うように斬り込む。

ガギイイイン！

火彩「うおッ！？」

ドゴオン！

大剣の腹で防がれるが、無駄だ。

衝撃で吹き飛ばしてやった。

だがまだ終わらん！

バチッ！バチバチバチ！

激しく帯電し、黒い雷が刀身に集まって行く

零夜「ライトニングドライブ！」

刀身に集まった雷を吹き飛んだヤツにお見舞いする。





零夜「何なんだよ……」

火彩「俺の名前は やみさきひいろ 闇咲火彩、魔力は影と火炎の魔力変換資質、戦士《ソルジャー》の一人……」

影……聞いたことがないな……

火彩「一応、影の魔力はお前が使っていたんだぞ？それに俺とお前で伝説とか言われてたらしいしな……」

零夜「俺が……？お前と……？……うっ……！」

頭が……痛い……！？

火彩「おい！？大丈夫か！？」

なんだ……これは……！？

頭の中に……何か……

「……うっ……うっ……」

「んなっ!?!」

「…勝負あり…だな…」

「チエツ…これで100戦40勝40敗20引き分けか…」

「記念すべき100戦目は俺の勝ちだな!火彩!」

「次は負けねえぞ!刀夜!」

「刀夜!そろそろメシにしようぜ!」

「慌てるな火彩…落ち着け…!」

「……ざっと1000000……か……相変わらず無茶だな……火彩……」

「ハッ！刀夜……お前は人のことは言えないだろ……」

「さて……そろそろ行くか？」

「ああ……行くか……」

「夢を抱け……」

「ソルジャー戦士の誇りは……！」  
「絶対に忘れるな……！」

シャキーン！







火彩「ああ…それはな…時空管理局が俺達を蘇らせようとしたらしくてな…何せあの時死んだ後…どう言うわけか、伝説の戦士達とかなんとか言ってるちょっと有名になったらしくてな…まあ…肉体は…子孫の体らしいけどな…」

零夜「…とにかく…問題は管理局か…やはり腐ってやがるな…」

火彩「厳密には、”上層部”がだいな。」

零夜「…うかつにつぶしにはかかれないな…」

火彩「オイオイ、何百年かぶりに親友同士が再会出来たんだ、しけた話はまた今度にしようぜ。」

零夜「まあ…魂は再会できた訳だから…」

続く…



第12話 大切な思い出は決して消えることはない「…ああ…そうだな…」(後

作者…：今回はふざけねえぜ…さすがにな…

零夜「…。」

火彩「…。」

作者…：……。

続く…のか…？

第13話 懐かしい思い出は何時も綺麗なのさ……それでもいいじゃないか……

さあ、今回は零夜と火彩の会話だけ

ゆえに短いです

だが

派手に行くぜ

第13話 懐かしい思い出は何時も綺麗なのさ……それでもいいじゃないか……

火彩「英雄になりたければ夢を持って、ソルジャー戦士の誇りは決して忘れるな、魂は常に強くあれ。」

零夜「俺が言った言葉だな……覚えてたのか……」

火彩「そつだ……ソルジャー戦士ではお前のほうがもともと先輩だったんだよな……」

零夜「ああ……」

火彩「いまはどうよ？何やってんだ？」

零夜「まあ家族と楽しくやってるさ。お前は？」

火彩「フエイト……さっきの子と捜し物をな。」

零夜「それは、あの水色の宝石みたいなヤツか？」

火彩「ああ、ジュエルシードと言っらしいんだが……」

零夜「……なるほどな……お前は……（ニヤニヤ）」

火彩「……なんだその（ニヤニヤ）って……」

零夜「いや、何でもない。」

火彩「お前はどうなんだ……」

零夜「まあ…色々あったな…住んでた世界が吹き飛んで、両親は生きてんだか死んでんだか分からないし、地球に飛ばされて、…まあ…今は知り合いに居候させて貰ってる。」

火彩「へえ…今度、暇ができたら行っても良いか？」

零夜「ああ、いつでも歓迎だ…」

零夜「…もう夜明けか…」

火彩「昔も…こうやってよく日の出を見たよな…」

零夜「ああ…」

火彩「…懐かしいな…」

零夜「…：…そう言えば…帰らなくて大丈夫なのか？彼女達が心配してるんじゃないのか？」

火彩「そうだった…！悪い！また今度会おう！」

零夜「ああ……！じゃあな……」

……

火彩「……ただいm「火彩！」あぐぼああ……！」

フェイト「火彩おお……全然帰ってこないから心配したんだよ……」

火彩「あー……すまん……色々あってな……」

フェイト「あの人は……誰？」

火彩「ああ…アイツはな…俺の大切な…」

-  
- 親友だ  
-  
-

続く…

第13話 懐かしい思い出は何時も綺麗なのさ…」「それでもいいじゃないか…

作者：思い出って結構美化して行くよな

零夜「一部な。」

火彩「古いほどな。」

作者：すぐ記憶が消えていく俺が言うなって話だがなwwww

零夜「アレか、お前昨日の晩飯覚えてないとかそんなだろ。」

火彩「昔の話だされたら、（俺は過去を振り返らない）とか言っ  
てごまかすパターンだな。」

作者：いや、ストレートに覚えてないと言うが？と言うか…興味な  
いね…

続くと思われる

第14話 あまり家族に心配はかけるなよ」「お前が人のことと言えるのかよ……」

今回は怒られる話

何？

訳が分からないよ？

なら本文を読むんだ。

派手に行くぜ



第14話 あまり家族に心配はかけるなよ」…お前が人のことと言えるのかよ」

零夜「4…30…よし…まだみんな寝てるな…」

つてか俺傷だらけじゃないか…不味いな…俺治療魔法なんか使えな  
いぞ…

まあほっとけば治るだろうが、あまり心配を掛けてはな…

まあいいか

そんな事より…眠いな…

零夜「2時間程寝るか…」

本当に2時間後

零夜「うん…？うあああ…：…本当に丁度2時間かよ…：」

さて…そろそろ起きなければな。

零夜「はちて、おはよう。」

はちて「あ、おはよう零夜君。」



はやて「……………ていつ！」

零夜「……………ぐっ……」

傷口を叩くとは……なかなか……！  
だがソルジャーをなめてもらってはこまる！  
こちらら全身に銃弾浴びて剣で切り裂かれて、大砲の直撃を食らっても生きてるのだよ！

だから傷を軽く叩かれた程度では……

はやて「……………ていつ！」

零夜「うがあっ！？」

まさかの締め付け……だと……！？

力が入ってないのに……痛い……だと……！！

はやて「ヤツパリ無理してる！」

零夜「……大丈夫だ……問題ない……」

はやて「死亡フラグ建ててどないすんねーん！」

バコーン！

零夜「うおおおお…痛てえ…」

はやて…どっからハリセンだしたんだ…

ガチャ…

シャマル「おはようございます、はやてちゃん、零夜君…って…どうしたの！？その腕！？」

零夜「…朝から走って思いっきり転けた…」

シャマル「これ…転けたとかじゃないでしょ！明らかに火傷じゃない！」

零夜「……………」。

はやて「れえええいいいいやああくううん！！？何があつたんやあああ！？何してたら火傷なんかするんやあああ！？」

シャマル「とにかく、すぐ治療しますから！後で話はきかせてもらうわ！」

朝から憂鬱だ…

ツイてないぜ全く…

はやて「で？朝早くから何してたんや！？」

零夜「え〜…色々細かい話を飛ばすと…深夜からずっと親友と大ゲンカしてました…」

「「「「友達いたのか！」「」「」

零夜「……………居るよ…一人だけ…」

ヴィータ「て言うか…どんなケンカしたら腕に火傷に全身傷だらけになるんだよ…」

零夜「刀で斬り合いを……………こっちは黒雷、あっちは蒼炎を纏いながらだけ。」

「……………それはケンカじゃなくて殺し合いだ!」「……………」

零夜「なん…だと…」

ちなみに今の俺の表情

(。 。 ; ) なん…だと…! ?

零夜「昔からこうだったからな…」

シグナム「昔って…4歳から歳くらいからそんな事してたのか…?」

零夜「あゝ…そこんとこ説明しなければな…」

続く…



第14話 あまり家族に心配はかけるなよ」…お前が人のこと言えるのかよ…」

作者：家族に心配を掛けるなよ

零夜「アンタが他人のこと言えんのか！！」

作者：うるせえ！お前よりはマシだ！

零夜「言ってるのはお前の頭がだよ！」

作者：黙れッ！！そんなお前ッ！修正してやるッ！

バコーン

作者：ガハッ…

はやて「これでよし。」

零夜「はやて…ハリセンなのに物凄い音になったんだけど…そして作者が気絶してるんだが…」

はやて「気にしたらあかんよ」

作者：なかなかやるじゃねえか…グフッ…

続かないと思っていたのか！

第15話 俺は英雄じゃない、これまでも、これからも……お前は英雄じゃない

今回は零夜の昔の回想 part 1

サブタイのネタわかる人いるかな……

ヒントは某固体金属の歯車の蛇

派手に行くぜ

第15話 俺は英雄じゃない、これまでも、これからも……お前は英雄じゃない

零夜「そうだな…何処から話すかな…まああの辺で良いか…あれは…もう何百年も前…古代ベルカの時代…ああ、はやてに分かるように言えば…丁度日本の戦国時代くらいだな…まあその頃俺はあ  
る傭兵団に居たんだが…」

-----

火彩「刀夜！オイ刀夜！」

刀夜（零夜）「なんだよ火彩…うるせえな…」

火彩「お前、正気か！？この傭兵団を出るなんて、何考えてるんだ！？」

刀夜「…火彩…俺はもう無意味な戦いは嫌なんだ…金だけ貰って、戦い、人を殺し、全てを破壊し…消し去る…それが…それが何になるんだ…！」火彩「だからって、どうするつもりだ！？傭兵団を抜けて、傭兵を続けるにしても、依頼主クライアントをどうやって探すつもりだ！？」

刀夜「…もう…俺は傭兵ソルジャーにはならない…！」

火彩「…お前…じゃあ…普通の生活をするのか！？」

刀夜「いや…俺の手は…もう血で汚れすぎているさ…何より…俺の血が…細胞が…遺伝子が…俺のありとあらゆる全てが戦いを欲している…もう普通には戻れないさ…！」

火彩「だつたら！此処にいるよ！！此処でなら！お前は普通に居られるだろ！」

刀夜「けどな…火彩…俺はな…やりたいことが見つかったんだ…！」

火彩「やりたいこと…？」

刀夜「もっと…もっとたくさんの人々の為に戦う…金額だけで依頼主クライアントの指示を聞くのではなく…もっと”心から助けを求める人達”のために…俺は戦いたい…傭兵ソルジャーとしてではなく…1人の戦士ソルジャーとして…！」

火彩「戦士ソルジャー…！」



ドアを開けると、火彩が立っていた

刀夜「…火彩…」

火彩「見送るよ…」

刀夜「…ああ…」

火彩「…」

刀夜「…懐かしい…な…2人でよく失敗をやらかして、団長に謝りに行ってたよな…」

火彩「ああ…そうだな…「自分で戦車潰しちゃいました!」とか、「足止めのはずが間違っで全滅させてしまいました!」とか。」

刀夜「その後、団長に何故か「なかなかやるようだが、儂を超えるには、まだまだだな!ワツハツハツハツハ!」とか言われたけど。」

火彩「全く…良い人なんだか…バカなのか…」

刀夜「けど…強さは本物だな…力も心も…」

火彩「頭の良さもな…」

刀夜「さて…見送りは、門まででいいぞ、火彩。」

ガチャ…

「「「「「「「「「「刀夜さん！本当に此処を出るんですか！」「」「」「」

たくさんの仲間達が建物の外に来ていた。

行かないでくださいよ！

とか

何でなんですか！？



とか

色々と聞かれる。

刀夜「…すまない…」

俺には謝る事しかできない。

団長「コラコラお前ら！そんなんじゃ刀夜が旅立てないぞ？いくら龍神傭兵団最強の雷光ライティングシャドウの影と呼ばれてるからって、ずっと個々に居てくれる訳じゃないだろ？」

刀夜「団長…」

団長「ま、気持ちは分からんでもないがな。今や刀夜と対等に戦えるのは火彩位だからな。」

火彩「対等すぎて決着がつきませんがね…」

団長「…まあ…とにかく…刀夜！何かあったら儂らに言え！お前は離れても儂らの仲間だ！そして何時でも戻ってきてかまわないぞ！」

刀夜「ありがとうございます…団長…」

火彩「刀夜…元気でな…」

刀夜「火彩…ああ…！」

刀夜「じゃあ！また会おう！みんな！」

火彩「行った…か…」

団長「これからは、お前さんに頑張ってもらわなきゃならんな、火彩。」

火彩「ええ…」

団長「アイツに言われて初めて気付いた…今までの儂らがどんな戦いをしてきたのか…」「ただ戦うだけでは駄目だ…！」か…」

火彩「…俺も同じ事を言われましたよ…」

団長「しかし…儂らは…戦うことでしか自分を表現できない…だから…せめて…人の為に…戦うことにしよう…」

火彩「…はい…！」

団長「さあ！みんなを集めてくれ！みんなにこれからのことを話さなければならん！」

刀夜「さて…まずは何処に行くかな…」

極夜『魂に従って進むとか言っただけでなかったか？』

刀夜「だから迷ってたんだろうが…」

極夜「目的地が無いくせによく言っただけ。」

刀夜「ま、いいか…適当に進むとしよう…」

続  
く  
…

第15話 俺は英雄じゃない、これまでも、これからも……お前は英雄じゃない

作者：回想が予想以上に長くなってしまった……  
まさか分けるハメになるとは……

零夜「下書き書いたんじゃないのか？」

作者：なんか改変し過ぎて原型がなくなりつつある……

零夜「しかも授業中に下書き書いてたんだって？」

作者：懐かしいねえ……中3を思い出すなあ……

零夜「確か作者火曜日から中間テストじゃ……」

作者「テスト？興味ないね。」

続く……だと……

第16話 フラグは建てすぎるのは良くない」…お前は死亡フラグ建てまくっ

零夜の回想 part 2

やばい、過去回想編だけでかなり長くなりかねん。

派手に行くぜ

第16話 フラグは建てすぎるのは良くない」…お前は死亡フラグ建てまくって

刀夜「さて…次は何処に行くかな…」

あれから、2年が過ぎた

俺は戦士<sup>ソルジャー</sup>として、あらゆる世界を巡り、人助けをしていた

わかりやすく言えば旅する何でも屋だ

今は砂漠のど真ん中を歩いている



刀夜「…流石に…暑いな…」

砂漠を大量の水と少しの食料でわたろうなんざ無茶だったか…

まあ金なかったから水しか買えなかったんだが。

まあしばらく歩き続けた…

刀夜「あゝ…くそっ…ふらふらする…今何処だ…？」

俺は地図を取り出す…

刀夜「いまが…このオアシスか…ベルカの王国の近くだな…行ってみるか…」

俺は夜になる前にはベルカにたどり着けた。

入るのに少し時間はかかったがな…

戦争やってるから仕方ないか…

と…まあ俺は城下街にやってきた

此処なら宿もあるし、情報も手にはいるだろうしな。

刀夜「…へえ…なかなか良い街だな…」

極夜「全くだ。戦争中とは思えんほど綺麗な街だな。」

刀夜「とにかく、今日は宿を探そう。一番安いところだな。」

極夜「…野宿でよいのではないか？野宿ならタダだぞ。」

刀夜「バカか…野宿だと深夜に見つかったら面倒なことになるだろう…」

極夜『それはそうか…戦争中だから敵が潜入してきたみたいに勘違いされたらたまったもんじゃないしな。』

刀夜「…どこが一番安いだろうか…誰かに聞くか………」

俺はたまたま通りかかった通行人に尋ねた。

どうやらこの先の路地の角の所らしい。

刀夜「ありがとうございます…では…」

歩いていると…挙動不審な金髪の少女を見かけた。

周りをキョロキョロと見渡している。

道に迷ったのだろうか…

残念ながら俺はお人好しなので、そう言うのは放ってはおけないのだった…

刀夜「…大丈夫かい…？」

??「え…あ…いや…」

刀夜「…道に迷ったのかい？」

??「いえ…そう言う訳では…」

刀夜「…家出…か…？」

??「え…ええ…まあ…そんな所です…」

刀夜「…帰った方がいい…この国は戦争中なのだろうか？いつ何が攻

めてくるか分からない…死にたくなければ悪いことはいわない…」

??「…家の中にも…何も変わりません…何処に行っても…結局戦いばかりです…」

刀夜「…なら君は…何故人々が戦ってると思う?」

??「え…?」

刀夜「どう思う?」

??「…わかりません…何故みんな戦っているのか…」

刀夜「少し難しかったかな?けど、この答えは人から教えてもらっては駄目なんだ…自分で気付かなければならないモノだからね…」

??「自分で…」

刀夜「…すまない…話がだいぶそれてしまったね…君は家出したのはいいがどうしようもなく途方にくれていた、そして家には帰りたくない…そう言うことでいいか?」

?「…はい…」

「一番安い宿でいいなら、付いてくるといい…まあ…数週間くらいはこの街にはいるからな…どうする?」

?「お…お願いします…」

顔が紅いな…何でだ?まあいいか

刀夜「おっと…自己紹介がまだだったな…俺は影宮刀夜。戦士ソルジャーをやっている。」

？「戦士ソルジャー？」

刀夜「分かり易く言えば、世界中を旅する何でも屋と言ったところだな。」

？「わ…私は…えっと…えっと…ヴィヴィオと言います！」

よく見たら赤と緑の虹彩異色の瞳か…随分珍しいな……ん…  
？……どっ……かで……気のせいか…

刀夜「じゃあヴィヴィオ、いくか。」

ヴィヴィオ「はい！」

刀夜「ッ！伏せる！」

ヴィヴィオ「え？きゃあ！？」

俺はヴィヴィオを抱え込み、地面に伏せた

刹那、ヴィヴィオの頭があった場所に弾丸が飛んできて、地面にめり込んだ

刀夜「そこか！」

一瞬何かが光った瞬間に俺は雷を放った  
黒雷は夜には認識しにくい

叫び声が聞こえてきた

直撃だな



続  
く  
…

第16話 フラグは建てすぎるのは良くない」…お前は死亡フラグ建てまくって

作者：はつきりとしたStsフラグとVividフラグを建ててる俺。

零夜「死亡フラグの塊の作者が死亡フラグ以外を建てるのは珍しいな。」

作者：もはや存在そのものが死亡フラグと化してしまったぜ

零夜「行動、言動、ほとんど全て死亡フラグだからな。」

作者：中学時代で50000本くらい死亡フラグ建てたぞ。まだ回収されてないけど。

零夜「されたらダメだろ…」

作者：いつでも死ぬ覚悟はできてるぜ

続ける…！続けてみせる！

第17話 秘密を暴露されたからといってショックを受けるとは限らない」…

あまりびっくりされなかったサプライズとかね。

今回は戦い！戦闘！バトル！

派手に行くぜ！

第17話 秘密を暴露されたからといってショックを受けるとは限らない」……

次の日

刀夜「さて……」

一応、何も無かったな……

しかし……昨夜の狙撃は明らかにこの子を狙っていた……

何故この子が狙われた……？

金髪で虹彩異色、色は紅と翠……

やはりなにか引つかかる…

ヴィヴィオ「…ん…」

刀夜「…起きたか…」

ヴィヴィオ「…ん…ん…おはようございます…刀夜さん…」

刀夜「ああ…おはよう…」

何にせよ、昨夜のヤツだけで終わると思えん。

十分に警戒するか…

いや、狙われるなら何かある…家に帰すべきだろうか…

しかし本人がそれを拒んでいる…

さて、どうするかな…

ヴィヴィオ「あの…刀夜さん…？」

刀夜「ああ、すまなかつたな…朝食、食べに行くか。」

ヴィヴィオ「はい！」

俺とヴィヴィオは朝から市場を歩いていた。

ヴィヴィオは昨日とは違う髪型になっている

昨日はくくっていた髪を今日は下ろして、前髪で片目を隠している

オッドアイを隠すためか？

まあ珍しいからな…

刀夜「おっ、美味そうな果物だな…少し買ってみるか…すみません、これを4つ…」

「あいよゝ4つだな〜！」

店主よ、なぜ俺達をニヤニヤしながら見る。

「ほい！」

刀夜「……店主…なんか色々多いんだが…」

「オッサンからのサービスだ！兄ちゃん、旅人だろ？この辺じゃ見ない顔だからな。」

刀夜「まあ…そうですね…」

「その可愛い嬢ちゃんも、あまり見かけないけどな。」

ヴィヴィオ「え…ええ…まあ…あまりこっちに来てないですから…」

刀夜「じゃあ…そろそろ行きますので…」

「おう！あんがとな！また来てくれよ！」

刀夜「さて…ヴィヴィオ…何か欲しい物は…」

つて…なんじゃそりゃあああ！！いつの間にそんなに大量の物を  
買っていたんだ！？！

ヴィヴィオ「禁則事項です」

心を読むなあああ！！

つてあれ？もしかして…俺より金持ってる！？

刀夜「負けた…」

ヴィヴィオ「？どうかしたんですか？」

刀夜「気にするな…自分の儲けの少なさと言う絶望に打ちひしがれ  
てるだけだから…」



14歳ぐらいの少女に負けてる俺って…

つらいな…

泣けるぜ…

と、まあいつまでも絶望に打ちひしがれてる暇は無いので、昼にな  
ったので昼食を食べることにする

だああ!! やっぱりここでもって自分に対する絶望があああ!!!!

んでもって夜

ヴィヴィオ「今日は楽しかったですね」

刀夜「あ…ああ…」

俺は精神がボロボロだけどな…

そう言えば、こんな噂を聞いた

『この国の次期王女が行方不明だ』

…きつと重圧に耐えきれずに逃げたのだろう…

刀夜「この国も大変だな…次期王女かなんかが行方不明らしいし…」

ヴィヴィオ「うえっ！？え…ええ…そ、そうですね…」

刀夜「全くだ…！！…ヴィヴィオ…急ぐぞ…！」

ヴィヴィオ「え？」

刀夜「昨日のヤツか…その仲間だ！」

マズいな…俺一人だけなら全員瞬殺できるが…

刀夜「ヴィヴィオ…どこかに行き止まりは無いか？」

ヴィヴィオ「えと…たしかこっちです！」



パチン…

神速の抜刀術でまず二人を斬り捨てる

「あ…が…！」

「あぐががが…！」

ドサッ

地面に落ち、絶命。

刀夜「次！」

一足飛びで三人固まって居るところに飛び出し

刀夜「タアッ！」

飛びこみながらの回転切り



刀で銃弾を斬り捨てながら飛び込み

刀夜「雷龍翼！」

刀の攻撃範囲を雷で延長して、4人全員を斬る。

4人同時に絶命

「ダメだ！逃げろ！」

「勝てるわけ無い！」

二人逃げだそうとする

だが、逃がさん



刀夜「雷龍破!!」

刀に黒雷を纏わせ、突き出す

刀の先端から雷撃が飛び出し、龍のような形になり、逃げだそうとする二人を容赦なく殺す。

残り6人

「うっ…うわああああ!!」

一人が発狂したのか、剣を無茶苦茶に振り回しながら、突っ込んでくる。

刀夜「極夜、モード4」

極夜「了解。」

極夜を二挺銃に変え、眉間に銃弾を二発撃ち込む。

残り5人

「トリヤアアアア！」

剣を投げつけてきたか。

大方、捌いた一瞬の隙に魔力弾でも撃ってくるつもりだろう

刀夜「無駄。」

B a n g ! B a n g ! B a n g ! B a n g !

まず二発で剣を”消し去り”残り二発で本人を仕留める

残り4人

刀夜「極夜、モード2」

極夜「了解」

今度は両刃の大剣に極夜を変える

刀夜「フラッシュセイバー！」

一足飛びで踏み込みながら、一人斬り殺す。

刀夜「ソードスピアー！」

極夜を投げつけ、また一人の腹に突き刺す

「隙あり！！」

一人が俺が武器を持ってない隙に切り込んでくる。

だが

刀夜「来い！極夜！」

極夜「了解！」

極夜は瞬時に俺の手元に戻り、相手の剣を受け止める

刀夜「ハッ！」

すぐさま剣を押し返し

刀夜「極夜！モード3！」

極夜『了解！』

今度は長刀に姿を変え、押し返した相手を相手の間合いの外から斬り捨てる。

最後の一人

「…よくもやってくれた…私の部下を皆殺しとはな…」

刀夜「心配するな、今から貴様も後を追う事になる。」

「…そう簡単に行くかな？」

俺も相手も刀を構える

轟ッ！！

一足飛びでぶつかり合う

刀夜「……。」

「くっ…流石は…雷光の影と言うことが…」

刀夜「…何故…わかる…」

「黒雷をはなち、刀を持つ者など、雷光の影、影宮刀夜しかいない…まさか…こんな所で…次期聖王女、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトを連れて歩いているとは思わなんだが…なッ！」

刀夜「…チッ…」

なるほど…金髪に紅と翠の虹彩オッドアイ異色…

どちらも聖王家の特徴だな…

まあいい。

刀夜「貴様は…大方、敵国…いや、この国の王家の人間の暗殺部隊…  
…といったところか…」

「さあな…」

刀夜「だが関係ない。今から貴様を…斬る…！」

シャキン！

「ぐ…が…」

ドサッ…

刀夜「八刀一閃…長刀による八回の斬撃を超神速で叩き込む…貴様には太刀筋すら捉えられなかっただろ…」

「流石は雷光の影…いや…戦士…ソルジャー…です…最後に貴方と戦えて…良かった…」

刀夜「…ヴィヴィオ…いや、オリヴィエ・ゼーゲブレヒト…」

オリヴィエ「…すみません…」

刀夜「……。」

「???」オリヴィエから!?!?!

刀夜「!？」

????「離れるおお!!!!」

刀夜「くっ…」

何て力だっ!

刀夜「うおッ!？」

まさか吹き飛ばされただと!?

オリヴィエ「ク…クラウド!?!何故ここに…!!」

クラウド「貴女が行方不明と聞いて、探しに来たんですよ!!あの男が連れ去ったのですね!？」

オリヴィエ「あ、いや、違いま」うおおおお!!!!」「あ…」



クラウド…

まさかクラウド・G・S・イングアルドか？

霸王…か…

やれやれ…王様二人が揃い踏みか…

まあ…

どうでも良いな

刀夜「うおらああ!!」

黒雷を放ち、牽制する

クラウド「くっ…」

刀夜「タアッ！」

クラウド「うわあっ！」

刀夜「ハア…ハア…ハア…」

クラウド「…まだ実践では試したことはないけど…！やるしかない！」

刀夜「…少し落ち着けよ…」

クラウド「おおおおお！食らえええええ！断空拳！！」

なるほど…足から練り上げた魔力を拳に載せて放つ…か…悪くないな…だが…

刀夜「遅い。」

軽く避ける

クラウド「なっ！？」

チャキツ

刀夜「勝負有り…だな」

長刀を首に突きつけ、いつでも斬り捨てる事ができるようにする

クラウド「くっ…」

刀夜「…少し頭を冷やせ…」

バコッ！

クラウド「あ痛っ！」

オリヴィエ「人の話は最後まで聞きなさい！この方は、私を助けてくれた人ですよ！」

クラウド「え…」

続く…



まだ続くのか…

第18話 何をするか決めるかは自分自身が決めることだ」…まあそつだな…」

今回はまあまあ深い話

派手に行くぜ

第18話 何をするか決めるかは自分自身が決めることだ……まあそつだな……」

クラウド「ホント……にすいませんでした……!」

刀夜「あ、いや、もういいから……」

クラウド「なんとお詫びしていいやら……」

このやり取り5回目……

よし、話を無理矢理変えるか……

刀夜「……あ、そうださっきの技……なんだった……?」

クラウド「断空拳……ですか?」

刀夜「そうそう、その断空拳だけだな、なかなか良い技だが……スピードが足りないな。」

クラウド「スピード……ですか……」

刀夜「並の相手ならあのスピードで十分だがな……攻撃力を少し下げ  
てスピードを上げてみる、いくら強い攻撃でもあたらなきや意味が

ないからな…さっきのは俺にとっては止まってるようにしか見えなかった。」

クラウド「なるほど…」

オリヴィエ「なんで私を放置するんですかああー！ー！ー！っ！！」

刀夜「あ、スマン。」

オリヴィエ「全く…」

クラウド「すいません…」



刀夜「…で……これからどうするんだ？」

オリヴィエ「……。」

クラウス「やはり…帰ったほうが…」

オリヴィエ「けど…」

刀夜「…君は何がしたい？」

オリヴィエ「え？」

刀夜「君の魂は…何と言ってる？」

オリヴィエ「魂……」

刀夜「心は……？何がしたいと言っている？」

オリヴィエ「……。」

刀夜「俺は何も言わない。ただ、俺は一言……言っただけだ。」

オリヴィエ「私は……」

刀夜「ま、難しいか。」

オリヴィエ「私は……」

クラウド「……貴方は……」

刀夜「ああそうだ、まだ完璧に自己紹介をしてなかったな……ソルジャー戦士いや、こつちを言ったほうがわかりやすいな……元……ソルジャー龍神傭兵団、兵士ソルジャーランク0、ライトニングシャドウ雷光の影……影宮刀夜……」

クラウド「あの雷光ライトニングシャドウの影ですか!？」

オリヴィエ「あの有名な……」

刀夜「ホントはあんまり言いたくないんだ……色々面倒だから……俺がやってたことが原因なんだけどな……」

……俺は……今まで何人も……数えられないほど人を殺してきたからな……

刀夜「さて……俺はそろそろ行く……こんな俺といたら……ややこしいことになるぞ……帰るなり、どこかへ行くなり、君が決めるんだ……じやあな……」

オリヴィエ「……はい……」

オリヴィエ「クラウド…私は…帰ります…やはり、誰かがこの国を  
治めなければなりません。」

クラウド「では…送っていきます…」

オリヴィエ「（なぜ人々が戦うか…まだ判りませんが…必ず  
見つけてみせます…！刀夜さん…！）」

刀夜「さあて…次はどこに行くかな…」

カチヤ

刀夜「ん？なんか踏んだか？…なんだこりゃ？」

小さなひし形の水色の宝石？なんでこんなところに？

刀夜「うおっ！？」

突然宝石が輝きだす

そして

俺はその宝石から出た光に包まれ…

俺はベルカから消えていた…

続  
く  
…

第18話 何をするか決めるかは自分自身が決めることだ」……まあそつだな……」

作者「はああああ……」

零夜「どうした？」

はやて「テストがぐだぐだだったみたいやな」

零夜「じゃあ勉強しろよ！」

作者「だるい」

零夜「ヲイ」

続くしかないなWWW



第19話 面倒な事態が続けて起きると呆れる」…むしろイライラする」(前書

まーた厄介な事になった刀夜

派手に行くぜ

第19話 面倒な事態が続けて起きると呆れる」…むしろイライラする」

刀夜「うおおおおおおおおお！？」

ズガアアアアアン！

刀夜「痛てて…何処だ？ここは？」

周囲は何もなく、荒野が続いていた…

いや、刀や甲冑…兜も転がっている…

刀夜「…戦場か…」

これはまた厄介な場所に…

刀夜「とりあえず…逃げるか…巻き込まれると面倒だ…」

脱出だ！！

刀夜「…なんか…随分でかい街に着いちまったな…」

……なんかみんな妙な格好してんな…

ぱっと見、一枚の布を服にして、紐で縛ってるようにしか見えん…

いや…この場合、俺が変なのか…？

今俺は漆黒のロングコート…

…凄い周囲の視線が厳しいな…

とにかく、

ここが何処か誰かに聞いてみるか…

刀夜「…すみません…ここって…何処かですかね…」

やっぱり通行人に聞く俺。

「ここか？ここは、大阪だが…」

オオサカ？ナンダソレハ…  
初めて聞いたな…

刀夜「ありがとうございます…」

とにかく…何故俺が此処に来たのか調べねば……………いや、この  
の宝石以外思いつかん…

刀夜「…どうしたもんかねえ……」

??「ちょっとちょっと！そこのお兄さん！」

刀夜「とにかく…此処がどこの世界か調べて…」

??「おーい！聞いてる？」

刀夜「見たところ…魔法を使ってないな…魔法文化が無いのか…」

??「話を!!！」

刀夜「ん？」

??「聞かんかい!!！」

刀夜「イテッ！」

??「さっきから呼んでなのに無視しやんといてくれる!?!？」

亜麻色の髪の短い少女が、俺の頭を叩いていた。

刀夜「ああ…すまない…少し考え事をしていてな…」

??「だいたい、どうやって元の世界へ帰るかなー?とか考えてたんやろ?」

刀夜「…まさか…お前も…」

??「そ、私もお兄さんと同じように、別世界から来たんや。こんな所で話も何やから、とりあえず私の家に来て!」

刀夜「分かった。」

?「ほんなら、まずは自己紹介やね、私は美月<sup>みつき</sup>、一応出身はベルカ。

歳は16、よろしく！」

刀夜「俺は刀夜、影宮刀夜だ。出身は…分からん。一応ベルカから飛ばされてきたんだが…歳は19だ。こいつは俺の相棒、極夜。」

極夜『よろしく。』

美月「刀型のデバイスか…なかなかかつこええな！刀夜さんにぴったりや！」

刀夜「そいつはどうも。」

美月「そや、私の相棒も紹介しとこか、おいで！」

…はい？なぜに呼ぶ？

？「はいはい！何ですか？美月ちゃん？」

美月「紹介するわ、私の相棒、ユニゾンデバイスの風花<sup>ふうか</sup>。」

刀夜「ちっさ！」

俺の手のひらぐらいのサイズの人形みたいな少女が飛んできた。

風花「むー！失礼です！私はちゃんと普通の大きさにもなれます！」

刀夜「あ、そう。それは悪かった。」

風花「で、美月ちゃん、この人は誰ですか？」

美月「刀夜さんって言って、私らと同じように別世界…ベルカから飛ばされてきたんよ」

風花「そうでしたかー！」

刀夜「ここは何なんだ？見たところ、魔法文化は無いようだが…」

美月「さあ？魔法を誰も使われへんからなあ…」

刀夜「困ったもんだな…しかも戦いが起こってるんだろ？」

美月「まあな。でも、この街は大丈夫や。独自の防御策とかがある



から、一回も戦闘は起きてへん。」

風花「しかもここは商業の街ですからね、色んな人が集まってくるのです！」

刀夜「今この世界では、何が起こってるんだ？」

美月「全国の武将…まあ王様みたいなもんやね、それが全国を統一しようとあちこちで戦ってるってとこやな。」

刀夜「…チツ…俺の行く先は常に戦いか……………」

小声で呟いた

美月「何か言った？」

刀夜「いや、何も。」

美月「まあええわ、とにかく刀夜さんは今どこも住むところがないし、金もない、そうやる？」

刀夜「……………ああ……………」

美月「とりあえずこの家に居てくれへん？もしかしたらなんとか三人でならなんとかなるかもしれへんから。」

風花「と言うかこの世界が何なのか全く分からず、飛ばされてきた時点で選択肢は無いんですけどね。」

刀夜「…頼む…」

美月「よっしゃー！じゃあまずは刀夜さんの服からやねー！」

刀夜「別にこれで良いだろ…」

風花「ダメですよー！そんな服だと目立っちゃいますから！」

刀夜「俺は気にしない。」

美月「刀夜さんが気にしなくても私らが気にするんや！此処で暮らすんやから、ちゃんと”此処”での、普通の格好してやー！」

刀夜「分かったよ…」

続く  
…

面倒だ  
…

第19話 面倒な事態が続けて起きると呆れる」…むしろイライラする」(後書

作者「まずはその現実をぶち殺す!!」

零夜「ついに現実逃避か…」

作者「一人1教科40点…基本をマスターすれば、赤点ギリギリでなんとかなるだろう。」

零夜「ガトリング両手に言うセリフじゃないよね!?確かに元ネタのセリフは両手にツインダブルガトリングガン装備してミサイル撃ちながら言ってたけど!!」

227

作者「…地獄への道連れは!!此処にあるテストと回答紙だけにしようぜ!!」

零夜「鎌振り回しながら言うなああああ!!確かに元ネタはやってたけどおおお!!」

まだ終わらんよー！！

第20話 まさかの出会いってのはたまにある事」…そりゃああるだろうな、

初めにはつきり言っておきます

この話はだいぶ前から書こうと思っていたのですが…

凄まじい事になりました…

読むときは後半を覚悟してくださいね

それでは

派手に行くぜ

第20話 まさかの出会いってのはたまにある事」…そりゃああるだろうな、世

はい、あれからだいたい2週間たちました勘だから多分だけどな

俺はとりあえずあのひし形の水色の宝石を調べている。

調べようにも機材は無いが、極夜でもある程度は分析出来るし、風花にも手伝ってもらってはいるものの、やはり詳しくは分からない。

刀夜「困ったな…」

風花「困りましたね…」

極夜『…困った…』

刀夜「これ…魔力の塊か…どうしたもんかねえ…」

風花「私達がここに来ちゃった理由は…多分知らない間にこれに衝撃を与えてしまって、不安定な状態の魔力が暴走してしまい、次元歪んだのが原因でしょうね…」

…俺…次元斬り裂けるんだけど…

極夜「しかも今コイツには魔力があまり入ってないからな…」

美月「…じゃあ…それに魔力を注いで、もう一度もとの不安定状態にして衝撃を与えたら…同じように次元が歪んで帰れたり…せえへんか…」

刀夜「…いや…間違いではないかもしれん…俺が次元を斬ったときに周囲の空間が歪んで、そこにあったモノが斬れずに消滅したことがあった…それみたいなものだろう…あの頃は修行中で、コントロール出来てなかったからな…」

美月「今、物凄いヤバい事さらつと言ったよな！？次元を斬り裂くって聞こえたんやけど!？」

風花「しかも空間が歪んで消滅したとか言いませんでした！？それってかなりヤバいんですけど!？」



刀夜「まあ次元斬りなんか、できるのは俺を含めて三人しか居ないからな。空間斬りをするヤツも居るぞ。」

美月「あかん、これから先しばらくなに聞いても驚かれへん気がしてきた…」

刀夜「そうか。」

刀夜「とりあえず、これに魔力をひたすら注いでいくか。」

美月「じゃあ、まず私からやるわ。」

刀夜「分かった、だが3分の1くらいは自分に残しておけよ、なにがあるか分からないからな。」

美月「分かった。」

数分後

刀夜「おい、3分の1くらい残しておけと言ったはずだが。」

美月「え？まだ半分も行っていないけど？」

風花「美月ちゃんの魔力量は凄まじく多いですからねー！」

刀夜「……俺も多い方だが……これは多過ぎだな……ここまで魔力量が

多いやつは初めて見た……」

風花「私達は広域殲滅が得意ですからね、何回も何回もやって、魔力切れを何回も起こしてたらこんなになっちゃったんですよ。」

美月「……よし！だいたいこれくらいかな。」

刀夜「今度は俺だな。」

……あるえ？



刀夜「鞘はやめろ…鞘は…」

つーか勝手に極夜を使わんでくれ…

刀夜「いてて……」

極夜「大丈夫か？」

刀夜「まあな…追い出されちまったが…」

極夜「まあ彼女の機嫌が直るまで待つしかなかるう。」

刀夜「そうだな……ん……？なんか随分人が集まってんな……なんだ……？」

俺は行ってみることにした

刀夜「火縄銃？」

極夜『この世界の…銃だな。』

刀夜「随分面倒な仕組みだな…あんなに銃身が長かったら取り回しが悪いだろ…」

極夜『単発式でリロードにかなり時間がかかるのか…せめてもっと小さくしたらいいのに…』

刀夜「一挺買って、改造してみるか？」

極夜『好きにすればいい。』

刀夜「値段は…うおっ…高えな…」

こりゃ買うのは無理だな…

「すまん、この鉄砲をあるだけくれ。」

……はあ！？どんな金持ちだ！？

刀夜「……!!」

本能的に分かった。

今…この銃を買おうとしている男は…ヤバイ…と…

見た目が全身鎧にマント、頭に兜はかぶっては居ないが、左手に抱えている

「ん？…なんだ？私の顔に何かついてるか？」

刀夜「…いえ…」

「…ふむ…心地よい殺気だ…」

刀夜「…！」

「貴様…なかなかの使い手と見た…」

刀夜「…買いかぶりすぎですよ…」

「ふっ…無理に隠さずともわかっておる…目を見れば一目で分かる…貴様の目は…幾たびも、修羅場をくぐり抜けた者がする眼……しかも質と量の次元が違う修羅場をくぐり抜けた筈だ…現に貴様も我を見て、同じような事を思ったであろう？」

刀夜「…はい…」



「…どうだ…少し、手合わせ願いたいのだがな。無論、死なないよ  
うにだが。」

刀夜「…ええ…構いません。」

「ならば、半刻程後に、街の外に来てくれ。」

刀夜「わかりました。」

「では、待っているぞ。あ、店主、鉄砲は後で部下が取りに来るか  
らその者に渡してくれ。」

刀夜「極夜…俺は…勝てるだろうか…。」

極夜『魔法が使えれば瞬殺できる……だが…魔法文化のないこの世  
界で魔法を使うのはマズい……純粋な剣術勝負なら……おそらく互角

…いや、ほんの僅かに向こうの方が上かもしねん。』

刀夜「ああ…鬪気をぶつけても全く動じないどころか、心地よいか言ってやがったからな。」

極夜『とりあえず、美月と風花には言っておけよ。』

刀夜「ああ。」

で、俺は先に家に帰った。

刀夜「ただいま。美月ー！風花ー！いるかー！」

美月「…なんや？」

刀夜「…まだ怒ってんのかよ…」

風花「どうしたんですか？」

刀夜「おう。今から街の外で決闘しゅうしてくる。」

美月「なんやて!?!」

刀夜「だから、俺の元の服に着替えに来た。その上から一応騎士甲冑こ…いや…見た目ただのコートだが…それで行くからな。」

美月「…私も行く。別にかまへんな?」

刀夜「ああ。」

刀夜「さて、行くか。」

行ってみると、見物人が何人も居た

「ほう、変わった格好だな。」

刀夜「貴方も人のこと言えないでしょうが…鉄板全身にくっつけてるし…」

「…否、これは西洋の甲冑だ。」

刀夜「…俺のも似たようなもんだ…」

「ふむ…そう言えば名のるのを忘れていたな、我は尾張、織田家当

主。織田信長だ。」

刀夜「…戦士<sup>ソルジャー</sup>…影宮刀夜…」

「刀夜か、覚えておこう。では…」

刀夜「いざ…」

「「勝負ッ!!」」

まずは…無拍子の一足飛びからの…抜刀術!

「クッ…!」

防がれたか…

「…うおおお!!」

右薙に振りかぶってくる…ならば…！

刀夜「…ハアッ！」

柄尻で刀を受け止め、押し返しすぐさま納刀、抜刀術へと繋げる。

が

「鬼神！無双斬！」

マズい、と思つた瞬間、相手の抜刀術を抜刀術で迎え撃つた。

刀夜「ぐっ…！」

「うおおおおお！」

刀夜「負けるか…！」

ガキーン！



勢いのまま、体を回転させ抜刀術を繰り出す！

刀夜「うおおおおお！！！」

「おおおおおおお！！！」

そして

- - - 一閃！ - - -

ガキーン！



防がれる…が…

「鞘!？」

刀夜「…抜刀術…二頭龍…！」

鞘から刀を半分ほど出したまま、攻撃

防がれた鞘から、刀を抜刀

そのまま

一閃！

「我の…負けだな…」

刀夜「大丈夫ですか…？」

「ああ、大事ない。峰打ちにしてくれたおかげだな。」

刀夜「死なないように、と言ったのは貴方でしょう…」

「まあ…そうだな…」

刀夜「ありがとうございます…」

「いや、こちらこそ勉強になった、まさかあのような抜刀術があるとは想像もできなかった…」

刀夜「いえ、こちらこそ、闘気を自在に操れば剣圧を強化出来るとは思いませんでしたから…」

「む…少しばかり時刻が不味いな…そろそろ行かねば、尾張に着くのが夜になってしまう。よし、このまますぐさま出発するとしてよう。」

「

刀夜「部下はいいんですか？」

「いや、先に行かせてある。」

刀夜「そうですか、では…」

「つむいずれまた会おう！さらば！」

続  
く  
つ  
…

第20話 まさかの出会いってのはたまにある事」「…そりゃああるだろうな、

作者「結局俺はなにがしたかったんだろうか」

零夜「まさかにも程があるな」

作者「でもこの話はだいぶ前から書くのは決まっていたんだよな。」

零夜「マジかよ」

作者「マジだよ」

零夜「なんで織田信長なんだ？」

作者「俺が最も尊敬する偉人だから。」

零夜「絡み方がかなり強引だな。」

作者「いや、でも織田信長は実際に大阪の堺で鉄砲に興味をもって、後の戦いに使っていくようになったんだぞ。」

刀夜「じゃあ何故戦わせたし。」

作者「格好良さそうだったからという俺の妄想120%」

刀夜「ヲイ」

続けなければ、生き残れない！

第21話 ヘルカよ！私は帰ってきた！！」「…核は撃つなよ？」「(前書き)

またサブタイがネタ

ヒントは作者も憧れるソロモンの悪夢

今回はただ帰るだけ

派手に行くぜ

第21話 ヘルカよ！私は帰ってきた！！」…核は撃つなよ？」

刀夜「ハア…もう2ヶ月か…美月…魔力はまだたまってないか？」

美月「あと…ちょっと…」

刀夜「ホントかよ…」

風花「んー…確かに後少しだと思いますよ、計測不能領域にもうすぐ達しますし。」

刀夜「そうか。」

美月「む…なんで私の事信じへんのに風花の事は信じんの？」

刀夜「お前は見栄張って、ホラ吹く時があるからな。」

この前なんざ作り方をまとも知らない料理を作って俺がえらい目にあつたからな。

刀夜「……どうも俺は上手く魔力感知が出来んな……」



そう、俺は魔力の感知が苦手なのだ。

そこに有るか無いかなどは分かるのだが、多いのか、少ないのかなど、細かい事が分からない。

刀夜「何とかしなきゃな…」

美月「ふう…今日はこれくらいにしとこか。」

風花「お疲れ様です、美月ちゃん。」

美月「ありがとう、風花。」

刀夜「…それに…影の魔力コントロールを何とかしなきゃな…」

美月「…刀夜さんは何をぶつぶつ言ってるんや…」

風花「朝からずっとアレですからね…ちょっと不安です…」

刀夜「ま、考えても仕方ないか…」

美月「何をぶつぶつ言ってるんや。」

刀夜「気にするな、大したことじゃない。」

刀夜「さて…腹が減ってきたな…」

美月「じゃ、何か作るか。」

刀夜「ああ、」

俺は立ち上がり、二歩進んだ瞬間

カチャ

刀夜「あ？」

あの宝石を踏んでいた

刀夜「あ」

美月「あ」

風花「あ」

刀夜「うおおお！？」

美月「きゃあああ！！」

風花「うわあああ！！」

以前と同じように光に包まれ…



美月「私は大丈夫やけど…アレ？刀夜さんは？」

刀夜「…お…降りてくれ…」

美月「ご、ごめんなさい！すぐどこから！」

刀夜「いててて…」

風花「ここは…どこですかね？」

刀夜「…ベルカだよ。」

美月「なんでわかるん？」

刀夜「あの馬鹿でかい城を見る…あれは…たしか覇王国の物だったはずだ…」

美月「そう言えばそうやったなあ…」

刀夜「ちょっと行ってみるか。」

続  
く

第21話 ヘルカよ！私は帰ってきた！！」…核は撃つなよ？」（後書き）

作者「やっと明日でテストが終わるぜ…」

零夜「ずっと小説書いてたから勉強してないだろお前。」

作者「ああ。それがなにか？」

零夜「赤点取ったらえらい目に遭うぞ。」

作者「まあ数学と理科は訳分からんからな、多分無理。英語と現代社会はまあまあ、問題は世界史をまともに覚えずにテスト受けたがらボロボロなんだよなwwwあと明日の古文と数Aもヤバい。」

零夜「勉強しろよ！！」

作者「期末で頑張る。大丈夫だ、問題ない。」

零夜「とか言っただけ同じ過ちを繰り返すフラグだよな。それ。」

作者「過ちは繰り返させない！！」

零夜「お前が繰り返すんだよ！！」

続ける！それが人の夢！人の業！



第22話 一線をこえた厨二病は凄く格好いい」…厨二病患者が言ったらなんか

厨二病全開な話

後、この小説が15000アクセスを突破しました

派手に行くぜ

第22話 一線をこえた厨二病は凄く格好いい…厨二病患者が言ったらなんか

刀夜「なんか…さびれてんな…何があつたんだ？」

美月「此处に来たことあるん？」

刀夜「一度だけ旅の途中に物資補給のために立ち寄ったことがある。

」

美月「その頃は、もっと人がいたんか？」

刀夜「ああ、もっと活気があつた。」

風花「今は誰もいませんねえ…」

刀夜「おかしい。」

美月「え？」

刀夜「…クラウドはどこだ…！美月！城に行くぞ…！」

言い切る前に俺は駆けだしていた

美月「あ、ちょっと!!まってや!!」

刀夜「ハア…ハア…ハア…クラウド!いるか!？」

チツ…まさか…!

美月「ちょお…まってや…」

風花「つ…疲れたです…」

刀夜「…クラウド…オリヴィエ…」

「刀夜さん!？」

刀夜「クラウドか！？無事だったか！」

クラウド「すみませんが、再会を喜んでいる暇がありません！今から橋を下ろしますので、こちらまで来ていただけませんか！？」

刀夜「わかった！だが橋は下ろさなくていい！跳んでいく！美月、風花、すまん。」

美月「え、ちょっときやあ！？」

風花「うひゃあっ！？」

俺は二人を抱き抱え、堀と城門を飛び越えた

刀夜「すまん、美月、風花。」

美月「びっくりした…」

風花「びっくりしたですう…」

刀夜「クラウド、なにがあった…あれからどれくらいたった…オリ  
ヴィエは無事なのか？」

クラウド「あれからって…もう二年はたってますよ？あとオリヴィ  
エは無事ですよ…」

刀夜「チツ…やはりあっちとこっちで時間の進み方が違うか…」

クラウド「あっち？」

刀夜「ああ、あのすぐ後…どこか分からないが、別の世界に飛ばさ  
れていてな…俺にとってはまだあれから2ヶ月程しかたってない…  
そんなことより、何があったんだ…」

クラウド「魔王…と言えば分かりますか？」

刀夜「チツ…あそこか…」

美月「魔王って…まさかあの…ロード・デイスベアー絶望を統べる王とかエンドレス・デイスベアー永久の絶望だと  
言われてるあの…？」

クラウド「そう、その魔王が…ついに此処まで来た…」

刀夜「ツチ…昔…火彩と二人でボコボコにしてやったんだが…  
またバカで厨二病臭い野望を抱きだしたか…あのヒゲ…あんなやつ  
でも一応かなり強いからな…」

俺はつぶやいた

クラウド「魔王と戦ったのですか!？」

刀夜「ああ…だいぶ昔な…もう7年ぐらい前だ…あの時は火彩…俺  
の親友と二人でボコボコにしてやったんだが…あのヒゲ…言ってる  
ことアホな割にはなかなか強いからな…」

クラウド「一応…周辺の国々に協力を呼びかけたのですが…」

刀夜「ああ…それと、龍神傭兵団を雇うといい…アイツらなら余裕  
で魔王軍を潰せるだろう。連絡するときは俺は名前を使ってくれて  
かまわない。あと俺からの伝言で（火彩を寄越してくれ）と団長に  
伝えてくれ。俺はオリヴィエの所に行ってみる。」

クラウド「分かりました、龍神傭兵団を…」

「相変わらず、魔力感知が出来てないな、刀夜。」

刀夜「…！…！…！火彩！？」

火彩「久しぶりだな、四年ぶりくらいか？」

刀夜「何で此処にいるんだ。」

火彩「お前の真似を龍神傭兵団全員でやろうと言ったことになつてな、今はみんなこつちに向かつてるさ。ま、団長とメンバーの半分は、お前の心配する聖王国に向かつてるがな。」

クラウド「じゃ、じゃあ…貴方が…魔王を一度倒したという…もう一人の…」

火彩「ああ、俺がスカイライト・ブレイズ蒼天の焰こと、闇咲火彩だ。」

刀夜「これは…行けるぞ…！クラウド！この戦力なら逆に攻めても勝てるぞ…！」

クラウド「ええええええ…！！！」

美月「ちよつとまったあ…！！！」

風花「私達を忘れ無いでほしいです!!」

美月「相手の魔王軍は数はハンパなく多いはずや!!」

風花「だから、私達の出番です!!」

美月「超広域殲滅魔法で魔王軍みんなぶっ飛ばしたるわ!」

火彩「おい、刀夜。誰だ?この嬢ちゃんは。」

刀夜「飛ばされてた世界で俺を助けてくれた人とユニゾンデバイス。」

火彩「そうか。よく似合ってるぞ。」

刀夜「なんの話だ?」

火彩「気にするな。」

刀夜「…意味分からん…」

クラウド「さ…さすがに今すぐは無理なので…3日後でよろしいですかね?」



火彩「ああ、直ぐつてのは無理なのは分かってる。今の内に、聖王  
国に連絡して、団長にも伝えておくよ。」

クラウド「ありがとうございます……」

続く

第22話 一線をこえた厨二病は凄く格好いい」…厨二病患者が言ったらなんか

作者「H A H A H A H A H A 今日でテスト終わるぜ」

零夜「勉強しないなら寝ろよ!」

作者「昼寝したから眠れない夜」

零夜「じゃあ勉強しろ!」

作者「やーだね そんな事するくらいならミリオンスタップをマスターするね。」

零夜「作者…テンションおかしくないか?」

作者「あははははは、深夜だからって発狂はしてないぜ!」

「!」

零夜「十分発狂してんじゃねえか!よし、斬ろう。八刀一閃!」

シャキーン！

??1「You must die! stinger!」

??2「Illusion blade!」

作者「ぎゃあああ!」

零夜「あ、蒼と紅の二人の死神に作者が…」

この後書きを続ける…それが俺の使命だ!

ようするにまだまだ続く…

第23話 メタ発言と死亡フラグ建設はほどほどに「いや、無しにしてよ！」

何故こうなったし

普通の話を書いたのに何故かギャグに…

ともかく

派手に行くぜ

第23話 メタ発言と死亡フラグ建設はほどほどに「いや、無しにしてるよ!」

クラウド「そうだ、刀夜さん。」

刀夜「ん?」

クラウド「断空拳、完成したので見ていただけませんか?」

刀夜「おお、あれを完全にしたか。」

クラウド「はい!」

刀夜「いいだろう、見せてみる!」

〳〳移動中〳〳



この一撃で俺は城外まで吹き飛ばされたよさ

クラウド「ホントーーーーーにすみませんでしたアアアアア  
ア!!!」

刀夜「いや…気にするな…問題ない…良い一撃だった…ゴフッ！」

クラウド「血吐いてますけど!?!」





続く



作者「そつだ、実は零夜がある方の小説の後書きに登場してるんだ！」

刀夜「マジか。」

作者「あしゆきさんの 俺が秀吉で化け物級 と言う小説だ！内容はバカテス、主人公は秀吉の小説です！」

刀夜「よろしければそちらも見に行つてあげてください！」

作者「あしゆきさん！ありがとうございまアアアアアす！！！」

え？まだ続くの？

第24話 気持ちはまず言葉にしてから伝える「言葉にしなきゃわからないも

今回は…ちょっと意外な話かも

派手に行くぜ

第24話 気持ちはまず言葉にしてから伝える「言葉にしなきゃわからないもん

刀夜「うおっ!?!」

俺は目を覚ました……

刀夜「何故俺は寝ていたんだ……? クラウスの霸王断空拳で吹っ飛んで……どうしたんだっけ……」

美月「その後に火彩さんにドロップキック食らってばたんきゅーや」

刀夜「美月……」

美月「もお……心配したんやで……なかなか目覚まさへんし。」

刀夜「ああ……悪かった……あれからどれくらいたった?」

美月「2日。」

刀夜「…って今日出発じゃないか！」

美月「あー、それ来週になったから。聖王様が一緒に来るとかで延期になったんよ。」

刀夜「オリヴィエが…。」

美月「しっかし…随分ベルカの王様と仲ええなあ。」

刀夜「クラウドとオリヴィエだけだ…。」

刀夜「ふう…まだ体が痛むな…。」

美月「一応治癒魔法は掛けといたんやけどなあ…。」

刀夜「まあ、一日あれば治るさ。」

カチヤ…

部屋の扉が開いて、銀髪の長い髪の女性が入ってきて

風花「美月ちゃん！ただいまですう！！」

美月「おかえり、風花。」

………え？

刀夜「風花…？」

いや、おかしい。

風花は確か俺の手のひらサイズだったはず。だが今目の前で風花と言う女性は完全に美月より身長が高い、しかもスタイルが抜群だ。いや待て風花はもっと可愛い感じだったはずだ。今目の前で風花と言う女性はどつちかと言うと綺麗と言う言葉が似合うような感じ。だがあの口調は完全に風花のものつまりこの人は…





風花「ふふっ 美月ちゃんは刀夜さんの事がすく「あわわわわわっ  
！そ、そうや！風花！頼んでたもの！もってきてくれたか！？」む  
う…まあ持ってきてきましたが…」

刀夜「…シッ……騒ぐな…」

カチヤ…

俺はドアを開けた

火彩「うおっ！？」

オリヴィエ「キャアッ！？」

クラウド「うわっ！？」

団長「おわっ！？」

刀夜「……何やってんだ、アンタ等は……」

火彩「いや、美月ちゃんが刀夜に告げ「黙れ！火彩！」

ゴシヤアアアア……！！

火彩「あぐべらあああああああ！！な、何すんですか団長オオ！！」

団長「何も言うな、火彩。」

火彩「いや、だけど刀夜は「何も言うな！！」 Yes

Sir!!」

オリヴィエ「あ……あの……クラウド……！！！！！！こ、こんな所で……！！！！！！（あ、でもあんまり悪い気は……！！！！！！）」

クラウド「すすすすすすすす、すみません！すぐ退きます！！！！！！！！」

ドアが開いて転けた時、クラウドがオリヴィエを押し倒してしまっていたようだww

風花「ハイそこ！ラブコメ展開しないでください！！！」

団長「じゃ、刀夜！！頑張れよ！！！」

そう言って団長達は立ち去って行った

……何を頑張れと？

刀夜「何だったんだ…？」

美月「…あ、あの！」

刀夜「ん？」

美月「刀夜さんは…その…す、す、す、好きな人とかは…い、いるんですか？／／／／／／／／／／」

刀夜「いや、居ないが？」

コイツ…どうしたんだ？急に…

美月「…私…私は…と、刀夜さんの事が…す、す、す、す…好きで  
す!」

刀夜「……え?」

美月「…。」

刀夜「そりゃ、どーという意味d…むぐっ!」?

言いきる前に、美月に何か柔らかいモノで口を塞がれた

美月の顔が近い…

そう

俺は美月に

キスされていた。



その勢いで俺と美月はベッドから落下した

美月「えへへ」

美月は俺に抱きついたまま、頬ずりしてくる。

俺は思った



美月は必ず守り抜いてみせる…と…

続く…



第25話 派手にぶちかませ！「景気よくな！」（前書き）

今回は美月と風花のターン!!

派手にいくぜ！

第25話 派手にぶちかませ！「景気よくな！」

あれから一週間

魔王軍をぶっ飛ばしに行く日だ

火彩「細かい作戦は、どうする？」

刀夜「美月と風花の超広域殲滅攻撃でぶっ飛ばしまくった後、龍神傭兵団を先頭に全員突撃！！暴れまわる！！美月はぶっ飛ばした後、すぐ戻る！以上！」

火彩「良いねえ！シンプルで覚えやすい！かつ、上手いこと行きそ  
うな最高の作戦だ！」

団長「バカでも理解可能だな。さすが刀夜だ。」

極夜「ただ単にめんどくさいから細かいとこまで考えてないだけじ  
ゃ…」

白夜『極夜ア…ソレを言っちゃア…おしまいだぜエ…』

〔転送移動中〕

刀夜「来たぞ…!!じゃあ…美月、頼んだぞ…」

美月「任せといて!風花!行くで!!!」

風花「はいです!!!」

美月「ユニゾン!!!」

「インツツ!!!」

髪は長い銀髪、黒と白の服…騎士甲冑に身を包み、黒い帽子を被った美月がそこには居た

美月「じゃあ、行ってくるわ、刀夜。」

刀夜「ああ…気を付けてな…」

背中に四枚の翼を出し、羽ばたいて行く美月。

美月「さあ！派手にぶちかましたるで！！出し惜しみ無しや！！」

風花「はいです！！」

美月「崩壊の音色よ、全てを消し去る闇となり、破壊せよ！ラグナ  
ロク・エミツション！！」

いきなり超強力広域殲滅魔法でその名の通り、崩壊を拡散させる。

美月「まだまだや！風よ！切り裂く刃となりて吹き荒れる！プラス  
ト・オブ・ウインド！！」

強烈な風があたりに吹き荒れ、風が全てを切り裂く

風花「美月ちゃん、まだいけますか!？」

美月「余裕や!後5発は軽いで!さあ!次や!炎よ!焼き尽くす紅蓮の焰ハヒ!!インフェルノ・ブレイズ!」

全てを焼き尽くし、消し去る炎が飲み込む

風花「美月ちゃん!右68度方向に敵が集結しています!」

美月「わかった!黒金よ!裁きを下す鉄槌となれ!クラック・ダウン!  
ン!」

高圧縮された魔力弾が鉄槌により打ち出される鉄球のごとく降り注ぐ

美月「ハア…ハア…ハア…ハア…さすがに…ちょお…しんどいな…」

風花「大丈夫ですか!？」

美月「ちょっと…飛ばしすぎた…かな…」

風花「無理しないでくださいよ?はッ!後ろから攻撃です!!!」



美月「大丈夫や。鋼よ！悪を拒絶する盾となれ！シールド・オブ・ステール！！」

鋼の障壁が魔力弾や砲撃を完全に防ぐ

美月「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…これが…最後やな…響け！  
終焉の笛！ラグナロクツ！」

白銀の集束砲が全て打ち砕く

美月「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…」

風花「大丈夫ですか？」

美月「ちょお…きついな…でも…後は刀夜と火彩さんに任せようか。」

風花「はいです！」

美月と風花は戻って行った…

続く…



第26話 さあ！partyの始まりだ！」「派手に行くぜ！」「（前書き）

今回派手に技を決めるぜ！

派手に行くぜ







刀夜「面倒だ！一気に行くぞ、火彩！」

火彩「分かったア！」

刀夜「極夜！カートリッジロード！！」

極夜「了解！」

火彩「白夜！カートリッジロード！」

白夜「了解だア！」

刀夜「斬り裂け！黒雷龍！雷龍らいりゅう霸斬はざん！！」

漆黒の雷を刀に纏い、帯電した刀を振り下ろす

火彩「焼き尽くせ！！蒼炎龍！！炎龍えんりゅう霸斬はざん！！」



蒼い焔を刀に纏い、蒼炎の刀を振り下ろす

黒雷が斬撃と衝撃波と共に、発生

黒雷が全てを打ち砕きながら、切り裂き、吹き飛ばす。

蒼炎と斬撃、衝撃波が発生

蒼炎が全てを焼き尽くし、切り裂き、吹き飛ばす

無論、しんぼう不殺だ

火彩「見えたぞ!!」

刀夜「今度こそ、あのオッサンを…殺す…!!」

続く

第26話 さあ！partyの始まりだ！」「派手に行くぜ！」「（後書き）

作者「今回は短いが…次回は！」

零夜「戦いか！なら長いな。」

作者「とは限らない。」

零夜「はあ！？」

作者「この過去回想編は…おっと…これ以上は…な？」

続きまくる

第27話 守る物があるヤツは何処までも強くなる」…ああ…」(前書き)

今回はフザケ無し

…派手に行くぜ…

第27話 守る物があるヤツは何処までも強くなる」……ああ……」

刀夜「っらあ!!」

バゴオオオオン!!

扉をブツ飛ばし、厨二病全開な城に侵入する

火彩「出て来やがれ!!オッサン!!」

「オッサン言うな!!私はまだ38だ!!」

何処からともなく、声が聞こえてくる

火彩「十分オッサンだ!!」

「黙れ!お前達もいつかはそうなるんだよ!!」

火彩「38になってまだ厨二病全開なお前みたいにはならねえよ!!」

刀夜「……グダグダ言っていないで出て来たらどうだ……!!」

「ハッ！気付けよ、始めから此処に居るぜ？」

火彩「ハイ隙ありイイ！」

背後から声が聞こえた瞬間火彩は回転しながら突き刺した。

が

「残念！ハズレだ！」

上から蹴られる

火彩「ガハッ！」

刀夜「火彩！クソッ！」

「ははは！お前らも強くなってるだろうけどな……」

ヤツの姿が、変わっていく

人ではない異形の姿

そう





はやて」「ここで終わり？」

零夜「いや、どう言うわけかここで記憶が一度途切れてるんだ……この次が、魔王と戦って…魔王の死ぬ瞬間だ…」

.....

刀夜「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ゴホツ…！」

火彩「ゲツ…」

団長「ハア…グハツ…」

「フツ…やはり…か…」

刀夜「何を…ゼエ…言って…ゴホツ！いる…」

「…これこそが…私の…望んだ…結末だ…私が死に…抑止力は失われ…世界は…さらなる戦いへと…導かれる…そして…その戦いを…終わらせてこそ…真の平和が訪れる…願わくば…その戦いを終わらせるのは…刀夜…お前達で…あつ…て…ほしい…もの…だ…ガハツ…！」

刀夜「…最初から、それが目的だったのか…？」

「初めは…ただ戦いを止めて世界を平和にしたい…そう願って…戦っていた…だが…力をつけ…強くなり過ぎた…するとどうだ…何処の国も…こちらから行かなければ…誰も戦わない、だが他の所とは戦う…通り道に我々がいれば…諦める…こんな抑止力があっては…」

永遠に平和は訪れん…だから私が死に…この国が無くなることで…  
世界に平和は訪れる…そう考えた…」

刀夜「だか…本当にそうなるとは限らないだろう…」

「いや、必ずなるさ…少なくとも、私が死ぬことで、世界は変わる…人は…変革していかなければならない…変われなかった者達の…代わりに…変わっていかなければ…ならないのだ…変わることで…人は…世界は前に進んで行く…」

火彩「ああ…？つまりお前は始めから死ぬつもりだったのか？」

「そう言う…事になるな…」

刀夜「だったら…今此処で…俺が…とどめを刺す…」

「…その前に…これを…お前達三人に…渡したい…」

刀夜「なんだ…この光球は…」

「悪魔の力さ…私の体に宿りし悪魔の…力の最も強い力を込めたものだ…受け取れ…」

光が俺と火彩、団長の元へ飛んでいき、

刀夜「うおっ…」

火彩「うっ…」

団長「ハア…」

光球が体の中に入った

さあ…

刀夜「サヨナラだ…クソ親父…」

「サヨナラだ…我が息子よ…」

-  
-  
-  
-  
斬ッ!!  
-  
-  
-

刀夜「……。」

俺は…城の外で一人たたずんでいた

火彩「…泣いてるのか…？」

刀夜「…いや…雨だよ…」

火彩「…雨なんざ降って無いが…？」

刀夜「俺は…悪魔だ…悪魔は泣かないもんさ…」

火彩「…そうか…けどな…家族のために…仲間のために…恋人のために涙を流せる悪魔も居るんだろうな…」

刀夜「…さあな。」

火彩「ところで…」

B a n g ! B a n g !

突然銃を発砲した火彩

弾は現れた兵士に直撃した

火彩「残党か何かしんねえけど、やったら兵士が現れてるぜ？まあ全員ぶっ飛ばしてやるけどな。」

刀夜「……ざつと……1000000か……お前も無茶するよなあ……火  
彩……まあ美月と風花、オリヴィエやクラウスの所へ行かせないため  
にここで全員ぶつ飛ばすか……そう言えばあの子達は……？」

火彩「刀夜……お前もだろう……上手いこと団長が逃がしてくれてるさ  
……ま、美月ちゃんが付いてるんだ、大丈夫さ。」

刀夜「そうだな……さて、早速この悪魔の力とやらを試すかな……」

火彩「ああ！」

刀夜「じゃあ……そろそろ行くか……！」

火彩「……ああ……！」

行く前に、刀を掲げ、俺は言う

刀夜「夢を抱け……」

火彩「ソルジャー兵士……いや、ソルジャー戦士の誇りは……！」

火彩が続ける

「絶対に忘れるな!!」

刀を振るい、二人同時に叫ぶ!!

シャキン!

「いらっしやいませええええええええ!!!!!!!!!!」

俺と火彩は戦った



目の前の敵を全て駆逐するため…

生きて帰るため…

無意識に刀を振るい続けた

撃たれても、刺されても、斬られても、殴られようとも

ただただ、戦い続けた。

気が付けは、周りには誰もおらず俺は倒れていた。

火彩「よお…刀夜…生きてるか…？」

火彩が地面を這って近寄ってくる。

刀夜「ああ…まだ…なんとかかな…だが…もう無理っぽいかな…」

火彩「俺もだ…へへ…俺達…1000人斬りどころか、100000  
00人斬り達成しちゃったぜ…」

刀夜「ああ……火彩……雨……降ってきたな……」

火彩「ああ……」

刀夜「……あの子達は……もう……行ったか……」

火彩「ああ……けど……彼女がついてるんだ……心配ない……団長もいるし  
な……」

火彩「俺……ちょっと眠いな……少し眠らさせてもらっわ……」

刀夜「俺も……もう眠いや……」

火彩「なあ……刀夜……俺達……英雄に……なれたかな……」

刀夜「ああ…きつと…な…」

火彩「へへ…じゃあ…お休み…」

刀夜「…美月…すまない…後で…迎えに来てくれ…俺は…ちょっと眠ってるからさ…じゃあ…な…」

そして

死んだ

俺…影宮刀夜  
と  
アイツ…闇咲火彩  
は…

…  
続く

第27話 守る物があるヤツは何処までも強くなる」…ああ…」(後書き)

作者「…今回は…俺一人でやらさせていただきますね…」

今回の話…いや、この過去回想編で言いたかったのは

繰り返される悲劇は、必ず終わりを告げる時が来る

と言ったこと

そして最も言いたかったのは

魂は受け継がれ、必ず還ってくる

と語りつづけます。

では…続く…



第28話 夢を持って」…。」（前書き）

さて…今回も…まじめに…

派手に行くぜ

## 第28話 夢を持って」。。」

零夜「…とまあ…こついう訳だ…うおっ…！」

うつむいていたから気付かなかったが、話が終わって顔を上げて驚いた

全員が、涙を流していたのだから…

零夜「…あー…朝からする話じゃなかったな…」

はやて「零夜君の…アホ…そんな…辛い事なんですつと一人で抱え込んでたんや！」

零夜「昨日…火彩と出会って思い出したんだ…俺は…一度死んで…生き返らされたからな…いや…体は違うけど…記憶と心と…魂をな…俺を生き返らせたのは、時空管理局の…最上層部…伝説の戦士ソルジャーと呼ばれたらしい俺を生き返らせることで戦力としようとしたのだから…まあ…火彩は早くに記憶を取り戻し、すぐ逃げたらしいけど…俺は何も覚えてなくて…父さんと母さん…ああ、刀夜の方じゃなく

て、零夜の方の…両親に助けられた…で今に至るわけだ…つまり、  
”影宮零夜”の体に”刀夜”の細胞と魂を入れたのが俺だ…だけど  
…俺はもう影宮刀夜じゃない…俺は影宮零夜だ…」

はやて「でもッ…悲しすぎるやんか！そんなんツ…！」

零夜「はやて…俺達は…生まれてくる時代を選ぶ事はできない…けど…どう生きるかは…自分で決められるんだ…だから…俺は魂に従って生きた…だから…俺は自分の人生を後悔はしていないよ…それに、今ならはやて達が居るから…家族が居るから…そして…夢があるから…」

零夜「今更言っけど…もう12時…」

「「「「「あ「「「「「



零夜「…何故こうなったし…」

現在、俺はソファに座りながら、はやてとヴィータに左右から抱きつかれている

零夜「何故こうなったし。」

極夜『諦めた方がよろしいかと。』

どうでも良いが、右がはやてで左がヴィータだ

零夜「（ザフィーラ…ヘルプミー…）」

俺はこっそりと念話を送る

ザフィーラ「…無茶を言わんでくれ…シグナムとシャマルが買い物から帰ってくるまで耐えきるんだ…」

孤立無援かよ…

零夜「…二人とも…離れては…くれないよな…」

「あたりまえだよ」

……もう一度言っ…何故こつなったし。

はやて「なあ、零夜君」

零夜「ん？」

はやて「今の零夜君の夢って…何？」

零夜「俺の夢は…戦士<sup>ソルジャー</sup>として、もっとたくさんの人役に立つこと…それと…この平和を…はやて達を守り抜くことかな…俺の命尽きるまで…な…」

はやて「ふーん…じゃあ、ヴィータは？」

ヴィータ「あたし？うーん…はやてやアニキ達とずっと静かに暮らしていくこと…かな。」

零夜「はやての夢は？」

はやて「うーん…今は…やっぱりみんなと一緒にいることやね…後…ちゃんと自分の足で歩きたい…かな。」

零夜「…夢を持って…何かを成し遂げたいなら、夢を持つんだ…」

はやて「え？」

零夜「俺が…刀夜が昔火彩に言った言葉だ…夢を…なにか目標があるヤツはそれに向かって全力を出せる。だから夢を持つヤツは強いんだ。アイツは…火彩は英雄になることを夢にしていたから…強くなれた…」

はやて「じゃあ、零夜君の昔の夢って何やったん？」

零夜「…さあな…覚えてない…いや…最初は無かったのかもしれないな…<sup>ソルジャー</sup>戦士になってからはたくさん人の役に立つこと…だったけど。」

ヴィータ「いつてることとやってることが矛盾してるじゃねえか！」

零夜「…今考えたら、おかしなモノだよな…けど、気付けてよかったと思う。」

はやて「なあ、もっと…話を聞かせてくれる？」





火彩「さて…こんなもんかな…俺の話は…な。」

零夜と同じように火彩もフェイトに自身と知りうる限りの刀夜の話聞かせていた

続  
く  
…

第28話 夢を持って」…。」（後書き）

では、次回はもっと細かい話などを…

## キャラ紹介とかとかと（前書き）

これまでの設定とあらすじまとめ

ネタバレ注意

## キャラ紹介とかとかとか

主人公

かげみやれい  
影宮零夜

年齢：9歳

髪色：黒

魔力光色：漆黒

魔力変換資質：黒雷、影

備考

何百年も前、古代ベルカを中心に活動していた戦士ソルジャー

もともとは龍神傭兵団と言う傭兵団に所属していた

その頃の名前は影宮刀夜かげみやとつや

魔王と呼ばれたベルカの王の息子にして悪魔の力を受け継いだ刀夜の血と記憶と魂と細胞を受け継いだ存在

傭兵、刀夜時代は戦いばかりで自身を見失いかけていたが、傭兵をやめ、戦士ソルジャーとなることで自分の夢を再び見つけ、世界中を旅し続けた

旅の途中で聖王オリヴィエ・ゼーゲブレヒトと霸王クラウド・G・S・イングールドと出会い少しばかりともに行動した

その後、地球、日本の戦国時代に何らかのロストロギアによって飛ばされる

そこで美月と風花と出会う

そこでたまたま出会った織田信長と出会い少し戦う

その戦いで、闘気を自由自在に操ることを学んだ

そしてしばらく暮した後、再びベルカへと帰る

その後、オリヴィエとクラウドと再会し、魔王に攻められかけていると知り再会した親友、火彩と龍神傭兵団のメンバーとも再会、魔王軍を逆に攻め、魔王と刀夜、火彩、団長とともに魔王を破り、魔王と呼ばれた王が自身の父と知る

魔王自身が体に宿した平行世界の別次元の悪魔の力を受け継ぎ、その直後におよそ1000000以上の魔王軍の残党と火彩とともに美月やオリヴィエ、クラウドを守るため戦い、その戦いにおいて死

亡した

そして、管理局の最上層部によって伝説の戦士ソルジャーと言われた自身と親友の火彩を戦力とするためとともによみがえらされた

その後、“零夜”としての両親に助けられ、現在に至る

後、個人的にはCVは風間勇刀さんだと思っている

デバイス：極夜

もともとは一つのデバイスだった極夜をかつての持ち主が3つの変化機能を

分解し、それぞれ個別のデバイスとして受け継がれていた

刀夜としての記憶を取り戻した零夜があるべき姿に戻したことで、元の力と人格を取り戻した

あと、作者的には 極夜のCVは置鮎龍太郎さんだと思っている



モード1

日本刀

黒い鞘に黒い刀身の刀

モード2

大剣

黒ずんだ銀色の刀身の両刃の大剣

わかりやすく言うなら Devil may cryの主人公ダンテのDMC1の剣、フォースエッジを長くしたもの

長さは170cm程

モード3

長刀

漆黒の刀身の2m以上の長刀

攻撃力と攻撃範囲の長さに特化

ただし重いので攻撃速度は落ちる

それでも十分速いのだが

モード4-1

2挺銃

コルトM1911ガバメントがデザインのモデルに改造を施し、大型化

連射性と誘導性と魔力圧縮など、複雑な作業に優れている

モード4 - 2

ツインバスターライフル

速い話がウイングゼロカスタムのツインバスターライフル

魔力集束と砲撃と殲滅など、破壊に優れている

親友

やみさきひいろ  
闇咲火彩

年齢：9歳

髪色：ブラウン

魔力光色：蒼

魔力変換資質：蒼炎、光

備考

龍神傭兵団のエース

刀夜が去った後、刀夜の言った言葉に習い、戦いを変えた傭兵団において最強を誇った

刀夜より先にクラウドのもとに行き、魔王軍の出現にひそかに準備を進めていた

そして刀夜と再会し魔王と戦い、その後約1000000人の魔王軍残党と戦い、死亡

現在はフェイトとともにジュエルシードを集めるため行動している

デバイス：白夜

昔から火彩の相棒

逃げ出した際に研究所からもちだした

極夜の兄弟機であり同じ原初のデバイス

第零世代ともいえるデバイス

モード1

日本刀

白色の鞘に白銀の刀身の刀

モード2

バスターソード

片刃の大剣

わかりやすく言えばFF7のクラウドが持ってたバスターソードを  
細長くしたもの

長さは180cm程

モード3  
籠手、具足

直接格闘戦に特化、攻撃力と破壊力に特化

攻撃範囲が非常に短くなる

モード4 - 1

銃（リボルバーハンドガン）

M29がデザインのモデル 改造して、弾を2発同時発射可能

攻撃力と誘導性と魔力圧縮などに優れている

モード4 - 2

アサルトライフル

M16がデザインのモデル 改造して大型化、狙撃可能なようにスコープが取り付けられ、バレルも延長されている

連射性と砲撃、狙撃、集束などに特化

個人的には白夜のCVは岡本信彦さんだともっている（喋り方がまんま一方通行なので）

その他

影の魔力変換資質

能力は”あつた魔力変換資質の一時的なコピー、魔力吸収、存在隠蔽”

コピーは自由にon/offできる

コピー可能時間はおよそ30分

ただし、

魔力変換資質で攻撃された場合、魔力吸収はできない

強力な攻撃は吸収しきれない

ただし吸収した分の攻撃力は減衰可能

存在隠蔽は影の魔力を纏うことであらゆるリーダー、センサーや感知に反応されなくなる

しかし、五感の聴覚以外は隠せない

光の魔力変換資質

能力”触れたモノの破壊、魔力相殺”

破壊能力は生物には適用できない 理由は不明

魔力相殺は破壊能力の応用

あらゆる魔力を相殺する

ただし、限界は存在する

が、刀夜の影の魔力よりも限界値ははるかに高い

続く…

第29話 やりすぎには注意」…クッ…orn」(前書き)

やりすぎには注意

派手に行くぜ





理由！？知らん！多分、俺が伝説になってるとか言ったからだと思  
うがな！！戦闘狂め！！

零夜「クソオオオオオオオオオオオオオオオオ！！事実を若干ねじ曲  
げてもう少し弱く見せれば良かったああああああ！！！」

さすがに記憶が戻ったからと言って俺が強くなる訳じゃねえんだよ  
オオオオオオオ！！

第一俺自身の記憶じゃなくて”影宮刀夜”の記憶だから！！

さすがに俺自身では二人相手はキツイから！！

シグナム「飛龍：一閃！！」

零夜「うおおおおおおおおお！！？」

ズガン！！



極夜「了解…」

全力疾走を止め反転し、迎え撃つ

極夜『落ち着いて、記憶をたどれ…刀夜がどうやって八刀一閃をやっていたか、どんな修行をしたか、魂を呼び起こせ!』

零夜「魂を…呼び起こす…!」

ヴィータ「うおらあああああああ!」

零夜「…八刀…一閃…」

シャキン!

ヴィータ「うわああ!」

零夜「…夢幻刀…」

掲げた右手の上に黒い魔力で形成されたで刀が現れる

零夜「…行け…」

シグナムが飛んでくる所に投げつける

無意識下でその作業を俺は行っていた。

シグナム「なッ！？クッ…！」

夢幻刀は回避されたようだな

ならば

零夜「夢幻刀・八閃。」

今度は8つ同時に投げつける

シグナム「紫電…一閃…！」

刀は炎を纏った剣で叩き落とされた。

ならば

零夜「極夜、モード4-1、一撃で仕留める。」

極夜『極めて了解。モード4-1』

零夜「…チャージ…」

右手の銃に魔力を収束、左手の銃は連射による牽制を行う

極夜『完了。』

零夜「…バーストシユート。」

B a n g !

僅かに誘導性がある収束魔力弾を放つ

シグナム「こんなモノッ！」

レヴァンティンで叩き斬るつとするシグナム

通常の弾なら、十分だが…残念ながらこの弾は…

特別製だ

シグナム「ッ!？」

叩き斬ろうと、剣が魔力弾に当たった瞬間、爆発が起きる

バーストシュート…その名の通り、当たったり、衝撃が加わると、大爆発を起こす。

これは魔力収束を僅かに行い、微妙なタイミングで収束を止め不安

定な状態にあえてする事で、収束魔力弾に魔力爆発効果を付与する。

複雑作業が得意なモード4でのみ可能だ。

零夜「…ハッ！やりすぎた…！」

極夜「…まあ、大丈夫だろう…！」

続く



第29話 やりすぎには注意「…クッ…orz」（後書き）

作者「今回は…なんとゲストが来ておりまーす。」

零夜「何い!？」

作者「俺が秀吉で化物級から主人公の木下秀吉君が来てくれましたア!ではどうぞー。」

秀吉「どーもー、木下秀吉です。」

零夜「なんだアンタか。」

秀吉「そうだ。ちなみに、零夜は俺のトコの小説、俺が秀吉で化物級の後書きにもでているぜ!」

零夜「誰に言ってたんだ?」

秀吉「お前の言葉を借りるなら、読者の方虚無の存在にだな。」

零夜「なるほど。」

デスサイズ・0「秀吉、動くなよ。」

秀吉「え?ああ、わかった。」

デスサイズ・0「Die!!!」



秀吉「鎖鎌が頭に刺さったア!？」

零夜「大丈夫だ、うちの作者はこの程度では死なない」。

秀吉「いや!大量出血してるぞ!？」

零夜「問題ない。」

「アガガガガガ!」

秀吉「さらにスタンガン!?アレ生きてんのか!？」

零夜「生きてはいるな。」

「「秀吉に手をだすな!」」

零夜「あしゆきの言うところの秀吉ラバーズとやらか……」

続く…:だろっな…:

第30話 魂(前書き)

今回はサブタイに零夜コメント無し

派手に行くぜ

### 第30話 魂

「「負けた……」」

零夜「……………」。

シグナムとヴィータが二人してorzになっている。

いや、まさか八刀一閃が出来るなんて思ってなかったし…その後の夢幻刀もバーストショットも無意識下の行動だったし…

あるえ？

なんで無意識下でこんな事出来たんだ？

んでもって、もう夜になっていた

まあ、俺は寝ているわけなんだが

.....おい.....







”影宮刀夜”がいたのだ

刀夜「おい…なんか、鳩が砲撃食らったみたいな顔してるぞ？あ、いや散弾だったっけ？まあなんでもいい」

零夜「お前は…誰だ？」

刀夜「分かってんだろ？俺が誰で何者なのか。」

零夜「俺…いや、俺の記憶、魂、血…か。」

刀夜「そう、俺はお前でお前は俺だ。」

零夜「何の用だ…」

刀夜「ん？ああ、記憶を取り戻したろ？まあ”俺の”だが…ん？だが俺はお前でお前は俺だからお前の記憶でもあるわけか。まあそんなことはどうでもいい、記憶は完全じゃあなかったはずだ。」

零夜「ああ。」

刀夜「いや、それでイライラしてるから色々話をしてやろうと思っ  
てな。」

零夜「なら早くしてくれ、眠い。」

刀夜「まあ面倒だから単刀直入にいくぞ、お前の魂は半分しかない。」

零夜「…は？」

刀夜「半分は俺のだからな。まあ速い話意識が二つあるわけだ。」

零夜「まさか今日無意識で戦ってたのは…」

刀夜「俺が体を拝借して戦ったからだ。」

零夜「じゃあ俺の記憶は！」

刀夜「俺が封印してる、悪いが、記憶を解放するわけにはいかない。」

零夜「何故だ。」

刀夜「お前が知るにはまだまだ早い。ま、俺が良いと思ったら思い出させてやるよ。」

零夜「…わかった…」

刀夜「へえ…意外と素直だな。」

零夜「どうせ何を言っても無駄だろう？それにしつこく迫られるのは苦手なのは分かってる。」

刀夜「まあ…そうだな。よし、そんなお前に1つ、プレゼントをや

る。右手を出せ。」

零夜「はいよ。」

刀夜は俺の右手を自分の右手で掴んだ。

刀夜「俺のクソ親父から受け継いだ力。悪魔デビルプリンガーの右腕を目覚めさせてやるよ。ああ、あと、見た目がえらいことになるが、ちゃんと元に戻るから心配するな。じゃ、また会おう。」

その瞬間、俺は意識を手放した。

続  
く  
…

### 第30話 魂（後書き）

作者「さああああてええええ！今回も”俺が秀吉で化物級”の主  
人公、木下秀吉がゲストで来てくれてますぜえええええ！」

秀吉「どうもー！」

零夜「作者、1つ問いたい。」

デ・0「なんだ？」

零夜「あのバイクは何だ？」

デ・0「後で分かる。」

零夜「そうか。」

秀吉「そう言えば、うちの作者が遅れて来るらしいぜ。」

作者「そうかい、ならば回し蹴りでも練習しておくか。」

零夜「秀吉、毎日大変らしいが…体は大丈夫なのか？」

秀吉「ああ、問題はねえよ。…多分…」

零夜「まあ…いざとなったら俺と火彩を呼んでくれてかまわないからな。」

火彩「そうだ、なんならお土産も持って行ってやるぞ。」

秀吉「おう！ありがとうよ！」

デ・0「奥義！5回転回し蹴りイイイイイイイイイイ！…！」





火彩「あのバイク、秀吉をひくためかよ!!」

秀吉「アホ作者!後は頼む!」

あしゆき「うん?なんだ?ツてなんかすごいのが来たアアアアアアアアアアアア!」

デ・0「食らいなア!」

秀吉「ほいつ!」

あしゆき「ギヤアアアアアアアアアア!」

零夜「自分とこの作者を盾にしたアアアアア!??」

デ・0「貴様アアアアア!逃がすかアアアアア!」

火彩「あ、どっか行っちゃった!」

あしゆき「なんで…こんな…ガクッ」

「この後書きは終わらぬよ！」

第31話 結局の所親友は一番頼れる「…まあな」(前書き)

ようやく本来の主人公登場

派手に行くぜ

第31話 結局の所親友は一番頼れる「…まあな」

デビルプリンガー  
悪魔の右腕

最初は意味が分からなかった

だが、目覚めて俺は気付く。

確かに、デビルブリンガー悪魔の右腕だと。

零夜「……。」

朝起きて、とりあえず右腕の包帯を取ってみた、が特に変化はないようだった。

……ハツタリか？

それともただの夢だったのか？

零夜「……まあいいか……」

俺はリビングへ向かった

おっと、その前に顔を洗うか。

零夜「おはよう、はやて、シャマル、シグナム、ザフィーラ。」

はやて「おはよう、零夜君。」

シグナム「おはよう、零夜。」

シャマル「おはよう、零夜君。」

ザフィーラ「…ああ…おはよう…」

零夜「…ヴィータは？まだ寝てるか？」

はやて「うん、ゆっくり寝てるわ。」

シャマル「ヴィータちゃんは朝弱いですから。」

零夜「ま、仕方ないさ。っと、噂をすればたな。」

ヴィータ「ん…おはよ…」

零夜「…まずは顔洗ってこい…」

ヴィータ「ん…」

ヴィータはそのまま洗面所までぶらぶらと歩いて行った。

零夜「はやては、今日病院だったっけ。」

はやて「うん、今日はシャマルとシグナムに着いてきてもらうから、零夜君はゆっくりしてて。」

零夜「ああ、そうさせてもらうよ。」

零夜「と言つ訳で…市内をつろついでみることにしたが…」

極夜『零夜、読者の方久々に虚無の存在への語りかけが口に出ているぞ。』



おっといけねえ……油断するとすぐ口に出ちまっ……

零夜「さて……どうするかな……」

そう

俺は道に迷ったのだッ……！

零夜「参ったな……まあ……いざとなったら飛んで行きゃあいいんだけど……極夜……どうすればいいだろうか？」

極夜『私に聞くな。』

零夜「どーすつかねえ………歩き回るか……」

極夜『…間違い無く余計に迷うぞ。』

「あの〜…」

零夜「ん？」

声を掛けられ、振り返ると、栗色の髪を二つに結んだ女の子が居た

…たしか…火彩と戦う前…反対側に居た子だな…

「もしかして…火彩君のお友達…ですか？」

まで…火彩を…知っている…！？この子からすれば敵側では？

零夜「どうして火彩の事を知っている！？」

「あわわわわっ！！そ、そこはちゃんとお話するから離して〜〜  
！！」

零夜「あっ…す、すまない…」

つい肩を揺すってしまった…

「だ、大丈夫……確か火彩君から多分こうなるって聞いてたから……」

零夜「アイツ……」

「にやはは……でも、火彩君、”アイツは良いヤツだ、何かあったら俺の名前を出して助けてもらえ。”って言ったたよ？すっごく仲が良  
いんだね。」

零夜「まあ……仲は良いな……」

「あ、名前を言うの忘れてたね。私、高町なのは。」

零夜「一応名乗っておく、影宮零夜だ。よろしく。」

なのは「道の真ん中で立ち話は駄目だよね、ちょっと着いてきて。」

零夜「ああ。」

零夜「喫茶店…？」

なのは「そ、喫茶翠屋。私のお父さんとお母さんが経営してる店なの。」

零夜「なるほど…」

零夜「…聞かせてくれ、火彩と…あの…火彩の横に居た…あの子…  
たしか…フェイト…だったか？それと君の後ろに居た、あの水色の  
服の…」

なのは「氷雨君かな？」

零夜「出来るだけ聞かせてほしい。」

なのは「うん、まず私が魔法と出会ったときの話から…」

続  
く  
…

第31話 結局の所親友は一番頼れる「…まあな」（後書き）

「どーも、作者のデスサイズ・0、略してD0です。」

零夜「主人公の影宮零夜です」

秀吉「俺が秀吉で化物級の主人公、木下秀吉です。」

D0「さて、早速だが秀吉、何故君はそんなにハーレムを形成して  
しまい、一瞬で女性を落とすのかね？」

秀吉「作者の趣味だな。」

D0「そつか、ならYou shall die!」

秀吉「うおッ!?!」

零夜「相変わらず作者は嫉妬の力で無駄に強くなるな…」

D0「アンタは一体何なんだアーーーーッ!!!!」

あしゆき「通りすがりの仮面ライ「アンタには聞いてない!」!」

…orz

ヒュウウウウ…

零夜「…何の音だ？」

ドゴオオオン！！

秀吉「なんか機動戦士みたいなのが降ってきたアアアア！？」

あしゆき「アレだね、秀吉ラバーズね科学力を結集したんだろうね。  
秀吉の首を狙うデスサイズ・0さんを粛正するために。」

零夜「本当にウチの作者がご迷惑を…」

DO「うおおおおおおお！？なんか殴ってきた！？」

零夜「死んだな。」

秀吉「死んだね。」

あしゆき「死にましたね。」







第32話 悩めばいい…そうして人は前へ進んで行く…（前書き）

もう今回みたいな話の時はサブタイトルの「」内は無しで。

派手に行くぜ

第32話 悩めばいい…そうして人は前へ進んで行く…

…ああああ…なんか…話が…ループしてる…  
とりあえず…重要だと思ったところだけどうぞ…

なのは「で、私と氷雨君が出会ったのが、ユーノ君と魔法の練習してた時でね、私に魔法の事をたくさん教えてくれたの！」

その…氷雨と言うヤツ…あってみたいものだ…

なのは「で、どこから来たのか聞いたけど、分からないって言うから今はうちに居てもらってるの！今は…多分散歩に行ってるんじゃないかな。」

零夜「うんうん…」

なのは「でね！氷雨君が私がピンチの時に……

Ok…なのは…君がどれだけその”水川氷雨”と言っヤツの事が好きなのかよく分かった…

頼むから火彩の話を…

なのは「で、最後にフェイトちゃんと戦った時に火彩君と氷雨君も少し離れて戦ってたの。」

零夜「…分かる範囲でいい、その話を聞かせてくれないか？」

なのは「うん…私は…分からないなあ…」

「なのはー!」

なのは「あ、氷雨君!」

なるほど…彼が…  
右目の眼帯が気になるが、聞かずに置こう…

氷雨「なのは、この子は?」

零夜「影宮零夜、だ。よろしく。」

氷雨「ああ、君が火彩の言ってた零夜君か。僕は水川氷雨みずかわひさめ、よろしく。」

なのは「氷雨君、どうしたの?」

氷雨「うん、フェイトと火彩からまたビデオレターが届いたから知らせに来たんだ。」

なのは「本当に!?!」

零夜「ああ…アイツら…今は管理局にいるんだっただか……」

氷雨「君も見に来ないか？」

零夜「いや、遠慮しておく。帰りが遅くなると家族が心配する。ああ、ビデオレターなら返事するだろう？火彩に俺からの伝言を伝えてくれ。」いざとなったら俺の両親、影宮剣夜、影宮零華、この二人の名前を使えばいい。大体は何とかなる。」と。」

氷雨「分かった。確かに伝えておくよ。」

零夜「さて、俺はそろそろ帰るかな。お土産に…何か買って帰りたいんだが…何がオススメかな？」

なのは「うん……」

零夜「…まあ…金がありませんが…」

なのは「あーじゃあ、シュークリームとかは？」

零夜「シュークリームか…よし、そうするか…」

と言っのが俺がまとめた結果だ。

本来はこの倍以上の長さがあった

だがぶっちゃけどうでもいい話（俺にとって）が7割で、**重要な話**  
（俺にとって）は3割だった

つまりスルーしてしまった訳だ。

そして俺は今、帰宅途中である。



零夜「もう4時か…はやてはもう帰ってるかな。」

極夜『私達と同じくらいだと思うが。』

零夜「図書館行ってる可能性もあるな。」

極夜『零夜、どうやら私の勘が正しかったようだぞ。』

零夜「あ？」

はやて「あ、零夜君！」

極夜『な？』

零夜「ああ…お前、よくわかったな…」

極夜『まあな。』

はやて「何の話？」

零夜「いや、大したことじゃないよ。それよりはいい、お土産。シュークリーム、買ってきたよ。」

はやて「これ、翠屋のやつちゃん！」

零夜「そんなに有名なのか？」

はやて「めちゃくちゃ有名やで！？知らなかったん！？」

零夜「うん…まあ…知らなかった…」

はやて「よく買ったなあ…」

零夜「まあ…な…ある意味…火彩のおかげみたいなものだけ…」

はやて「ふうん…一回、あってみたいなあ…今度、連れてきてくれへん？」

零夜「あ〜…ちょっと…アイツ、しばらく遠出するから帰るのはかなり後になるって言うてたから…しばらくは会えないなあ…」

はやて「そっかあ…それは、ちょお残念やなあ…。」

零夜「ま、帰ってきたら連絡はくれるらしいから、その時に…な？」

シグナム「主はやて、零夜、そろそろ、家に…」

零夜「そうだな、速くコレを食べよう。」

そして、翠屋のシュークリームはみんなでおいしくいただきました

零夜「はあ……」

俺は、自室で寝そべりながら考えていた

ソルジャー  
戦士として、これからどうするか

俺の夢……ソルジャー戦士として人々の役に立つなら、ここを……はやてのものを  
離れなきゃならない

けど……けど、その夢と同じくらいに……このままはやてたちと一緒に  
ここで暮らしていきたいと言っ気持ち強い……

夢……と……心……

俺は……どうしたらいいんだ……

零夜「俺は…俺は…どうしたらいいんだ…夢を実現したいのに…  
はやてと離れたくない…なんなんだよ…これは…」

極夜『…零夜…それはな…お前がはやての事を好きだと言っことだ  
と思っぞ…』

零夜「俺が？はやての事を好き…？俺は…はやての事が…好きなの  
か…？」

…その通りだ！

頭に声が響く

零夜「グッ…」

激しい頭痛に襲われる。

そのまま、俺は意識を手放した。

零夜「……またお前か…刀夜…何の用だ？」

刀夜「いや、お前の悩みを解決する方法を教えてやろうと思ってな。まあ、ヒントだけだな。」

零夜「ヒント？」

刀夜「まず一つ。…あの子…はやてだっけか？あの子の気持ちを考えてやれ。二つ目。お前はもう少し欲張れ。欲が無さ過ぎだ。三つ目。お前の魂はなんと言ってる？心は？なんと言ってる？考えてわかんないなら、頭で考えるな。魂に従え。お前のお前自身の魂に…な…」

零夜「魂…に…」

刀夜「ああ、そうだ最後に一つ。お前はあの子の事が好きだろう。ただ、それが”like”なのか”love”なのか、よく考えてみる、わかんなかったら……コレばかりは知らん!!」

そして、再び俺の意識は遠のいていった…。

零夜「……ハア……」

わざわざ俺の魂を自分の魂の空間に呼び出して言うことか…？

いや…まあ…ヒントにはなっ たかな…

零夜「はやての…気持ち…か…」



また悩む事になっちまったな…

続く…

第32話 悩めばいい…そうして人は前へ進んで行く…（後書き）

DO「This party's getting crazy!  
Let's rock!!」

零夜「どうも、主人公の零夜です。」

火彩「後書きに久々の登場、闇咲火彩だ。」

秀吉「俺が秀吉で化物級の主人公、木下秀吉だ。」

DO「Heyheyheyhey!! What's  
up?  
Is that all your that!？」

あしゆき「You must die!!」

零夜「何言ってるんだ？」

秀吉「和訳するところだな」



秀吉「やっぱ負けちまったか」

零夜「ああ。」

火彩「元の戦闘能力の差だな。」

秀吉「昇竜拳だもんな、あの技。うちの作者がいくらフォーゼに変身しても圧倒的差がある。」

DO「つしゃあー!!」

あしゆき「我が生涯に…一片の悔い無し…」

火彩「死兆星指しながら倒れたぞ。」

秀吉「大丈夫だ、問題ない。」

意味WAKARANが続く！

第33話 余計なことはするもんじゃない 「全くだ。」 (前書き)

初、零夜以外の視点で書いてみた

派手に行くぜ

第33話 余計なことはするもんじゃない 「全くだ。」

sideはやて

私は、零夜君の部屋にお風呂上がって、開いたから入ってって言いに行った、そしたら部屋の中から零夜君の声が聞こえてきた

零夜「…やっぱり俺…はやての事が好きなんだ…」

驚いてつい部屋の前で呆然としてた…

でも、嬉しかった

だって、私も零夜君の事が好きやったから。

だから - - - - -

はやて「零夜君…」

私は零夜君の部屋に入った

零夜「はやて…どうした？」

零夜君の顔が紅い

けど…多分私の顔はもっと紅いと思う…



それでも…言わなあかんことがあるんや…

はやて「零夜君…あの…その…零夜君は私のこと…好き？」

零夜「へえあつ！？／／／／／／／／／／／／」

はやて「……どお？」

零夜「…それは…その…」

はやて「私は…大好きやで、零夜君のこと／／／／／／／／／／／／」

零夜「……そう…か…そういうことか…うん、俺も…俺も、はやてのことが好きだ…！家族として…だけじゃない…はやてのことが、一人の女の子として。／／／／／／／／／／／／」

はやて「じゃ、じゃあ…」

零夜「……ストップ…」

はやて「？」

零夜君がドアを開けた

ヴィータ「うわっ!？」

シャマル「きゃあっ!？」

シグナム「おおっ!？」

零夜「…やっぱりか…」

どうやら三人が聞いてたみたいや

はやて「…はうううう…//////」

零夜「どっから聞いてた？」

零夜君が刀を持って尋問してる。

本気で怒ったみたいやな…

シャマル「その〜…け、結構始めから…」

はやて「私が部屋に入ったくらい…？」

ヴィータ「そ、その少し後…」

零夜「…よし！三人共、言い訳は後で聞くから正座して目をつぶれ！」

「…は、はいいいいい！…」

零夜「よし…！まず一発！」

パコーン！

ヴィータ「あだっ！？」

零夜「次、もう一発！」

パコーン！

シヤマル「きゃあっ!?!」

零夜「これで最後だ!」

パコーン!

シグナム「っ!?!?!?!?!」

な、なんて威力のでこぴんや…あの三人、ましてやシグナムまでもが威力だけで思っきりのけぞったで!?!?  
零夜君マジギレやん!

あ、でも私も後一発ずつ後でやっところ。

せ、せっかく私が勇気出したのに…

盗み聞きはあかんで…

ってまだ同じ威力のを!?!?

はやて「ね、零夜…その…あんまりやりすぎたらあかんで…」

零夜「はっ！？俺は一体何を!？」

「「「まさかの無意識!？」「「「

零夜「…えーと…はやくも俺も実はお互いの事が好きでドアを開けたら三人が居て…ってことはノノノノノノノノノノ」

はやく「き、聞かれてみたいやな…ノノノノノノノノノノ」

シャマル「(今の内に!)！シグナム！ヴィータちゃん！行くわよ！」

ヴィータ「え？うええ!？」

シグナム「な、何をする!？」

……二人ともシャマルに引きずられていった…

…ナイスや、シャマル。

零夜「……………」

はやて「……………」

…あかん…めっちゃ気まずい…

零夜「…はやて!」

はやて「ひゃあっ!?!?!?」

あわわわわわ…////////////////と、突然抱きしめられたああ  
ああ!?!?!?!?!?!?!?!?!?!

か、顔が…近い…//////////////

零夜君…顔もカツコイイから凄いドキドキする//////////////

零夜「ごめん、はやて…俺…何を言えばいいか…分かんなくなつて…  
…思い切つて…つい…」

はやて」「はふう……」

零夜「……はやて？」

はやて」「ふにゃあ……」

零夜「……どーしょ……はやてが……」

……こんな幸せが……ずっと続いたらええなあ……

続く……

第33話 余計なことはするもんじゃない 「全くだ。」（後書き）

DO「アグボアアア!!」

火彩「…またか…」

秀吉「おいしいい!?!いきなり錐揉み回転して飛んでるぞおおお  
!?!」

「「秀吉君に余計な手をだすなあああ!!」」

DO「あぎゃあああ!!?!つてふざけんああ!!?!」

秀吉「リンチ!?!」

火彩「怖ろしいな…」

DO「やっと帰ったか…」

ドウルン!ドウルウウウン!

火彩「あ?バイクのエンジン音?」

あしゆき「遅れてすいませーん!」

ドゴッ!

DO「オンドウルルギッタンスカアアア!!」  
キラーン!



火彩「あ」

秀吉「あ」

あしゆき「あれ？デスサイズ・0さんが居ない？零夜君も居ない？」

火彩「…零夜ならあそこで…」

あしゆき「ああ…なる程ね…はやてと…ねえ…（ニヤニヤ）よし！  
秀吉、帰るぞ！サイドカーに乗れ！」

秀吉「わかった。」

あしゆき「じゃー！」

ドウルウウウウン！

秀吉「オイ！なんかモンスターみたいなのが出たぞ！」

あしゆき「まかせな！」

（BGM：FF7戦闘曲、たたかう者達）

秀吉「って何でFF風バトル!？」

あしゆき「サンダガ！」

秀吉「って何やってんだよ！」

あしゆき「お前も戦え！」

秀吉「わかったよ！ええと…とりあえず”たたかう”だ！」

ドカバキボコッ！

テテテテーテーテッテテー

あしゆき「さすが秀吉…チートだ…まあいいや、帰るぞ。」

秀吉「ってまたきたあああ！」

あしゆき「面倒だ！」

ジャキン！

秀吉「バイクから剣がでてきたア!？」

あしゆき「食らえ！」

秀吉「何てヤツだ…！」

まだオワランヨ！

第34話 二人の仲は限界突破「ま、まだそこまでじゃねえよ……／＼／＼／」

今回は甘いです

自分でもびっくりにくらい甘いです

ブラックコーヒーがカカオ80%くらいのチョコを用意して覚悟してお読みください。

それでは

派手に行くぜ

第34話 二人の仲は限界突破「ま、まだそこまでじゃねえよ……／＼／＼／」

Side 零夜

数日後……

はやて「零夜君、今日は昼ご飯……何作るかな？／＼／＼／＼／／」

零夜「そ、そうだな……8月になって……まだまだ暑いから……ざるそばとかは……？／＼／＼／＼／／／／」

ヴィータ「……く、空間全てが……甘い……」

シグナム「……甘い……しばらくは砂糖がいらない気がするな……」

シャマル「いいわねえ……（ニヤニヤ）」

ザフィーラ「……主が幸せなら、それで良い……」



零夜「即答か…」

はやて「もうちよっと私らを頼ってほしいかな。」

零夜「…そうするよ…よく考えたら…ほとんど自分でなんとかして  
たもんな………」

はやて「まあ、そこが零夜君の良いところであり悪いところだね。」

零夜「けど、はやても…ちよっとそんなところあるだろ?」

はやて「う…言われてみれば…ちよっと…」

零夜「…じゃあ…お互い、みんなで頼って行くって事で…//」

はやて「うん!//」

「「ただいま！」」

はい、色々すっ飛ばして帰宅。

零夜「はやく、大丈夫か？」

はやく「うん、大丈夫やで。」

零夜「よかった、今日はやけに暑かったから心配だったんだ…」

はやく「もう…心配し過ぎやっ…嬉しいんやけど／＼／＼／＼／」

零夜「まあ…はやくに何かあったら大変だし…／＼／＼／＼／」

ヴィータ「…今ならブラックコーヒーでも飲めそうだ…甘過ぎてる…」



シグナム「…普通の人なら糖尿病になりそうなくらい…甘い…」

シャマル「あゝもう見てて楽しいわあゝ…（ニヤニヤ）」

ザフィーラ「…楽しいのか…？」

ザフィーラ「…的確なツツコミ、ナイスだ…俺も思ったぞ…」

はやて「じゃあ、早速始めよか」

零夜「ああ！」

はやて「じゃあ、5分計ってくれる？」



ヴィータ「…甘過ぎる…甘過ぎてもう蕎麦が砂糖の味かしねえ…」

零夜「はやて、今日は何を読む？」

今は、図書館に家族全員で来ている。

はやて「そつやなあ…また、童話を読もうかな…」

零夜「OK、じゃあ向こうだな。」

すげえ今更だけど、前に見つけた父さんの本

古代ベルカ文字読めるから読んだら

全部マスターしてる魔法でしたとさ

ハハツ   ワロスWWW

全く訳にたたねえ

零夜「さてと…俺は何を読むかな…」

何となく適当に小説を手にとってみる。

……何だこの本…

俺が秀吉でお兄様!?

………どこかで見たような気が…

ま、いつか。

はやて「零夜君、珍しくたくさん借りたなあ……」

零夜「まあね。」

つい面白くて……俺は全巻借りてしまったのだ……

はやて「じゃあ、帰って晩御飯の準備や！」

帰宅！

ヴィータ「はやてー！今日の晩御飯、何？」

はやて「ふふふふふ…今日はな…お好み焼きや！」

ヴィータ「おお！アレか！アレは美味かったからなあ〜楽しみだ！」

はやて「さあ！みんなで準備するで！まずはシャマル、野菜切ってくれる？で、ヴィータは山芋するのを手伝って！」

「「はい！」」

零夜「よし、俺はホットプレートを用意する。」

シグナム「では、私も手伝おう、一人では重いだろ。」

零夜「いや、いいよいいよ、はやてを手伝ってあげてくれ。」

一心デビルプリンガー悪魔の右腕だから力は凄い

はず…

零夜「つらあ！」

よし、やはりこの悪魔デビルプリンガーの右腕は見た目が通常の右腕でも力は凄まじいな。

力の調節はまだ完璧には出来ないけど。

この前なんて突然箸を握りつぶしてしまったり、ボールペンが砕け散ったり…

色々大変だった…



零夜「はやて、準備出来たぞ。」

はやて「こっちも準備OKや！さあ、焼くぞ！」

零夜「楽しみだ。」

はやて「はい、零夜君。」

はやてに豚肉のお好み焼きを取ってもらおう

零夜「ありがとう、はやて。」

シグナム「シャマル、その海鮮のを取ってきてくれ。」

シャマル「はい、どうぞ。」

シグナム「ん、ありがとう。」

ヴィータ「アニキ、あたしにも豚肉のを取ってきてくれ!」

零夜「はいよ。」

ヴィータ「ありがとう!」

はやて「れ、零夜君!」

零夜「ん?」

はやて「あ、あーん……// // // // // // //」

零夜「え／／／／」

マジですか…ここでそれをやるんですか…

ま、いいけどな／／／／

零夜「あ、あーん…／／／／／／／／」

はむっ…

はせて「ぶ、ぶっ…？／／／／／／／／／／」

零夜「あ、ああ…美味しいよ…／／／／／／／／／／」

実際は、緊張で味など解らなかったが。

…ハア…

いいものだな…

続く…





第35話 海へGO!。「楽しみだ…」（前書き）

みんなで海に行く話

派手に行くぜ

第35話 海へGO!!「楽しみだ…」

あれは…今から2日前の事…

はやての一言から始まった

はやて「海にいくで…」



零夜「何故こうなったし」

はやて「ふふふふふ〜」

零夜「何故こうなったし」

極夜『あきらめたほうがいいかと』

零夜「なあ、なんでまた急に海に行くなんて言い出したんだ？」

はやて「なんとなくやー!」

…マジか…

ま、いいんだけど

と言う訳で、俺たちは海…ビーチにいる

パラソルもたてた！

ビニールシートもひいた！

椅子も置いた！

飲み物も準備した！

零夜「じゃ、いくか。」

はやて「私は、ここで待ってるわ。」

シャマル「あ、私もここで待ってまーす。」

ヴィータ「なんだよ、シャマル泳げなかったっけ？」

シャマル「まあ、そんなところね…」

シグナム「では、仕方ない。我々だけで行こう。」

零夜「まあ、まずはすぐ戻ってくるよ。」

零夜「よーし…最速を目指すか…」

そういえば昔（刀夜の時）、海でサメみたいなのに出会って、ぶっ飛ばされたな…

むかついで三枚に下ろして食ってやったけど

…アレはなかなか美味かった

零夜「うおおおおお!」

ヴィータ「速っ!…なんつー速さだ!」

シグナム「あの速さはどう見ても1000m10秒前後だぞ！」

そりゃそうだ、鍛えてるからな

水中戦もなんども経験している

水中では地上とはかなり力の使い方が違い、体力を消費しやすい。

しかし、水中で何度も経験すれば、なんとかなる

何事も経験が大事なんだな、経験が

零夜「ふう…」

今は泳いだ先の岩の上で休憩中

零夜「さて…もどるかな…」

「（おい零夜、聞こえるかー！）」

零夜「…あ？火彩？」

火彩「（おー！聞こえたか！いや、超長距離思念通話のやり方を思い出したからやってみたんだ。）」

零夜「…そっぴや昔そんなのやってたなお前…」

火彩「（で？今は何してんだ？）」

零夜「海のと真ん中にいる。」

火彩「（…すまん、何をどうしたらそんな状況になるんだ？）」

零夜「（家族で海に遊びに来て泳ぎまくったらこうなった。）」

火彩「（…All right…もう何もつっこまねえよ…。）」

零夜「そういえば、この間…高町なのはと…水川氷雨だったか？あの二人に会ったぞ。」

火彩「ああ、知ってるよ、ビデオレターで言ってたしな。二人ともいいヤツだったろ？」

零夜「……………ああ……………まあな……………」

火彩「（その様子じゃ…大方、フェイトの話を延々と聞かされたんだな……………」

零夜「ああ…軽く2時間近くな……………」

火彩「（……………お疲れ……………」

零夜「…一つ聞きたい」

火彩「（ん？なんだ？）」

零夜「…いつ頃こっちに来れる？」

火彩「（そうだな…勝利確定の裁判だが…まあしばらくかかるな…  
…ま、うまいこと行って今年中にはそっちに行けるさ。）」

零夜「そのときには連絡してくれ。家族にお前の事を話したら会いたいと言ってたからな。」

火彩「（あいよ。…フェイトか？なに？時間？わかった、すぐ行く。）」

零夜「…時間切れみたいだな。」

火彩「（ああ、残念ながら。そっちに行く時は、フェイトも連れてくわ。）」

零夜「わかった。暇なときにも連絡してくれてかまわない。」

火彩「（ああ、じゃあな。）」

零夜「ああ。またな。」



はやて「あ、零夜君おかえりー」

零夜「ただいま。」

はやて「聞いたで、物凄い速さで泳いでいったらしいやん。」

零夜「ああ…まあ…ね…」

はやて「随分遠くまで行ったみたいやな。だいぶ帰って来るの遅かったし。」

零夜「いや、火彩から連絡が入ってね。ちょっと話してたんだ。アイツ、今年中には戻れるからその時にはには家に来たいってさ。」

はやて「それは、楽しみやなあ。」

零夜「どうやら、友達も連れてくるらしいぞ。」

はやて「ますます楽しみや！」

零夜「もう昼か…」

はやて「じゃ、お弁当食べよか！私と零夜君の最高の弁当やで」

零夜「は、はやて…大げさだ…」

シャマル「ちなみに私も手伝いました！」

シグナム「なん…だと…」

ヴィータ「…大丈夫なのか？」

零夜「大丈夫だ、問題ない。」

はやて「具材を切ってもらったりしたただけやから、大丈夫や。」

シグナム「まあ…主はやてがおっしゃるなら…」

ヴィータ「アニキも言ってることだしな…」

零夜「つかそれだけで何か起きたら逆に凄いで…」

ヴィータ「…いや、シャマルは何が起こるかわかんねえからな…」

「」「」「確かに」「」

シャマル「え〜〜!? ひーどーいー!…」

はやて「じよ、冗談やって! なあ!」

零夜「あ、ああ…。」

ヴィータ「お、おっ」。。

シグナム「は、はい…。」

ザフィーラ「……。」

なんか言え…ザフィーラ…

零夜「と、とにかく気を取り直して…いただきます！」

「……………いただきます。」

ちなみに弁当箱はでかい重箱で3段になっている

中身は一段目がおにぎり、二段目がおかずで、玉子焼きとか野菜とか、そう言うのが入ってる。

で、三段目は、唐揚げとか、ウインナーやらが入っている。

さらに別に、クーラーボックスの中に俺特製アイスが入ってる。

ヴィータが物凄い楽しみにしていたな

ヴィータ、アイス好きだからな。

零夜「はやて、あーん…// // // // //」

はやて「あーん…あむっ…// // // // //」

零夜「美味いか？」

はやて「うん！」

零夜「んじゃあ、食べたからまた泳いでくるよ。…そうだ、はやても一緒に泳ぎに行こう、俺がおぶって行くから。」



じゃあなんでやったんだって言われそうだが気にしない

零夜「はやて、すっかりつかまってるよ……」

はやて「う、うん……」

静かに海に入っていく

始めは浅い所にいたが、しばらくして深いところに泳いでいった

零夜「はやて、大丈夫か？水が口とかに入るようなら肩を叩くなり  
してくれ。」

はやて「うん…大丈夫…」

零夜「よし、もう少し行くぞ…」

はやて「零夜君…そろそろ…戻りたいんやけど…」

しばらく泳ぎ回って、あちこちを見て回った後、はやてが俺の耳元で呟いた

零夜「ん、了解。急ぐよ。」

最高速度、とは行かないがかなりの速さでビーチまで戻っていく。俺に掴まるはやての腕の力が少し強くなる。

零夜「はやて、もう直ぐ、着くぞ。」



はせて「…うん…」

気のせいか、声が少し残念そうな感じがした。

零夜「ふう……よつとー!」

はせて「きゃッ!」

再びお姫様抱っこをして、戻っていく。

はせて「うう……やっぱり恥ずかしい……  
／／／／／／／／／／／／／／／／」

零夜「が、我慢してくれ……コレが一番早いんだからな…  
／／／／／／／／／／／／／／／／」

はやて「う、うん…／＼／＼／＼／＼／」

零夜「……／＼／＼／」

はやて「……／＼／＼／」

「た、ただいま…／＼／＼／＼／＼／」

ヴィータ「…マジではやて背負って泳ぎ回ったのかよ…」

零夜「ああ…／＼／＼／＼／＼／」

はやてをシートの上に降ろしながら、答える。

シグナム「しかし…その小さな体のどこにそんな体力があるんだ…」

零夜「鍛えてるからな……」

シグナム「…鍛えてるとかそんな話ではすまない気がするのだが…」

零夜「……戦士ソルジャーだからな…経験だよ経験。水中戦とか、何度も経験していたらだいたい何とかなる……多分……」

シャマル「まあ、とにかくお疲れ様。はい、スポーツドリンク。」

零夜「お、ありがとう。のどが乾いてたんだ……」

500mlペットボトルの中身を一気に飲みする。

零夜「フウ…俺はちょっと休憩する…疲れた……」

ヴィータ「疲れない方がおかしいと思うぞ……」

零夜「そりゃそうだ……」





無論、はやての顔も真っ赤だろうけど…

はやて「ッ…零夜君…」

俺ははやてのそばにさらに近づいた。

ギリギリ体が当たらないくらいの近さだ。

二人でそのまま、ぼうつとしていると、はやてが俺の肩に頭を乗せて、寄り添ってきた

俺は、背中側にあるクーラーボックスに体を預けると、急に眠気がしてきて、そのまま意識を手放してしまった…

零夜「…ん…」

どれくらい眠っていたのだろうか…

辺りはすっかり夕焼け空になっており、人々は片付けて、帰る準備をしている。

シグナム「ああ、すまない、起こしてしまったか…」

零夜「いや、大丈夫だ…」

よく見ると、ほとんど片付けを4人でやってくれていたようだ…

零夜「はやて…」

はやての肩を揺すってまだ眠っているはやてを起こす

はやて「ん…んん…」

零夜「はやて…起きろ…」

はやて「ん……………あれ…？私…眠ってもうた…？」

零夜「ああ…俺もな…」

ヴィータ「二人とも、早く着替えないと帰るのが遅くなるぞ。」

はやて「ほんまやな…じゃあ、着替えよか…」

さずがに「こっちは…割愛だよな…」





続く…

来年も…みんなでこつやって過ごせたらいいな…

第35話 海へGO!!「楽しみだ…」(後書き)

DO「昨日、自転車がぶつ壊れた作者、デスサイズ・0です。」

零夜「最近はやてに依存してき始めたような気がする主人公、零夜だ。」

はやて「零夜君をさらに落とすにはどうするか毎日考えてるヒロイン、八神はやてや。」

秀吉「ゲストを超えてもはや後書きレギュラー化、木下秀吉だ。」

DO「いきなりだが、この後書きに名前をつける。」

零夜「超唐突だなオイ」

DO「うるせえ、タイトルは、”夜天の影ラジオ”略して”夜影ラジオ”だ」

秀吉「略す必要あったのか？」

DO「気分の問題だ気分の。」

はやて「けどこの名前、ついさっき友達にメールで…」

DO「何も言うな—————ッ!」

続くのか!?

第36話 1日1日を大切に（前書き）

大切にね

派手に行くぜ

第36話 1日1日を大切に

夏も終わり、もう秋になったある日

俺は朝、いつもより少し早く起きた。

いや、目が覚めたと言った方がいいかな？

まあそんなことはどうだっていい。

そんな事より、目の前の問題を解決する方が大切だ。

俺は昨日、いつもより少し早く就寝した…

無論、1人でだ。

だが何故

はやてが俺の隣で、しかも抱きつきながら寝てるんだ!?

しかもご丁寧に俺の体の向きを横にむけて向かい合わせの状態で!!

何があっただろうなった!?





はやて「…ばれた？」

零夜「当たり前だ…俺が起きようとした瞬間に抱き締める力が強くなったからな…そんな事より…何で俺の部屋で寝てるんだ？」

はやて「だって…ずっと一緒に居たかったんやもん…／／／／／／／／／／／／／／／」

零夜「ったく…」俺は改めて起きようとする

はやて「ん〜…もうちょっと一緒に寝てようやあ…／／／／／／／／／／／／／／／」

零夜「いや、朝ご飯作らねば…」

はやて「心配あらへん、昨夜作って後は温めるだけやから…それに、みんなには協力してもらってるし…」

全員共犯!?

零夜「何故こうなったし」

はやて「だから…今日は二人でゆっくり寝よ…」

零夜「…何故こうなったし」

零夜「そろそろ起きないとマズくないか？」

はやて「今何時？」

零夜「10時30分」

はやて「ふええ！？寝過ぎた！」

零夜「だつたら早く起きよう…よつと…」

俺ははやてを抱きかかえて車椅子に乗せてやる

零夜「じゃ、朝ご飯食べて、昼御飯の準備をちよつと始めようか。」

はやて「おはよう…！」

シグナム「おはようございます、主ははやて。」

シャマル「おはようございます、はやてちゃん。」

ヴィータ「おはよう！はやて…！」

ザフィーラ「おはようございます。」

零夜「あ、俺には何も無いのね…ははは…」

零夜「はあ…疲れた…」

俺は朝ご飯を食べた後、今日まさかの買い物行くのを忘れていたと言う事態が発生し、全力疾走で買い物に逝って来たのだ…

はやて「零夜君、字が違うで…」

はやて、地の文に突っ込みを入れるのはやめてくれ…それとあれはそれだけ疲れたと言っただけだから…

はやて「ふ〜ん…とにかく、お疲れ様！」

零夜「ああ…」

はやて「じゃあ零夜君は休んでて、今日は私が作るから。」

零夜「ああ…そうさせてもらっよ…」

はやて「よっしゃ、できた！ヴィータ！食器用意してくれる？」

ヴィータ「はい！」

零夜「ふう……」

俺はソファに座ってくつろいでいた

さすがに10分間全力疾走は疲れる

まあ昔の俺なら余裕だったが

影宮万夜

零夜「…もう…10月か…」

残暑も無くなり、そろそろ少しずつ肌寒くなり始める時期だ。

零夜「…平和だな…」

つくづく思う。

刀夜の時は  
かつては戦うしかなかった

戦うことしかできなかった

それしか知らなかったから…

一度死んで、”零夜”とひと生きて、記憶が戻って、何故が刀夜が俺の中に居て、俺と刀夜が別人なのか同一人物なのか解らないけど

刀夜の記憶は受け継いでいる

そのせいなのか

平和に過ごしているとなんだか僅かに違和感を感じるときがある

平和なのは嬉しいが、もっと戦いたい

そんな感情が、俺の中にある





そんな事を忘れていたい…

だから…

もっと…

グイータと…

シヤムルと…

ザフイーラと…

シグナムと…

はぢせしと…

あつとと…あつとと…一緒に…

平和に…暮らしていく…

その平和を守るために…

俺は戦う…!!

はやて「零夜君？」

零夜「ん…あぁ…」

はやて「もう…そろそろきからずっと呼んでるのに…」

零夜「ごめんごめん…ちょっと考え事をね…」

はやて「昼御飯、できたで。」

零夜「わかった、今行くよ。」

…やっぱ…平和が一番だな…

たぶ...

この平和が崩れるなんて…

このときの俺には予想も出来なかった…



続  
く  
…

### 第36話 1日1日を大切に（後書き）

…今回、夜天の影ラジオ…まありやくして夜影ラジオは無し…

次回から、A・S編突入

それでちょっと注意と予告？みたいなのをします。

まず、今まではほぼ全て零夜視点で進んできましたが、次回からは  
そうは行きません

基本は第三者視点か零夜視点で進めます

どうしてもと言う場合、そのキャラの視点に変わります

だから突然変わってややこしくなるかもしれません。

ではA・s編の予告的なやつを…  
Angel Beats!っぽくやってみました…

「あの男…ただ者じゃない…」

「話を…聞いてっばー!!…」

「悪いな、これもアイツの為なんだ…」

「てめえ…何者だ…」

「…友達だ…！」

「…ただの戦士ソルジャーさ…」

「俺が…お前を止める…！」

「僕も忘れないでよね…！」

「……来い……」

「…その仮面の下はどんな面してんだろうなア…オイ…」

「もう…止まれん…止まれんのだ…！！！」

「邪魔を…するな…！！！」

「悪魔で…いいよ……」

「…何で…何でこうなったんだあああああ…！！！！！！！」

「…見せてみな…お前の本気をよお…！！！」

「消え去れ…！！！」

「お前じゃ俺には勝てねえよ」

「目を覚ませ…！」

「もう…遅すぎたのだ…何もかも…」

「違う！夢は…！他人から与えられる物でもなく、他人にかなえてもらつものじゃない…！自分で掴み取る物だ！」

「名前をあげる…」

「やっば、最後は主役に譲んねえとな！」  
「お膳立てはしたよ！」

「うおおおおお…！このッ！一撃でッ…！」

「これでいい…」

「…さて…そろそろ行くか？」

「ああ…！」

「さあ…派手に行くぜ…！」

と…まあこんな感じでしょうか…

まあ…今書いたセリフを必ず使うとは限らないんですが…

ではでは…次回、

A・S 編第1話 突然じゃない始まりなんてつまらないだろ？

…派手に行くぜ!!

A・S 第1話 突然じゃない始まりなんてつまらないだろ？ (前書き)

ついにA・S突入！

Let's rock!! (派手に行くぜ!!)

A・S 第1話 突然じゃない始まりなんてつまらないだろ？

12月2日

俺は相変わらずぼんやりと毎日を過ごしていた

大して変わった事もなく…

そういえば、最近みんながよく出歩いている

まあ夕方が、夕食前には帰ってくるから良いんだけど。

俺や守護騎士たちが八神家に来てもう半年だ

きっとみんなもこの町でやりたいことが見つかったのだろう

俺もはやてもそう考え、特に何も言わないでいた

まあ、別段問題があるわけではないしな



と、言いたいところだが…

残念ながら俺には全員何かを隠してるようにしか思えない

まあ…しばらくは待つか…

零夜「じゃあはやて、また後で

はやて」「うん、じゃあ」

今は図書館に居る。

さあーて…今日は何を読むかな…

あ？

目に止まったタイトルは…

俺が秀吉で化物級

……またお前か…

零夜「とかいいつつ…借りてしまっただよな…俺は…」

ちて…早くはせてのどこに行かなきゃな…

零夜「あ？」

はせてがいない？

零夜「…どこ行った…？」

……ま、歩き回りやすぐ見つかなだろ……

零夜「お、いたいた……」

はやてが誰か知らない子と話している……

珍しいな……

……これは行った方が良いのだろうか……？

それとも成り行きを見守った方が良いのだろうか……？

どうするっ？どうする！っ？どーすんの俺……！っ？

…とかいってもポケットには何も入ってはないのだが。

何？意味が解らない？

なら気にしないでください。

零夜「…先に出口で待ってとかか…」

零夜「あ、シャマル。」

シヤマル「零夜君、…あれ？はやてちゃんは？」

零夜「友達と仲良く喋ってるよ。もう来るんじゃないかな……俺は先に出ておくよ。」

シヤマル「わかったわ。あ、それと多分外にシグナムが居ると思うから……」

零夜「ん、わかった。」

さあーて…今日の晩御飯は何が良いかな…

零夜「お、シグナム」

シグナム「零夜？…主はやてとシャマルは？」

駐車場でシグナムは待っていた

…なんで駐車場なんだ…？

零夜「はやては友達と楽しくお喋りだ。ま、もう少しで二人とも来るぞ。」

シグナム「そうか…」

シャマル「はやてちゃん、寒くないですか？」

はやて「うん、平気。シャマルも寒ない？」

シャマル「私は、全然。」

零夜「つと…噂をすればきたな…と…」

はやて「シグナム!」

シグナム「はい…」

はやて「晩御飯、シグナムとシャマルと零夜君は何食べたい?」

シグナム「ああ、そうですね、悩みます…」

零夜「そうだな…何がいいかな…」

シャマル「スーパーで材料を見ながら、考えましょうか。」



はやて「そやね。」

零夜「そう言えば、ヴィータは今日もどこかに出かけたのか？」

シヤマル「あ…えっと…そうみたい…」

はやて「最近、よお出かけてるなあ…」

シグナム「外で遊び歩いているようですが、ザフィーラが着いていきますので、あまり心配はいらないですよ。」

はやて「そっか…」

シヤマル「でも…少し距離が離れても、私達はずっとあなたのそばにいますよ…」

シグナム「はい、我らはいつでも、あなたのそばに…」

零夜「…俺も…な…」

はやて「…ありがとう…」

最近、みんなが時々意味深な事を言う時がある…

…それに…騎士としての風格？オーラ？

まあそんな感じのものが戻ったと言うか…

何と言うか、鋭くなった感じがする。

俺はやてに対する態度なんかは変わってはいない

むしろ、はやてに対しては優しくなった気がする。

…それに…以前からだか…監視されている…

さらに…最近監視がより厳しくなった気がする…

家のすぐ近くに魔力反応がある…

そして…監視が厳しくなった時期と、みんながよく出掛けるようになった時期が一致している…

やはり…なにかあったな…

ま、今日の夜中にでも聞いたですか…

続く…

A・S 第1話 突然じゃない始まりなんてつまらないだろ？（後書き）

DO「イヤッハー！夜影ラジオ！始まるぜ！FF13をFF13・2発売までにクリアしたい作者、デスサイズ・0です！」

零夜「有り得ないなんてことは有り得ない。主人公の影宮零夜だ。」

はやて「いかに零夜君の布団に忍び込むか悩んでるヒロイン、八神はやてです。」

秀吉「この場所に来るまで命懸け。俺が秀吉で化物級の主人公、木下秀吉だ。」

零夜「ってかははやて…そんなこと考えてたのか…」

はやて「え！？いや、作者に言ってくれって頼まれて…」

DO「ちげえよ！秀吉だよ。」

秀吉「…違う！あしゆきだ！」

零夜「なるほど…ちょっと行ってくる…」

はやて「…計画通りや…！」

秀吉「…新世界の神みたいなこと言ってんぞ…」

DO「…狸の片鱗をみせ始めたか…」

秀吉「狸…？意味わかんねえ…」

DO「…まだ君が理解する必要は無い…まあ、いずれ…君にもわかるぞ…」

秀吉「零夜も大変だな…」

DO「ちびたぬはやて…ぶごはああああ…！」

ドサッ！

秀吉「血吐いて倒れた!？」

続かなければ生き残れない!!

A・S 第2話 大切な約束は絶対に破るな。例えどんな理由があっても…だ…

大切な人との約束は何があっても守ろう

Let's rock!! (派手に行くぜ!!)

A・S第2話 大切な約束は絶対に破るな。例えどんな理由があっても…だ…

零夜「…1時…か…」

無論、深夜1時だ。

俺はこっそり出かけたヴォルケンリッター全員が帰ってくるのを待っている…

…彼女達は…確実に最近戦闘行為をしている…

理由は3つ

血と埃の混じった独特の匂いが僅かだがする。

つまりただの喧嘩などの戦闘行為ではない

命懸けの戦いだ

ま、血の匂いなど普通は解らないのだが…俺は解る…

もう一つの理由は妙に焦っていること

最後は、時々意味深なセリフ聞く

自分たちは、はやてと一緒にだ、とか、どんなに離れても一緒だ…とか…

まるで、はやてを安心させるように…

一度だけ何をしてるか遠回しに聞いて、あの時は上手くごまかされた振りをしたが…

やはり今回はそうは行かない…



今なにが起きてるか……しっかり話してもらおう……！

シグナム「よし、バレないように、静かに行けよ……」

ヴィータ「おう……」

零夜「こんな時間まで何やってんだ……？」

ヴィータ「アニキ！？」

零夜「ま、何やってんだかはだいたい解るんだがな。とりあえず、リビングに來い。はやてを起こさないようにな。」

零夜「ま、とりあえず俺の予想はここ最近、みんな戦闘行為をしている、理由は帰ってきた時に血と埃の混じった独特の匂いがある。そしてそれははやてにと闇の書に関係している。最後に何か期限があり、それは近いと言っこと。どうだ？」

シグナム「全く持ってその通りだ…」

零夜「…話を…聞かせてくれ…」

シグナム「…わかった…」

零夜「…」

俺は全てを聞いた。

はやての足の麻痺は病ではなく、闇の書の呪いであること、さらにその麻痺が上に進行しつつあり全身に回れば死に至る、もしくは植物状態になりかねないということ。

麻痺を治す、少なくとも進行を止めるためには闇の書を完成させ、はやてを真の主にしなければならぬこと。

完成させるためにはリンカーコアから魔力を蒐集しなければならず、魔導師を襲撃し、ついに管理局に見つかってしまったこと。

零夜「…なるほどな…」

シグナム「すまない…お前には、主はやてと一緒に居てもらいたかった…」

零夜「…なるほど…つまりお前達ははやてとの約束を破った訳か…」

シグナム「それは……」

零夜「大切な約束を破るのは最低だ。……例え……理由があつたとしても……」

ヴィータ「けど……そうしなきゃ……はやてが死んじゃうんだよ！アニキだつて、はやてには生きていてもらいたいだろ！？」

零夜「……ああ……当たり前だ……！それに……何故はやてにそのことを伝えない？はやて自身の命に関わることだぞ。」

シヤマル「そ、それははやてちゃんが駄目だつて言うだろうし……」

零夜「……本当にそう思うか？俺達は家族だぞ……本当にはやての事を信用しているのか……？」

ヴィータ「違う！違う！あたし達は家族だ！はやてやアニキの事だつて、本当の家族と思つてる……！」

零夜「なら何故……道を一つに絞つた……？何故……約束を破つた……！はやてに言えないなら俺に言うなり、何かあつたはずだろう……！」

俺は怒っていた

はやてが信頼されてないんじゃないかと思ったからだ

俺が信頼されてなくても、はやては信頼してほしかった。

シグナム「…それでも…主はやてと…零夜と…共に暮らせる平和な未来を創りたいのだ…!!」

零夜「…!!」

…思い出した

そう言えば、昔同じような事を言ったヤツが居たはずだ…

あれは…誰だ…？

思い出せない…

まあそんな事はどうだって良い。

零夜「…わかった…はやてには黙っておく…。」

シグナム「…すまない…。」

零夜「…何人殺った…？」

シグナム「1人も殺してはいない…。」

ヴィータ「はやての未来を、血で汚したくないからな…。」

零夜「…そうか…。」

甘いな…だが…これで良いのかもしれん…

零夜「シヤマル、闇の書の蒐集はリンカーコアから魔力を蒐集するんだっただな？」

シヤマル「ええ…そうだけど…。」

零夜「だつたら…人間以外の生物からも蒐集は可能か？」  
シヤマル「ええ…でも…思ったより効率は良くないわ…」

零夜「…なら…できる限り魔導生物から魔力を蒐集するんだ…魔導師から蒐集するときは向こうから来た場合のみに限る。それならある意味、正当防衛にする事も不可能ではないかもしれん…」

シグナム「だが…生物から蒐集する場合は手強い割には魔力があまり蒐集出来ない事の方が多い…」

零夜「わかつてる…だから…俺が出る…まあ、俺が出れば少しはマシにはなるだろう…それに、生物のほづが、魔導師を相手にするよりはマシだ。」

シヤマル「でも…それじゃはやてちゃんが…」

零夜「…ああ…だから、俺はあまり出られないだろう…深夜か、はやてがない時か、お前達が危険な状態になった時連絡してくれた時くらいだろう…」

シグナム「なら…その時は頼む…」

零夜「…了解した…そう言えば、管理局に見つかった時、

顔は見られたのか…？」

シヤマル「ええ…変身魔法でも使っておけば良かったわ…」

零夜「今更使つても遅い…俺だけでも変装して、影で魔力反応を消して、探知不能にしておくか…：それと、もし捕まったら、俺が闇の書の主だと言え…俺ならばそれなりの相手でも逃げることもくらいは出来る…」

シグナム「…わかった…」

零夜「それと…気付いてるか解らんが…俺達は何者かに監視されている…」

シグナム「何…！？」

零夜「…おそらく…今は大丈夫だが…朝7時前後から…夜11時前後まで監視されている…何者かは解らんが…おそらく目的は闇の書…もしくは主であるはやてだろ…」

シヤマル「なら…家の周りにセンサーや通信妨害とかをしておいた方がいいかしら…」



零夜「ああ、特に、はやての部屋と、闇の書が置いてある場所を重点的に……な……もう3時か……もう寝よう……続きは明日だ……」

続く……

A・S 第2話 大切な約束は絶対に破るな。例えどんな理由があっても…だ…

夜影ラジオ、派手に始まるぜ！

DO「どうも、世界歪みを具現化した存在、作者のデスサイズ・0  
です。」

零夜「覚悟は決まった、もう迷わない。主人公の影宮零夜だ。」

はやて「計画通りに物事が進んで楽しいヒロイン、八神はやてや。」

秀吉「自分がゲストである事を忘れて来た、俺が秀吉で化物級の主人公、木下秀吉だ。」

DO「…あしゆきさんは…？」

零夜「…さあな…」

DO「秀吉…どうなったんだ…？」

秀吉「…俺の口からは言えねえ…あいつはよくやった…だが…零夜  
には…な…」

DO「…何があったし…」

はやて「ふふふふ…計画通りや…!」

秀吉「…なんか…はやてちゃんがどんどん黒くなっていくよつな…」

零夜「…はやて…可愛いな…// // // // //」

D O、秀吉「ダメだコイツ…はやく何とかしないと…!」

零夜「はやて…今日はもう一緒に…」

はやて「うん…一緒…」

「ゴゴハアアアア!」(吐糖)

続かなければ生き残れない!!

A・S 第3話 再会、そして引越し!？」Ha…なかなか面白そうじゃねえか

今回は火彩の視点

そして大切な話がありますのであとがきを見てください

では

L e t ' s r o c k ! !

A・S第3話 再会、そして引越し!?」Ha…なかなか面白そうじゃねえか

12月2日 PM8:00

火彩「クソツ…俺が…俺がもっとはやくたどり着けていれば…」

なのはも…フェイトも…氷雨も…怪我をせずに済んだかもしれないな  
ったのに…!

火彩「…俺の…俺のミスだ…!!」

氷雨「火彩…」

火彩「…!氷雨が…久しぶりだな…なのはとフェイトは?」

氷雨「大丈夫みたいだね。なのはもリンカーコアの再生がもう始ま  
ってるし、フェイトの怪我も軽いものだから…今は二人で話してる。」

火彩「…氷雨…お前は大丈夫なのか?」

氷雨「うん、僕は大丈夫、かすり傷だから。」

火彩「そうか…もっと俺がはやくたどり着けていれば…」

氷雨「来てくれただけでも十分だよ…」

火彩「そうか…そう言ってくれと有り難い…」

クロノ「火彩、面接の時間だ。」

火彩「ん、わかった。」

氷雨「面接？」

火彩「ちよつとな。」

クロノ「ちょうどいい、氷雨、君も来てくれ…」

氷雨「…僕も…？」

「…たく…管理局なんざ信用したくねえし上層部は腐ってやがるし…  
めんどくせえな…仕方ねえ…フェイトの護衛くらいの気持ちで行  
くとすつか…」

クロノ「失礼します」

「…ああああ…めんどくせえええ…よし…俺の話以外は右から左へ  
聞き流すでしょう…」

「クロノ、久しぶりだな」

「ソファに腰掛けた柔和な笑み浮かべる温和そうな老人がいた…やっ  
ぱり上層部の人間か…めんどくせえええ…」

とか言いつつ…俺達はソファに腰掛け、対談を始める

たしかこのじいさん…名前は…ギル・グレアムだったか…？

時空管理局顧問官…だったはず…

「保護観察官といっても、まあ形だけだよリンディ提督から、先の事件や君の人柄は聞かされたしね…とても、優しい子だと…」

フェイト「有り難うございます……」

…フェイトが顔を少し紅くして頭を下げた。

そして、俺の方を見てきた。

グレアム「そして…火彩君は自分の記憶が無いにも関わらず彼女を護るために何度も戦った…どんなときも彼女を信じ、彼女の事を案じ…彼女を守るため戦ったそうだね…」



火彩「…はい」

…普通の人間ならここで大喜びするんだろうな…

で…この後は氷雨、なのは、フェイトは話を真剣に聞き、質問に答えていた。

ま、俺は適当に答えていた。

…気のせいか…クロノが額に常に青筋が浮かべてたな…

ま、どうつでも良いことだ…

で、対談が終わり、退出するときクロノは俺を睨みつつ、去り際にある報告をしていた

クロノ「既に聞き及びかもしませんが、つい先ほど、自分たちが  
ロストロギア”闇の書”の搜索担当に決定しました…」

グレアム「そうか…君がか…言えた義理ではないが…無理はするな  
よ…」

クロノ「大丈夫です。”窮地の時こそ冷静さが最大の友”…提督の  
教え通りです…」

グレアム「…そうだったな…」

クロノは冷静に伝え、そのまま俺達は退室した

クロノ「火彩…何をやってるんだ…あの態度は…確かに君は管理局  
が嫌いと言っていたが…あの態度は無いだろう…!」

フエイト「ま、まあクロノ、落ち着いて…火彩も悪気があった訳じゃないと思うから…」

クロノ「いや、あの態度は悪気があった！どうなんだ！火…何かあるな…」は？

火彩「あのじいさん…何か隠してやがる…それもかなり厄介な何かを…」

なのは「でも、優しい方だったと思うけど…？」

氷雨「火彩…やっぱり君もそう思うかい？」

火彩「ああ…普通の人間は特殊な訓練を受けるなどしなければ、何か隠し事があると、必ず何かその兆候が見られる。そしてその隠し事に近い人間がそばにいればなおさら分かり易くなる。」

…ま…大したことでなければいいんだが…

火彩「…フェイト、バルディッシュはどうだ？」

フェイト「うん…かなりひどいみたいで…部品交換が必要みたい…」

火彩「そうか…レイジングハートもかなりやられたみたいだな…」

…状況はよくない…エース二人を欠いた状態ではかなりキツイ…

ヤツらに正面から対抗できて動けるのは三人…いや…クロノは…微妙だから外すか…

つまり実質俺と氷雨か…

地球周辺が事件の中心…

零夜に頼んで協力してもらうか…？

いや、ダメだ…あいつの家族には魔力を持つヤツが居たと言ってた…

間違いなく零夜は家族を守るから協力は見込めない…

…二人か…

刀夜…お前ならどうする…？

敵は4人…それも全員がかなりの使い手…

対するこちらは4人…いや、現段階では2人…

刀夜…何か良い策はないか…？

お前ならどんな時でも、策を張り巡らして俺達を助けてくれるだろ…？

俺はもう居ない親友に語り掛けた

火彩「はあ…だめだ…訳わかんねえ…」

作戦とかを考えるのは昔は零夜が団長に任せてたからな…

白夜『お前に考えるなんて似合わねェよ…』

火彩「全くだ…」

氷雨「火彩」

火彩「氷雨か…」

氷雨「今回の事件資料借りてきたんだけど見てみるか？」

火彩「いや、いい。」

氷雨「なんで？」

火彩「読んでもさっぱりわからん。とりあえず敵は自分で戦って戦い方を確立させりゃ問題ないし、今まで何人が犠牲になつたかなんざ全く興味はねえ、場所が解つてりゃ十分だ。感覚で覚えれる。」

氷雨「本当に火彩ってバカなのか天才なのかわかんないよね…」

火彩「…よく言われる…」

で、そのあとまさかの事態が発生した

なんとアースラがぶっ壊れて（戦闘訓練中に俺がぶっ壊したのだが）修理中だから地球のなのは家のすぐ近くに臨時作戦本部を建てるといふのだ。

…色々めんどくさそうだが…ま、フェイトが居るからいいか…

ちなみに今のセリフを本人達の前で言ったらアルフに「アンタどんだけフェイトのこと好きなんだよ…」と言われてしまった。

そのときフェイトは顔を真っ赤にしてうつむいて何か言ってたが聞こえなかったから気にしないでおい



…で

地球…海鳴市……………だっ たっ け…？あ っ て る よ な ？

氷雨「誰に言ってるんだよ…？」

火彩「……………読者の方虚無の存在にさ…」

氷雨「なるほど…」

火彩「さて…俺はちょっと散歩に行ってくる、なのはとフェイト達に言っといてくれ。よっつと…！」

俺はベランダから飛び降りた

上から叫び声が聞こえるが気にしない

気にするつもりはこねっぽっちもないね

俺は自由にやらせてもらっ

さーて…どっすっかな…

零夜の所にも行ってみるかな…

火彩「よし…（零夜、聞こえるかー？）」

………

反応が無いな…何か用事か？出掛けてんのか？

また今度にするか…

…余計に暇になっちまったな…

ま、ブラブラすっか…

火彩「臨海公園か…ちよいと行ってみるか…」

ベンチがあるので腰をかけた

で、ふと横を見てみると…

火彩「…あ？」

零夜「…あ？」

…何やってんだ…？零夜…

火彩「こんな所で何やってんだよ零夜…」

零夜「火彩こそ…いつこっちに戻ってきたんだ…」

火彩「今日、ついさっきさ…最近どうよ…」

零夜「はっきりいってあんまり良くないな…」

火彩「何かあったのか…？」

零夜「大したことじゃない…お前の手を借りるまでもないさ…俺が守りきるからな…」

火彩「…そいつあ…最近この世界の周辺で発生してる魔導師襲撃事件からか…？確かお前の家族には魔力持ちが居るって言ってたからな…」

零夜「ああ…だが…デバイス…ましてや魔法の使い方すら解らない…だから俺が何とかする…！」

火彩「…俺やフェイト、なのはや氷雨もはやく事件を解決するようになんとかする…」

零夜「火彩…俺達のこととは管理局には言わないでくれないか…？魔力を持つてるとかで何かとうるさいから…家には影で魔力反応が無いようにしているのだが…」

火彩「解ってるよ…静かに暮らしていきたいんだろ？大丈夫だ、管理局には俺に記憶は無いと説明してある。だから大丈夫さ。記憶があることと事情を知ってるのはフェイトとアルフとお前とくらいだからな…」

零夜「そうか…すまないな…」

火彩「何、大した事じゃねえよ、親友の頼みだからな。」

零夜「さて…俺はそろそろ行く…」

火彩「そうか、どっか行くのか？」

零夜「なに、ちょっと図書館にお姫様を迎えに行くんでな。」

火彩「Ha……そうかい、気を付けてな。」

零夜「ああ、お前もな…事件が解決してからでもウチに来てくれ…」

火彩「そうさせてもらっぜ…」

零夜「またな……」

火彩「ああ……」

続く！

A・S第3話 再会、そして引越し!? 「Ha…なかなか面白そうじゃねえか

夜影ラジオ、派手に始まるぜ!

DO「50000アクセス突破アアアアア! 狂喜乱舞中の作者、  
デスサイズ・0です。」

火彩「まさかの俺が呼ばれるという事態。闇咲火彩だ。」

フェイト「えっと…火彩と一緒に呼ばれて来た、フェイト・テスト  
ロッサです…」

秀吉「相も変わらずここに存在する。木下秀吉だ。」

火彩「…作者、零夜はどうした。」

DO「…今回は火彩視点だったから零夜は来ない。と言うか、ここ  
はその話の視点のキャラともう1人しか呼ばねーよ。しかも俺は零  
夜か火彩か氷雨か三人称視点しか書かない。つまり呼ぶのは零夜×  
はやて、火彩×フェイト、氷雨×なのは。この組み合わせ以外有り  
得ない。」

フェイト「それって主人公とヒロインの組み合わせなだけなんじゃ  
…」

DO「そこは突っ込まないでくれ…」

秀吉「三人称の時は誰を呼ぶんだよ。」



D O「俺と秀吉だけ。」

秀吉「ヲイ」

D O「さて…この小説がついに50000アクセス突破したわけですが…何か記念の話を書きたいのです。ツイッターで、アンケートを取ります。どんな話を書いてほしいか、感想、メッセージ、どんな方法でも構いませんので答えて頂ける方はよろしくお願いします。期限はとりあえず日曜日の朝10時までになります。1人一回でお願いします。あと、少なかつた場合、多分書く話は独断と偏見だけで決めるかもしれませんがご了承ください。では！」

続かなければ生き残れない！

A・S第4話 蒐集(前書き)

今回はちよつと戦闘

L e t ' s r o c k ! !

A・S 第4話 蒐集

深夜1時

海鳴市内、某ビル屋上。

零夜「悪い、遅くなった。」

シグナム「いや、問題はない。」

シャマル「管理局の動きも本格化してくるだろうから今までのようには行かないわね……」

シグナム「少し遠出をする事になるな……なるべく離れた世界での蒐集を……」

零夜「…今何ページだ？」

俺が聞くとシャマルはページをめくって確かめる

シャマル「今、340ページ…こないだの白い服の子でかなり稼いだわ」

ヴィータ「よし、半分は超えたんだな…！ズバツと集めてさっさと完成させよう！はやく完成させて、ずっと静かに暮らすんだ…はやとと…アニキと…いっしょに…」

シグナム「……」

シャマル「……」

ザフィーラ「……」

ヴィータの発言に、全員が沈黙するが全員の心は同じだ

俺だってみんなと一緒に静かに暮らしていきたい。

ザフィーラ「行くか…もう余り時間も無い…」

シグナム「ああ…行くぞ！レヴァンティン！」

レヴァ「Siege」.

シャマル「導いて、クリアルヴィント！」

クラ「Anfang」.

ヴィータ「やるよ！グラフアイゼン！」

グラ『Bdwegung』。

零夜「行くぞ…極夜…」

極夜『極めて了解』

全員セットアップする。

シャマル「それじゃ、夜明け時まで、此処で」

シグナム「ヴィータ、余り熱くなりすぎるなよ」

ヴィータ「わーってるよ！」

零夜「俺は誰について行けばいい？」

シグナム「では、シャマルについて行ってくれ、その方がすぐさま蒐集できる。この中で一番強いのはお前だからな。」

零夜「…買いかぶり過ぎさ…」

俺は髪を上げ、オールバックになり、顔の左側を仮面で隠す

そして、俺達は飛び出した。

零夜「ターゲット確認…シャマル、今から一撃で仕留める。」

目の前に巨大な岩龍がいる

この程度の龍ならさして問題はない。

一撃で十分だ。

零夜「ライトニングドライブ！」

魔力をモード2の状態で刀身に集め、雷を帯びた状態で剣を振り上げ、一気に打ち出す。

魔力の圧縮率を可能な限り高めた雷は一撃で岩龍の意識を刈り取る。

シャマル「すごい…一撃で…」

零夜「シャマル…蒐集を頼む…」

シャマル「うん、闇の書、蒐集」

『Sammlung(蒐集)』

岩龍のリンカーコアから魔力が闇の書に流れ込んでいく

零夜「今ので何ページ集まった？」

シャマル「今ので…3ページ」

零夜「3ページか…よし、次行こう…」

次のターゲットはバカでかいマンモスみたいな奴だ。

体長50mくらいありそうだ。



草食なのだが、侮ってはならない

メチャクチャ強いのだ

ヴィータやシグナムでも苦労する生物だ

その分、リンカーコアの質はかなり高かったらしい

零夜「こいつは一人じゃ少し骨が折れるな…シャマル、手伝ってくれ…」

シャマル「初めからそのつもり。ヴィータちゃんや、シグナムでも苦労したんだもの、いくら零夜君でも一人じゃ…」

会話している間にヤツが巨大な牙を振り回し、突っ込んでくる。

巨大な体に見合わないスピードだ。

俺は高く飛び上がって回避

そのまま

零夜「極夜、モード3」

極夜『極めて了解』

長刀を構え、突撃

零夜「八刀一閃！」

八回の斬撃同時に叩き込む

ゴアアアアアアア！！

うるせえええ！

零夜「うおらあああああああ！！！！」

デビルプリンガー  
悪魔の右腕の力を解放、この世界に存在しないはずの魔力で形成された巨大な右腕を出現させ、頭を殴りつける

そのまま倒れた

零夜「仕留めたか……？……ガハアツ！？」

しくじった……長い鼻で殴り飛ばされた……

シャマル「零夜君！」

マズいな……腕の骨1本か足の骨くらい逝ったか？

零夜「うおおおおおおおおお……！！！！！！！」

再び悪魔デビルプリンガーの右腕でつかみ何度も腕を前後に振り回し、地面に叩きつける

とどめに投げ飛ばす

零夜「ハア……ハア……ハア……ハア……シャマル……蒐集を……」

シャマル「……うん」

闇『Sammlung (蒐集)』

零夜「フウ……」

シャマル「零夜君、大丈夫？」

零夜「あー……全身が痛むな……」

シャマル「ちよつとみせて」

零夜「ああ、頼む…あいててて…」

シャマル「骨は折れてないわね…だったら大丈夫、なんとかなるわ…」

零夜「そりゃよかった…」

シャマル「でも、しばらくは動かない方がいいわ、それにもうすぐ夜明け前だから…」

零夜「今のヤツは何ページ集まった？」

シャマル「一気に10ページ集まったわ。」

零夜「…シグナムとヴィータとザフィーラもそれなりには集めてるだろっから…20ページは集まっただろ…このまま…とりあえず帰ろっ…いてててて…」

ヴィータ「だいじょーぶか？」

零夜「体中が痛い。とりあえず少し寝れば多分治る。」

シグナム「アイツとやりあったのだろうか？良くそれですんだものだ

…」

零夜「…まあな…」

続く！

A・S第4話 蒐集（後書き）

夜影ラジオ、派手に行くぜ！

D O「中学から肩の痛みと凝りが治らない。作者のデスサイズ・0  
です。」

零夜「俺の最速理論に揺るぎはない。主人公、影宮零夜だ。」

はやて「最近微妙に出番が減ってる気がするヒロイン、八神はやて  
や。」

秀吉「部屋の隅は俺のテリトリー、木下秀吉だ。」

D O「なぜだ！何故なんだアアアアアア！何故アンケートに誰も  
答えてくれないんだ！ZEROは俺には何も言っはくれない！教  
えてくれ！」

零夜「駄作だからさ。」

はやて「修行が足らんな。」

秀吉「頑張れ。」

零夜「それにこんな駄作者の書いたヤツなんか誰も読みたくないん  
じゃね？」

DO「ウツダドンドロドーン…！」

秀吉「オンドウル語は止めい。誰が理解できるんだ。」

あしゆき「オルアキサマヲムツクルス…！」

はやて「おった…！」

秀吉「うちの作者は仮面ライダー好きだからな…！」

DO「ウェイ！ウェイ！ウェイ！」

零夜「誰か止めろ…！」

アンケート

50000アクセス突破記念話に何を書いてほしいか

1人一回一つのみ

期限は11/13午前10時まで

ちなみに、誰も答えてくれなかった場合、友人に聞いて帰ってきた  
答え、DevilMayCryの世界かある魔術の禁書目録or  
超電磁砲の世界に零夜を飛ばすか、俺の妄想120%の話になります。



A・S 第5話 非日常の日常の1日「ややこしいな…」(前書き)

今回はかなり長い(俺としては)

L e t · s r o c k ! !

A・S 第5話 非日常の日常の1日「やっしいな…」

5：35

零夜「さて…行くか…!」

朝から、俺はトレーニングの最後のランニングにこれから出かける

まあ、朝飯を俺が作るから6：00には帰るが

零夜「よし…!いい朝だ…!さあ!振り切るぜ!」

何を振り切るんだ、って突っ込みは無しで

5：40

火彩「さて、行くか!」

5 : 4 0

B a n g ! B a n g ! B a n g ! B a n g ! B a n g !

氷雨「…右に…2度かな…左にわずかにずれたな…狙撃は、ちょっとしたズレが命取り…僕はなのはみたいに砲撃はそんなに強くないから、完全に命中させないと…」

5 : 5 5

臨海公園

零夜「ふう……」

火彩「…あ？零夜？」

零夜「…火彩？」

火彩「何してんだよ、こんな朝からこんなところで…」

零夜「トレーニングだよ、お前は？」

火彩「俺もだ。毎日ここに？」

零夜「雨が降らない限りな」

火彩「なら、俺もそうするかな…そうすりゃあ、互いの状況を報告とかもできるしな」

零夜「そうか、そういえば事件はどうなってる？」

火彩「あんま進展はねえな…なかなか尻尾をつかめねえ…ただ、正体は少し分かった。闇の書の騎士…だな…最近、もう一人増えたが…」

零夜「闇の書…か…」

火彩「なあ、この画像みてくれないか？」

零夜「…これは…闇の書の騎士か…」

火彩「ああ、そしてこれが闇の書だ…どう思う…？」

零夜「どうって言われてもな…」

火彩「？覚えてないのか？昔、美月ちゃんが似たようなを作ったろ？」

零夜「…はっきりと思い出せん…もともと名前があったはずだ…」

火彩「ああ…それが俺は思い出せん…」

零夜「…名前だけ覚えている…夜天の書…だ…」

火彩「…そうだ、それだ！」

零夜「（思ったよりばれているな…）」

火彩「…零夜、お前この騎士たちの事を知ってるだろ？」

零夜「…何故そう思う…？」

火彩「この騎士たちの事をみるお前の眼がほかのデータをみるときと明らかに違った。こちらのデータを暗記しようとするかのごとく…そして、最近ふえたメンバー…この黒いコートに顔の左を仮面で隠した男…あらゆるセンサーに反応せず、なおかつ黒い雷を放って

いる…そしてこの長刀…極めつけは右頬のこの十字傷…これらの情報からこいつはお前だと俺は確信した…どうだ？」

零夜「おいおい…お前…馬鹿なのか天才なのかホントよくわかんねえな…」

火彩「大当たりだろ？」

零夜「ああ…」

火彩「話を聞かせてくれ…安心しろ…管理局には絶対に言わねえ…話すとしても俺が信頼できる奴だけだ…」

零夜「…分かった…」

火彩「なるほど…な…かなり厄介な状況だな…」

零夜「…完成させても…破壊以外に使用された記録がない…か…そして無限再生と無限転生…美月がそんなややこしい機能を付けるとは思えない…」

火彩「どっかの誰かが改変したんだろうよ…」

零夜「完成させてもさせなくてもはやては死ぬのか…!?!?」

火彩「いや、解らん。もしかしたら何か方法が有るかもしれん…今はまだ情報が少なすぎる…」

零夜「…とにかく…毎朝、情報交換だな…」

火彩「ああ、その…」はやて”つて子を助けるためにも…これ以上闇の書の悲劇を引き起こさないためにも…な…」

零夜「ああ…」

零夜「俺はそろそろ帰る…朝飯作んねえと…」

火彩「そうか…」

零夜「また今度、ゆっくり話し合おう…」

火彩「ああ…じゃあな…」

零夜「ただいま〜っ」と…」

はやて「おかえり、零夜君。」

零夜「ちよつと遅かったか…」

はやて「シグナムとザフィーラがそこで寝てるから静かにな」

零夜「わかった」

で、俺は野菜を切ってサラダを作っていた

はやては味噌汁を作っている



シグナム「ん…んん…」

零夜「お、悪いな、起こしたか？」

シグナム「あ、いや…」

はやて「ちゃんとベッドで寝やなあかんよ、風邪引いてまう」

シグナム「す、すみません…」

はやてが掛けたであろう毛布をたたみながら言うシグナム

はやて「シグナム、昨夜も夜更かしさんか？」

シグナム「ああ…その…少しばかり…」

零夜「早く寝ろよ…？」

俺は部屋の電気を付けた。

はやて「シグナム、はい」

シグナム「あ…」

はやて「ホットミルク…温まるよ…」

はやてが盆に載せて持ってくる

シグナム「ありがとうございます…」

はやて「はい、零夜君も」

零夜「お、ありがとよ」

はやて「ザフィーラにもあるよ、ほら、おいで」

いや…おいでって…ザフィーラ一応狼だぞ…犬みたいに言うなよ…

ザフィーラ「（一応は止める一応は…）」

心を読むな…そしていきなり念話するのはやめい…びっくりする…

シャマル「すみません、寝坊しました!」

大慌てでシャマルがリビングのドアを開けて入ってくる

零夜「おう、おはよう」

はやて「おはようシャマル」

シャマル「おはよう!…うう…もう…ごめんなさいはやてちゃん、零夜君…」

はやて「ええよ〜」

ヴィータ「おはよ〜…」

ヴィータがウサギのぬいぐるみを引きずりながら超眠そうに入ってくる

はやて「おお…めっちゃ眠そうやな…」

ヴィータ「眠い…」

零夜「まったく…顔洗って来い…」

ヴィータ「ミルク飲んでから…」

零夜「はいよ」

ヴィータ「んん…」

シグナム（…温かい…な…）

零夜（…やっぱり…こつ言つのが一番だよ…）

.....

フェイト「じゃあ、行こっか、火彩。」

火彩「おう」

フェイト「し、失礼します」

火彩「失礼します」

フェイト「あの、フェイト・テストロッサと言います、宜しくお願  
いします……」

火彩「えー…闇咲火彩だ…宜しく……」

俺とフェイトは今小学校にいる。

何故かって？

まあ話を聞いてくれ。

火彩「小学校？俺が？」

フェイト「うん、明日から私も行くから…」

火彩「…一応…俺の実年齢31歳位なんだが…」

フェイト「でも今は9歳だよな」

火彩「まあな。昔と今じゃ俺も違うからな…」

フェイト「一緒に学校行こうよ、私は火彩と一緒に学校行きたいな」

火彩「よし行こう、すぐ行こう、学校行こう。俺もフェイトと学校に行きたい。」

フェイト「ホントに!？」

火彩「ああ。」

と言つ訳だ

要するにフェイトに上目使いで頼まれてそのまま了解しちゃったって訳だ。

D o y o u   u n d e r s t a n d ?

で、いきなり俺達は質問責めにあってるわけだ

ま、俺は

火彩「す…すまん…時差ボケですげえ眠いんだ…あ、後にしてくれ…  
…休み時間は…眠らせてくれ…」

と、嘘を言っただけ

だがフェイトはそんな事は出来ないので質問責めにあってるわけだ

フェイト「あの…えと…その…」

火彩「……」



アリサ「それに質問は順番に、フェイト困ってるでしょ？」

氷雨「さすがアリサ、ああ言うのを仕切るのは得意だね……」

僕にとってはああいうのはちょっと羨ましいかな……

.....



で、今は昼休み

すずか「二人とも、初めての学校の感想はどう？」

「歳の近い子がこんなにたくさん居るのは初めてだから、なんだがもう、ぐるぐるで……」

火彩「ん……まあ……悪くはないな……なかなか面白そうだ……」

アリサ「まあ、すぐになれるわよ、きつと」

フェイト「だといいな……」

.....

- - - - -

シャマル「それじゃあ、はやてちゃんの病院の付き添い、よろしくねシグナム」

シグナム「ああ、ヴィータとザフィーラはもう？」

シャマル「出掛けたわ」

零夜「もう行つたのか…」

シャマルは箱を手に取り、中身を取り出す

零夜「カートリッジか…」

シャマル「ええ、昼間のうちに、作り置きしておかなきゃ…」

シグナム「すまん…お前ひとりに任せっきりで…」

シャマル「バックアップが私の役目よ、気にしないで」

そう言つて、カートリッジに魔力を込めるシャマル

零夜「じゃあ…シグナム、シャマル…少し行ってくる…」

シグナム「頼む…」



零夜「…」

もう何体からリンカーコアを奪っただろうか

だがしかし、未だ4ページほどしか集まってない

零夜「…なにか…はやてを助ける術は無いのか…」

夜天の書は…なぜ闇の書と言われている…？

まあ…何があつたかはだいたい予測はできる…

そして…監視してくるだろう存在…

恐らく前の主がなにかやらかしたのだろう…

…だが知つたこつちやねえ…

…今度監視者を引きずり出して捕まえるか…



火彩「いや、あの二人はそこまでヤワじゃないさ…多分話が聞けないなら戦って、それから話を聞こうとするんじゃないか？」

氷雨「そうだね…なのはは絶対そうすると思うな…」

火彩「フェイトもその影響を少なからず受けてっからな…」

氷雨「まあ、僕らはそれを助けるだけさ…」

火彩「ああ…」

フェイト「じゃあね、なのは」

なのは「うん、バイバーイ！」

火彩「じゃあな」

氷雨「うん、じゃあ…」



俺達は以前倒した岩龍と同種の生物を俺とヴィータとザフィーラで倒した

ヴィータ「ハア…ハア…ハア…」

ザフィーラ「闇の書、蒐集」

闇『Sammlung』

零夜「ふう…」

カチャ…カチャ…カチャ…

ヴィータがカートリッジをグラーフアイゼンに再装填<sup>リロード</sup>する



ザフィーラ「今ので、3ページか…」

ヴィータ「クツソ…でっけえ図体して、リンカーコアの質は低いんだよな…」

零夜「…下手に魔導師を相手にするよりはマシだ…むしろ思っていたより効率がいい…」

ヴィータ「次行くぞ」

零夜「まで、ヴィータ。少し休め。」

ヴィータ「別にいいよ、あたしだって騎士だ。この程度の戦闘で疲れるほど柔じゃないよ」

零夜「休めるときに休んでおかないと、死ぬぞ。騎士ならそれがよく分かるはずだ。」

ヴィータ「……」

零夜「悪いが俺はもう戻らねばならない…はやてが帰った時に俺が居ないと不自然だからな…ザフィーラ、ヴィータを頼む…」

ザフィーラ「わかった…」

零夜「すまない…ヴィータ、無理だけは絶対にするなよ…それと、早く帰るんだぞ…」

ヴィータ「…うん……」



誰だっけ…たしか……すずか…だったか？  
よく図書館ではやてと話してる子だったな…

…とにかく…しばらくは待つか…

はやて「みんな…遅いなあ…」

遅すぎる…！シャマルが探しに行ったが…それでも…！

零夜「…」

シャマル「（零夜君…ちょっとマズい事になったわ…）」

零夜「（管理局に見つかったか…すぐ行く…45分以内に帰るぞ…  
！）はやて、少しみんなを探してくる。45分で帰るから。」

はせて」「うん、頼むな。」

続く…

A・S 第5話 非日常の日常の1日「ややこしいな…」（後書き）

夜影ラジオ、Let's rock !

《BGM：更に闘う者達 FF? ACVer》

DO「以前は戦う事でしか自分を表現出来なかった作者、デスサイズ・0です」

秀吉「いつも通り、俺はここにいる。俺が秀吉で化物級の主人公、木下秀吉だ。」

DO「…」

秀吉「なあ、なんで二人しかいないんだ？」

DO「全員の視点で書いてしまったからな。」

秀吉「わかりにくいな…」

DO「…基本的に

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

が入れば視点変更だ

なおかつ視点は零夜、火彩、氷雨、三人称のいずれかにしかならない。

今回から視点変更の時は何も書かない。

もし主人公、s以外に移行する場合はsideと書く。」

秀吉「なるほど…戦闘はどうすんだ？」

DO「わからん…恐らく三人称で書くと思う…」

秀吉「それと次、なんでBGM流してんだ？」

DO「いや、書きながら聞いているし、いい曲だから流した。」

秀吉「…そうか…なら最後だ…こんな事してて大丈夫か？今日英検3級の二次試験だろう？」

DO「まあいいじゃん」

秀吉「よくねえよ！お前、前回数一点で落ちただろ！」

DO「くっ…仕方あるまい…寝るか…」

続かなければ生き残れない！

A・S第6話 それは小さな一つの願い（前書き）

今回は俺史上最長

L e t · s r o c k ! !





ザフィーラ「上だ！」

上空に魔力で形成した剣を無数に配置したクロノがいた

クロノ「ステインガーブレイド、エクスキュージョンシフト！」

剣が一斉に回転し

クロノ「てえ！」

発射される

ザフィーラ「チィッ！」

ザフィーラがヴィータの前に出て障壁を張る

障壁に剣がぶつかり、爆発する。

クロノ「ハア…ハア…ハア…ハア…少しは…通ったか…」

ヴィータ「ザフィーラ！」

障壁で防ぎきれなかった剣をザフィーラが自分の体を盾にし、腕に数本剣が刺さっていた

ザフィーラ「気にするな…この程度でどうにかなるほど…柔じやな

いッ…!!」

腕に力を込めると刺さっていた剣がガラスのように砕け散った

ヴィータ「上等!」

クロノ「クッ…」

エイミィ「武装局員、配置終了!ok!クロノ君!」

クロノ「了解!」

エイミィ「それから今、現場に助っ人を転送したよ!」

クロノ「あれは…なのは!フェイト!」

ビルの上に、二人が立っていた。

ヴィータ「アイツら!」

なのは「レイジングハート!」

フェイト「バルディッシュ!」

「セーット!アーupp!」

なのは「え？こゝこねって…」

フエイト「今までと…違ひ…」

レイ「Order of the setup was accepted」

バル「Operating check of the new system has started」

レイ「Exchange parts are in good condition, completely clear from the NURON - IDENT alpha zero one to beta eight six five」

バル「The deformation mechanism confirmed is in good condition」

レイ「Main system, start up」

バル「Haken inform deformation preparation is in good condition」

レイ「An accel and a buster: the modes switchimg became possible. The percentage of synchronon





レバ『Nein.（否）』

シグナム「そうだレヴァンティン。私は、今までずっとそうしてきた！」

レヴァンティンはシグナムの言葉に答えるようにカートリッジをロードする。

シグナム「……」

.....

フェイト「私達は、貴方達と戦いに来た訳じゃない。まずは話を聞かせて」

なのは「闇の書の完成を目指してる理由を……」

ヴィータ「あのさあ……ベルカのことわざに「ユーのがあんだよ。」

ザフィーラ「……」

ヴィータ「和平の使者なら槍は持たない」

なのは「…？」

フェイト「…？」

ヴィータ「話し合いしようってのに、武器を持ってくるやつが居るかバカ！って意味だよ！バアーカ！！」

グラーフアイゼンを突きつけながら言いつける

なのは「なあっ！？いきなり有無を言わずに襲いかかってきた子がそれを言う！？」

ザフィーラ「…それにそれはことわざではなく、小話のオチだ…」

ヴィータ「うっせえ！同じようなもんだろ！いいんだよ、細かいことは！」

刹那、上空の結界から侵入する者がいた

フェイト「ッ…シグナム…！」

なのは「ユーノ君！クロノ君！氷雨君！手出さないでね！私、あの子と1対1だから！」

ヴィータ「クッ…」





クロノ「（ユーノ…火彩…氷雨…それならちょうどいい…僕らで闇の書の主を探すんだ…）」

ユーノ「（闇の書の？）」

クロノ「（連中は持っていない…恐らく…もう1人の仲間か、主かが何処かにいる…僕は結界の外を探す…）」

火彩「（俺と氷雨はこの位置から動く訳にはいかん…）」

氷雨「（この狙撃ポイントから下手に動けば、ばれてしまう…）」

火彩「（あの黒いコートに、顔半分を仮面で隠したヤツ…アイツが来たからおしまいだ…ヤツの実力は恐らく俺と同格…いや…それ以上かもしれない…ヤツを抑えられるのは俺だけだ…）」

クロノ「（なら仕方ない…ユーノ…君は中を…）」

ユーノ「（わかった）」

レイ『Master, please call me』 Cartridge Loader” (『カートリッジロード』を命じてください)』

なのは「うん！」

なのははレイジングハートを構え

なのは「レイジングハート！カートリッジロード！」

レイ『Load Cartridge』

レイジングハートに新たに取り付けられたカートリッジシステムのカートリッジが入ったマガジンからレイジングハートに装填される

バル『Sir』

フェイト「うん、私もだね」

フェイトもバルディッシュを構え

フェイト「バルディッシュ、カートリッジロード」

バル『Load Cartridge』

バルディッシュに取り付けられたカートリッジシステムのリボルバーが回転し、カートリッジが装填される

ザフィーラ「デバイスを強化していたか…気を付ける、ヴィータ」

ヴィータ「言われなくても!」

全員が飛び出した



レイ『Axelfinn・(アクセルフィン)』

鉄球はなのはが足から出た羽根によって避けられる

だが、ヴィータはすぐさま突撃する

ヴィータ「アイゼン！」

グラ『Explosion・Raketenform・(ラケーテ  
ンフォルム)』

グラフアイゼンが変形し、ハンマーのヘッドの片側がエンジンに、  
片側からはピックが飛び出した

エンジンはすぐに起動し、

ヴィータ「でええええあああああ！」

回転しながらなのはへ突撃する

なのは「あっ…！」

以前、同じ攻撃でやられた事をなのはは思い出して、動きが止まる

だが

レイ『Protection powered.』

以前より強化されたプロテクションをレイジングハートが張った

ヴィータ「ッ…堅えッ…！」

なのは「…ホントだ…！」

レイ『Barrier burst.』

レイジングハートがプロテクションを爆発させ

ヴィータ「うおああ…！」

ヴィータを吹き飛ばした

なのは自身も吹き飛ばされたがすぐに体制を立て直した

レイ『Let's shoot it, Acccel shooter. (アクセルシューターを撃ってください)』

なのは「うん、アクセルシューター！」

なのはは小さく頷き、アクセルシューターの発射をレイジングハートに命ずる

レイ『Acccel shooter.』

足元に、ミッド式の魔法陣が展開され、レイジングハートの先端に光が集まり、

なのは「シュート!!」

なのはの合図で12発の魔力弾が発射される。

なのは「あっ！」

あまりに多いアクセルシューターの数に、放ったなのは自身が驚く。

ヴィータ「クッ…うわっ!?!」

ヴィータの表情が一変する。

レイ「Control, please. (コントロールをお願いします)」

なのは「うん」

なのは目を閉じ、コントロールに集中する。

しかし、ヴィータの周囲をぐるぐると飛び回るだけになっている。

ヴィータ「アホか、こんな大量の弾、全部制御できる訳が！」



ヴィータが手をかざすと周囲にあった鉄球が4方向からなのはを襲う

レイ『It cao be done , as for my master . ( 出来ます。私のマスターなら) 』

なのは(大丈夫…私ならできる…氷雨君に教えてもらった、心で…!!)

すると四発のアクセルシューターが動きを変え、接近していた鉄球を打ち砕いた

ヴィータ「あ…!!」

再度ヴィータの表情が驚愕に染まる

氷雨(そう…君が放った弾だ…絶対に言うことを聞かないなんて事はない…だって、君自身の心なんだから……僕の教えをちゃんと理解して、物にしたんだね…なのは…)

なのは「約束だよ！私達が勝つたら、事情を聞かせてもらおうって!!…アクセル!!」

グラ『Panzerhinder nis . (パンツァーヒンダーニス) 』



上空

フェイトとシグナムは何度もぶつかり合っては離れ、再度衝突するのを繰り返していた。

フェイト「はあああああああ！！！」

バルディッシュを振りかぶり、

シグナム「たあああああああ！！！」

レヴァンティンを振りかぶり、

衝突する

シグナム「クツ…グウツ…」  
フェイト「うう…」

また離れ

バル『Plasma Lancer』

フェイトの足元に金色のミッド式魔法陣が現れ、左右に魔力スフィアが8つ現れる

シグナム「……」

シグナムはレヴァンティンを構えたまま、待ち構えている。

フェイト「プラズマランサー…ファイアー!!」

フェイトの合図でスフィアから高速の魔力弾が射出される

それらは一斉にシグナムへと向かう。

シグナムは、カートリッジをロードし、剣に炎を纏わせる

シグナム「…ハアツ!」

タイミングを合わせ、プラズマランサーを弾き飛ばす。

フェイト「ターン!」

プラズマランサーが反転し、再びシグナムへと襲いかかる。

シグナム「ハッ……！」

シグナムは上空へと飛び、回避する。

プラズマランサー同士でぶつかり合うも、更に向きを変え、シグナムへ更に襲いかかる。

シグナム「レヴァンティン！」

カートリッジをロードする。

レバ『Sturmwinden・(シユトウルムヴェインデ)』

バル『Blitz Rush』

シグナム「てええええい……！」

炎を纏った一閃、紫電一閃でプラズマランサーを打ち砕く

その瞬間、フェイトがバルディッシュを振りかぶりながら背後から迫っていた

さらに

バル『H a k e n f o r m ! (ハーケンフォーム!)』

バルディッシュはカートリッジをロード、魔力刃を出し鎌、ハーケンフォームに変形する

レヴァ『S c h l a n g f o r m ! (シュランゲフォーム!)』

レヴァンティンも同様に、カートリッジをロードし、連結刃、シュランゲフォームに変形する。

互いの得物がぶつかり合い、爆発を起こす。

煙の中から飛び出したフェイトは体の左側と二の腕が傷ついていた

同様に飛び出したシグナムは胸を斬られていた

空中で対峙する二人

シグナム「強いな…テストロッサ…」

レヴァ『Schwertform・(シュヴェアトフォルム)』

レヴァンティンを通常の剣に戻しながら言う

シグナム「それに、バルディッシュ…」

バル『Thank you』

フェイト「貴女と、レヴァンティンも…シグナム…」

レヴァ『Danke』

シグナム「この身に、成さねばならないことが無ければ、心躍る戦いだっただが…仲間達と我が主のため、今はそうも言ってもらえん…殺さずに済む自信がない…この身の未熟を、許してくれるか？」

フェイト「構いません、勝つのは…私ですから…」





アルフの拳がザフィーラの障壁を破り、その瞬間に爆発を起こす

ザフィーラは後ろに飛んで下がる

ザフィーラ「（状況は、あまり良くないな…シグナムやヴィータが負けるとは思わんが…ここは引くべきだ…シャマル、何とかできるか？）」

シャマル「（何とかしたいけど…局員が外から結界維持して…私の魔力じゃ破れない…シグナムのファルケンか、ヴィータのギガント級の魔力を出さないと、破れない…）」

ザフィーラ「（二人とも手が離せん…どうする…）」

シャマル「（大丈夫、さっき零夜君に連絡したから。45分以内に帰るぞって言ってたわ。）」

ザフィーラ「（なら、あと少し持ちこたえる！）」

シャマル「（ええ、おねが…）」

ザフィーラ「(シャマル?どうした!シャマル!?)」

クロノが自身のデバイス、S2Uを突きつけ、シャマルの背後に立っていた

クロノ「搜索指定ロストログアの所持、使用の疑いで貴女を逮捕します。抵抗しなければ、貴女には弁護の機会がある、同意するならば武装の解除を。」

次の瞬間

零夜「ツトウア!!」

クロノ「ガハアツ!」

零夜がクロノを蹴り飛ばしていた。

零夜「シャマル、大丈夫か?」

シャマル「ありがとう、れ「シッ!...本名を出すな...」...うん...」

クロノ「う...仲間...?」

零夜「これがその境界か…なるほど…確かにかなりの強度だ…」

シャマル「どう?」

零夜「問題ない、だがまずはあの黒いヤツを黙らせてからだ…少しだけ待っていてくれ…」

.....

クロノ「何者だ!連中の仲間か!?!」

零夜「……………」

クロノ「答えろ!!」

零夜「…俺は…闇の書の主…………ミッドナイト…」

クロノ「何!?!」

零夜「悪いが少し黙っていてくれ…」

刹那、クロノの周囲、前後上下左右全てを魔力で形成された刀が取り囲んだ

クロノ「ッ…!?!」

零夜「…さて…（いいか…全員、よく聞いてくれ…今から俺が結界を斬り裂く…恐らく余波が凄まじいだろうが…上手く凌いで逃げてくれ!その後、俺が殿しんがりをする!）…」

「「「（（（おう!）））「「「

零夜（まだ…成功はしたことはないが…やるか…次元斬り…!）

極夜『（焦るな…刀夜がどうやっていたか…思い出せ…!）』

零夜「ハアアアアアアア!…!…!」

行動そのものが見えない速さの抜刀術

虚空を斬った一閃は何も起こらない…



ユーノ「はっ…！マズい…！防御を…！」

いち早く異変に気付いたのはユーノだった

フェイト「な、何！？」

シグナム「すまんテストロッサ…この勝負…預ける！」

フェイト「シグナム！？」

ヴィータ「ヴォルケンリッター、鉄槌の騎士ヴィータ。アンタの名は？」

なのは「なのは…高町なのは！」

ヴィータ「高町なぬ…な…ええい！呼びにくい…！」

なのは「逆ギレ!？」

ヴィータ「ともあれ勝負は預けた！次は殺すからな！ぜってーだ！」

言うことだけ言ってヴィータは飛び去った

なのは「あ…えと…ヴィータちゃん!？」

ザフィーラ「仲間を護ってやれ！余波とは言え、直撃を危険だ！」

アルフ「ええっ!?!あ…ああ…」





クロノ「何が起きているんだ…」

零夜「…知りたいか？」

クロノ「!?」

零夜「簡単だ…次元を斬り裂いただけだ…」

クロノ「バカな!そんな事が出来るはずが!」

零夜「もう一度見せてやろうか?なんなら、次は貴様の体で体験してみるか?」

クロノ「クツ…」

火彩「ハアアアアアア!」

零夜「…!グウツ!」

火彩「クロスケ!死にたくなかったら誰にも手を出させるな!解つたな!?!」

クロノ「あ、ああ…!」

火彩「炎龍爪！」

蒼炎を刀に纏わせ、一閃する

零夜「雷龍爪！」

黒雷を刀に纏わせ、迎え撃つ

刀同士が衝突し、爆発する

氷雨「ターゲット、確認…吹雪、やるよ…」

吹雪『はい。モード4-1、スナイパー』

スナイパーライフルを匍匐姿勢で構える

氷雨「…目標を撃ち抜く…！」

B a n g !

零夜「…！？クツ！？狙撃か…！？どこからだ…！」

火彩「気づかせると思つか！？白夜！モード2！」

白夜「了解だア！」

バスターソードを構え、火彩が突撃する

零夜「極夜…モード3…！」

極夜『極めて了解』

長刀を構え振りかぶる。

氷雨「今だッ…！」

巨大な長刀を振りかぶる事で発生した極僅かな隙

そこを狙い、氷雨は狙撃した。

通常の間には隙とも言えない隙だが、彼にとっては十分な隙だった。

零夜「ガハアツ！」

火彩「テリヤアアアアアアアア！」

バスターソードに蒼炎を纏わせ、縦に振りかぶる火彩

零夜「チイツ！ハアアアアアアアア！」

零夜も対抗して黒雷を纏わせ、回転斬りをする

火彩「デヤアアアアアアアア！」

零夜「ハアアアアアアアア！」

零夜が右薙に長刀を一閃すれば、火彩はバスターソードで防ぎ、火彩がバスターソードを縦に振れば、零夜は長刀で受け流し、蹴りを繰り返す

火彩は蹴りを拳で迎え撃ち、長刀の一閃をバスターソードで弾く

長刀の一撃が火彩に当たりそうなとき、氷雨の狙撃が長刀に直撃し、太刀筋を大きくずらす

零夜「つあああああ！！雷龍牙！」

黒雷を纏い、強力な突きを繰り返す

火彩「炎龍牙！」



フエイト「多分、本気を出さなかったんじゃない、出せなかったんだと思う…本気をだす程の相手が居なかったから…」

火彩「（零夜…いいか…今から炎龍霸斬をする…お前は雷龍霸斬で相殺して、爆風で煙が晴れる前に逃げろ…！）氷雨！今から派手に決める！すぐ離れる…！」

氷雨「解った！」

火彩「白夜！カートリッジロード！」

白夜『了才解！カートリッジロードオ！』

刀に戻した白夜にカートリッジをロードする

今までとは比べものにならない蒼炎が鞘に納めた刀身に集まる

零夜「極夜！カートリッジロード！」

極夜『極めて了解！カートリッジロード！』

通常の刀に戻し、鞘に納めた極夜の刀身に黒雷が集まる

火彩「炎龍！」

零夜「雷龍！」

「「霸斬！」」

互いに抜刀術をぶつけ合う

全てを焼き尽くす蒼炎

全てを撃ち抜く黒雷

極限まで圧縮された黒雷と蒼炎がぶつかり合い、大爆発を起こす

火彩「（今だ！）」

零夜「（済まない！火彩！）」

火彩「（気にするな！急げ！）」

零夜「（じゃあ、また会おう！）」





零夜「おう！すずか…だっけか？今夜はゆっくりしていってくれよ」  
すずか「うん！」

ヴィータ「あ！あたしの肉！」

シグナム「フツ…油断するからだ…って！私の魚がっ！」

シャマル「残念ね…貴女が一番油断してるわ…」

零夜「はい、二人とも。」

はやて「ありがとう、零夜君。」

すずか「ありがとう！」

零夜「ああ…」

ヴィータ「だあああ！またあたしの肉が！」  
零夜「…美味しいな…」

続く…

A・S第6話 それは小さな一つの願い（後書き）

夜影ラジオ！Let's rock！！

（BGM：カルマ）

DO「さあ始まりました！夜影ラジオ、今回はちょっと頑張った俺！作者のデスサイズ・0です！」

秀吉「俺はどうすればいい？俺が秀吉で化物級の主人公、木下秀吉だ。」

DO「よくやった！俺！」

秀吉「あのクソ長い英語をよく携帯だけで書いたな…お疲れさん…」

DO「手がイかれたぜ…右手の親指がめちゃくちゃいてえ…」

秀吉「それ、腱鞘炎になってないか？」

DO「大丈夫だ、問題ない…」

秀吉「ところで、BGMは今実際に流してるのか？」

DO「おう。う…ああああ…指があああ…」

秀吉「…ゆっくり休め…」

DO「そ、そうさせてもらっつ…」

あ、アンケート…結局誰一人答えてくれなかったなので俺の妄想ワールドを書きますので。

続かなければ生き残れない！

A・S 第7話 事件の後は何もない(前書き)

今回で氷雨の事が少しわかる

L e t ' s r o c k ! !

A・S 第7話 事件の後は何もない

零夜「ふう……」

夕食も食べ終わり、今はみんな思い思いの時間を過ごしている

俺は庭で椅子に座りながらコーヒーを飲んでいる

零夜「…美味しい…」

インスタントなのだが、どう言うわけかこの時は非常に美味しく感じた…

シヤマル「零夜君、今日は本当にありがとう。おかげで闇の書のペー지를減らさずにすんだわ…本当にありがとう」

零夜「フツ…家族を助けるのは当然だろう…?」

シグナム「それでも、だ…」

零夜「…だが…少々厄介なことになった…」

シグナム「ああ…管理局も、本腰を入れてくる…」

零夜「とにかく、管理局には闇の書の主は俺だと言った…これから何かあれば俺を使ってくれ………」

シグナム「わかった…恩に着る…」

そう言つて二人は家へと戻つた

…さて…そろそろ良いだろう…

零夜「そろそろ出てきたらどうだ…？居るのは分かっている…」

以前から監視して来るヤツを…捕らえる…

結界は張つた…

準備は…コーヒーの最後の一口だ…

「…いつから気づいていた…」

顔全体を仮面で隠した男が現れた

零夜「…もう一人も出て来いよ…居るんだろ…？おっと、不意打ち

は無駄だからな？」

「…クツ…なぜわかった…」

零夜「…至極単純、この家の周囲一定範囲には俺の魔力を薄く広げている…魔力を持った侵入者が居れば一瞬でわかる…いわば常にセンサーが反応し続けている状態だ…俺がこの家に来てしばらく立つてから始めたから…6月の末には分かったな…まあ、姿が見えないことから、普段は何かに変身してるんだろう…」

「……………」

零夜「そつだな…この家でよく見る…猫に…とか…」

「……………」

零夜「まあ…手を出さなければどうだって良い…だが俺の家族に手を出して見る…その時は……………殺す……………俺はヴォルケンリッター達とは違い…容赦はせん…！」

仮面の男は姿を消した…

零夜「…コーヒー…もう一杯飲むか…」





火彩「お前な…俺だってバカじゃねえんだから…」

フェイト「バカだよ…火彩は…あんな勝てるかわからない人に突っ込んでいくなんて…心配したんだよ…」

火彩「…悪かった…だが…アイツを抑えられるのは俺だけだ…だが次は…逃がさん…」

フェイト「…勝てるの？」

火彩「…ヤツのスピードはフェイト並かそれ以上だ…だが…パワーなら負けねえ…次は俺が叩き落とす…あの闇の書の主を…」

正直、勝てるかどうかは解らない…いや、負ける可能性の方が大きい…

フェイト「じゃあ、火彩が戦ってたのは…闇の書の主だったの!？」

火彩「自称」…な…」

- - - - -



リビングに俺が行くと、クロスケが闇の書の事をフェイト達に話していた

クロノ「彼らは人間でも使い魔でもない、闇の書に合わせて魔法技術で作られた疑似人格、主の命令を受けて行動する…ただそれだけのプログラムに過ぎないはずなんだ…」

フェイト「あの…使い魔でも、人間でもない疑似生命って言うこと…私みたいな…」

火彩「…！違う…！フェイト！お前はお前だ…他の誰でもない…フェイト・テストロツサと言う1人の人間だ！どんな生まれ方だろうと…！あの時俺は言っただろ！」フェイトは他の誰でもない！フェイトはたった一つの命を持つてる1人の人間だ！”って…！…：俺とは違ってな…」

俺はフェイトの肩を掴みながら言った。

だが最後は誰にも聞こえない小さな声で呟いた

俺自身に言い聞かせるように…

クロノ「検査の結果でも、ちゃんとそう出ただろう…変なことを言うものじゃない…」

…フェイトはまだあの時の事が…無理もないか…



火彩「氷雨か……」

氷雨「…火彩…フェイトはやっぱり…あの時の事を…」

火彩「…ああ…おそろくな…」

氷雨「…なのはも気にしてたよ……」

火彩「あのサ…氷雨…闇の書の事なだけどな…俺全部じゃないが知ってるんだわ」

氷雨「…何か隠してると思ったらそう言う事か……」

火彩「あ？気付いてたか？」

氷雨「まあね」

火彩「まあいいや、とりあえずこれは絶対に誰にも言つなよ…まだお前にしか言わねえから…なのはやフェイトにも追々話していくつもりなんだが………」

氷雨「なるほどね……」

火彩「まあ…なのはとユーノにはまだ言わないでくれ…」

氷雨「わかった…けど…どうして僕に言ったんだい？君が一番信頼してるのは僕よりフェイトやアルフだろう？」

火彩「いや…みんな同じぐらい信頼してるさ…そうだな…お前に話した理由は…お前の力が”俺達”と同じだと感じたから…だな…」

氷雨「…どうしてそう思ったのかな？」

火彩「第1に魔法を発動する際に魔法陣が出ない、第2にデバイスが俺達と同タイプ、第3にお前の操る紅の氷…この3つから推測できる答えは一つ。お前は戦士だ、そして答え合わせと行こう。まず一つ目、これはソルジャースタイルだな？」

氷雨「…ああ…」

火彩「2つ目、デバイスは原初期のモノで代々受け継がれてきた、どうだ？」

氷雨「…正解だよ…」

火彩「3つ目…紅の氷は…紅氷龍「うひひやうりゆう」のモノだな…？」

氷雨「…多分…」

火彩「…Ha…ハハハハハハハハハハ！」

氷雨「ど、どうしたんだい火彩!？」

これが笑わずにいられるかよー!!

紅氷龍を倒してその力をその身に宿したのはたった1人…

龍神傭兵团、团长…



” みずかわとうじ  
水川凍地  
”

だけだ！

火彩「久々に面白い事を体験した！蒼炎龍、黒雷龍、紅氷龍と言え  
ば龍の中でも最強クラスと言われていた（らしい）ヤツを倒した龍  
神傭兵団最強メンバーの再来だ！」

氷雨「火彩は僕の先祖の事を知ってるのかい！？お願いだ！教えて  
くれ！」

火彩「いいぜ！まさかとは思ったが団長の子孫だとはな！全部話し  
てやるよー！！」





A・S第7話 事件の後は何もない(後書き)

夜影ラジオ、Let's rock!!

(BGM：閃光)

DO「最近の口癖は”砕け散れ!”作者のデスサイズ・0です」

零夜「仮面を付けたら別人格、メイン主人公の影宮零夜だ。」

はやて「零夜君ともう一步先へ行きたい、メインヒロインの八神はやてや。」

秀吉「俺のリロードは革命<sup>レボリューション</sup>、木下秀吉だ。」

零夜「砕け散れってどんな口癖だよWWW」

DO「いらつとしたらつい言っちゃまつのや…」

秀吉「10000000回突き刺してから言うのか?」

DO「違う違う、違います…」

はやて「その場合は英語で言わんとあかんで、Break down  
n!~って」

零夜「…はやて…どうしたんだ…」

DO「とにかく、砕け散れ」

零夜「お前は黙っとれ」

バゴツ！

DO「ぶべらっ!?!」

ドサッ

はやて「久々にコレ使ったな」

秀吉「なんだ？ハリセンか！」

はやて「鉄板入りや」

秀吉「恐っ!!はやてはいつからそんなに恐ろしくなった!?!」

続かなければ生き残れない！

A・S 第8話 「これはただの1日」と言っ名のネタ話だな」(前書き)

今回はかなり短い

そしてネタばっかり

L e t ' s r o c k ! !

A・S第8話 「これはただの1日」と言う名のネタ話だな」

火彩「クロスケに今日とか言われたけど俺今日学校じゃねえか!!」

はい、見事にクロスケに嵌められました…

注：火彩がバカなだけです

火彩「…」

…めんどくせえ…

火彩「…ZZZ…」

…

フェイト「火彩…起きなきゃ駄目だよ…」

火彩「…ZZZ…」

アリサ「起きろこのバカ！」

ゴシヤアアア！

火彩「がはっ!？」

誰だ！俺の頭を明らかに鈍器で殴ったヤツは！

アリサ「授業中に寝ないの！」

火彩「うるさいッ！俺は眠いんだよッ！」

まあ夜中までデータ整理はしていたのもあるからな…

アリサ「声が大きい！」



火彩「うっ…」

しまった…

フェイト「ちゃんと起きて授業受けなきゃ駄目だよ…」

火彩「はい…」

アリサ「なんでフェイトの言うことは聞くのよ…」

なのは「にやはは…火彩君はフェイトちゃんの事が好きだからね…」

はい、そうですがなにか？

にしても…完全に分かり切ったことをもう一度教えられるというのは…結構つらいものだ…

分かり切ってるから聞く気にならねえ…

…そう言えば氷雨はどうしてるんだ…？

そう思って、振り返った先には

氷雨「なのは…そこ間違ってるよ…」

なのは「え？どこ？」

氷雨「ほら…ここ…」

なのは「うーん…わかんない…」

氷雨「此処はこうするんだよ…」

なのは「ありがとう…氷雨君…／／／／／／／／／／」

氷雨「どういたしまして…／／／／／／」

…ナチュラルにイチャついてやがる…

つか、誰か止める！あの二人の周囲が砂糖まみれになる！

「ゴハッ…」

既に被害者が出てやがったー！ーッ！！

マズい、マズいぞ…！！このままではこの教室全体がッ…！！

どうする…！どうする…！どーすんの俺！

手元のカード

・気にせずスルー

・諦める

・寝る

まてええええい!!

まともに解決できるのがねええええ!

つーか全部諦めてんじゃねえか!!

ええい!次だ!

・ぶつ飛ばす

・蹴り飛ばす

・昇竜拳!

おいしいおいしい!!何でこんなバイオレンスなんだ!!全部実  
力行使かよ!それしかねえのかよ!!

つてか何だよ最後!昇竜拳つて!出来るわけ……無いこともないけ  
ど!!





現在全力疾走で帰宅中

フエイト達は携帯を買いに行くらいしい

俺か？いらん。持つててもどうせ使わんし。

持つてるだけで金がかかるなら持つだけ無駄だ。

火彩「ただいまア！！いるかアアアアアアアアアアアアアア！！！！クロ  
スケエエエエエエエエエエエエ！！！！」

クロノ「居るよ…全く…一度本局から戻って来たんだぞ…」

火彩「よくやったクロスケ！直ぐ着替えて来る！」

自室へダッシュ

着替え時間、15秒

火彩「よし！クロスケ行くぞ！」

クロノ「は…速すぎる…」





……時空管理局……

火彩「…で…どこだ…？その、色々調べられる場所ってのは…」

クロノ「いや、その前に会う人物が居る…」

火彩「…どうしても会わなければ駄目か？」

クロノ「いや、別に強制はしないが…会って損は絶対に無い…何せ、あの人は…」

” 時空管理局最強の魔導師 ” と言われているからな…。」

続く…

A・S第8話 これはただの1日」と言う名のネタ話だな」(後書き)

夜影ラジオ、Let's rock!!

(BGM: WILD FANG)

DO「無理を通して道理を蹴っ飛ばす、作者のデスサイズ・0です」

火彩「最近出番が多い、闇咲火彩だ」

フェイト「火彩の出番に比例して出番が多くなってるフェイト・テスタロッサです」

火彩「…ネタばっかりだな」

フェイト「この話のいろんなネタわかる人いるのかな…」

DO「さあ？べつに居ようが居まいが気にはしないね、俺は。」

火彩「BGMも知ってる人居るのか？」

DO「居るかもな、一応ロックマンX8のテーマ曲だったんだが、ライダー好きの友人いわく、仮面ライダーWにも使われていたらしいからな…確か…ファンゲジョーカーがどうか…」

火彩「さっぱりわかんねえ…」

D O 「俺の中では仮面ライダーは龍騎で止まってるからな…」

火彩 「戦わなければ生き残れない！」

続かなければ生き残れない！

番外編 1 超力オスな1日（前書き）

今回はあしゆきさんの作品、俺が秀吉で化物級、PERSONA3

俺とシャドウと時々ナンパ、あと弓兵

とコラボしてます

というか、依頼もありましたし

では、超力オスな一日

L e t ' s r o c k ! !

番外編 1 超力オスな1日

零夜「…えーと…何でアンタらがここにいるんだ？」

秀吉「…色々あつてな…」

星司「わかんねえ」

零夜「…」

…何故秀吉と星司がいる…

秀吉「…俺は伊野宮の妙な発明品せいだな…」

星司「タルタロスからいつも通り帰ろうとしたんだが…帰ったと思  
ったらここにいた…」

零夜「…作者達の陰謀だな…」

どこからともなく”計画通り…！”とか二人分の声で聞こえてきた  
…ウチの作者とあしゆきか…

零夜「…お疲れ…美味いコーヒーでも奢ろう…」



星司「まあ…最初は俺も可愛い女の子だともってナンパしてしま  
ったからな…」

はやて「…けど実はやっぱり女の子だったり」「…しねえよ」「…」

秀吉「おっと、自己紹介が遅れた、俺は木下秀吉、よろしく」

星司「稲垣星司だ…よろし…」

星司が自己紹介した時、偶々シグナムとシャルルがなかなかリビン  
グへ来ないのを心配したのか様子を見に来たのだが…

星司「お付き合い前提に結婚してください」

とんでもないことを言いやがったアアアアアアアアアアアアアア  
！！

いや、まず順番がおかしいから！！付き合っのを前提に結婚してく  
ださいって先に進みすぎだ！！逆だ逆！

ま、まあ…シャルルはともかく…シグナムは軽くあしらうか…スル  
ーだろうが…

シグナム「へっ！？い、いや…そんな事を急に言われてもだな…そ  
の…／／／／／／」

！？ (。。(；)

シャルル「う、嬉しんだけど…ちょっと急…だけど…／／／／／／」



!? (。ゝ)

シ、シグナムが…顔を赤らめてモジモジしている…だと…!??

はやて「おお！珍しいー！写真やっや」。 」

!? (。ゝ)

はやてH…

もう訳わかんねえ…

.....

零夜「…何故こうなったし…」

何故だ…シグナムとシャマルは星司に落とされ…

秀吉「おっ！このアイス美味しいな！」

ヴィータ「そうだろ！あたしの取って置きだからな！」

…ヴィータは秀吉に…落とされている…

こいつら何しに来たんだ…

.....

星司「シグナムさんは剣を使っんですか…俺も剣を使っんですよ、  
まあ…普段は弓なんですけどね…」

シグナム「私も、弓は使えるぞ…まあ…あまり使わないが…通常の  
刃と連結刃を使用する…」

星司「連結刃…ですか…出せるかな…ペルソナッ!!」

パキーン!

星司「お、出た。」

シグナム「…かなり長いな…」

マテ星司、他人の家で何出してやがる

ペルソナなぞ召還するな

星司「3mくらいありそうですね…ってかどうやって使っんだろ…」

シグナム「し、仕方ないな…私が教えてやるっ…／／／／／／／／／／」

おiiiiiiii!!みんなどうしたんだよオオオオオオ!!!

はやて「零夜くん、私らも二人でなんかしよー！」

零夜「何かって言われてもん…あぐぼあ！…！」

な、何だ今の抱きつくときの威力は…！

ソファーまで一撃で吹き飛ばされて押し倒されたぞ…

はやて「はふう…／／／／／／／／」

零夜「う…／／／／／／／／」

はやて、頼むから抱きつきながらそんな可愛い声を出さないでくれ…俺の理性が…

はやて「んふう…／／／／／」

零夜「…誰か止めてくれ…！」

秀吉「俺…アイス作ってみようかな…！」

ヴィータ「じゃあ、あたしも手伝う！主に味見！」

ヴィータ、それは手伝いとは言わん

お前はただ食いたいだけだろ

星司「オリヤアアアア!!」

シグナム「そうだ!引き戻す際に自分に当たらないようにしろ!」  
シャマル「はい、二人とも、スポーツドリンク。」

星司「ありがとうございます!(ニコッ)」

シャマル「はううう…//」

おいしいiiiiiiii!なに他人の家で連結刃振り回してんだアアアア!!

零夜「ザフィーラアアア!あれを止めてくれええええええ!!」

ザフィーラ「無茶を言うな…あんなところに飛び込んだらバラバラにされてしまう…」

くそおおおおおおお!!

零夜「ヴィータアアアア!!アイツ等を止めてくれえええええ!!」

ヴィータ「はい、これ」

秀吉「おっ、ありがとうございます(ナデナデ)」

ヴィータ「はふう…//」

ちくしょおおおおお!!俺の言葉が届いてすらねええええ!!  
!完全に秀吉に落とされてやがる!!



俺は心の底から絶叫した…

P r r r r r

秀吉「あ？電話？」

「もしもし！聞こえる！？」

秀吉「おい！何で電話が通じるんだよ！！」

「何ゆうてんねん！ウチの科学力は全次元一やで！ウチの携帯は次元を超えて繋がるんや！」

秀吉「何その無茶苦茶！つか俺は帰れるのか！？」

「当たり前や！後数時間で自動的に帰れるで！！」

秀吉「そうか…そりゃ良かった…」

「じゃ、そう言う事だな！」

秀吉「ああ。」

ヴィータ「誰から？」

秀吉「伊野宮からだ…全く…あの『天災』め…」

.....



零夜「……………」

はやて「…スウ…スウ…」

零夜「…みんな寝ちまったよ…」

零夜「…もうじき…午前零時か…」

秀吉「…うおっ!?!」

突然秀吉の体が光り始めた

零夜「…そろそろ帰れるんじゃないのか?」

秀吉「みたいだな…わりいな、突然邪魔して」

零夜「ヴィータが悲しみそうだな」

秀吉「ま、仕方ねえさ冷凍庫に俺が作ったアイス入れておいたから食べてくれ」

零夜「そうか…そりゃあ全部ヴィータの物だな」

秀吉「ははは! だろうな! …おっと、そろそろだな…」

零夜「じゃあ…いずれまた会おう…」

秀吉「ああ…じゃあ…」

そう言っつて、秀吉は消えた

パキッ

零夜「……あ……？」

星司「影時間、かな？多分これで帰れるはずだ。」

零夜「お前もか……」

星司「秀吉はもう？」

零夜「おう、ついさっきな。」

星司「そうか……ハア……」

零夜「なーに落ち込んでんだよ……」

星司「いや……帰ったらシグナムさんとシャマルさんに会えなくなるからな……」

零夜「…そこかよ…」

星司「それに帰ったら…ハア…」

零夜「…レンガ…か…」

星司「…だろうな…多分一日消えてたから…」

パキッ

零夜「ん？」

星司「そろそろだな」

零夜「そうか…」

星司「…さて…ペルソナツ…！」

パキイン！

零夜「…じゃあな…」

星司「おうよ！お二方によるしく…！」

パライイイイイン…！！

何か割れた音と共に星司は消えてしまった

零夜「帰ったか……」

明日…いや、今日の朝が大変だ…

…泣けるぜ…」

…終わり…？



「アーーーーッ!」

続く…のか…?

A、S第9話 最強ってのは力だけで決まる訳じゃない「その通り！」（前書き

新キャラ登場！

Let's rock!!



A、S第9話 最強つてのは力だけで決まる訳じゃない「その通り！」

火彩「管理局最強の魔導師？」

クロノ「そう、現時点では最強だ。ランクは総合SSS、一応執務官なのだが…本来ならもう少将くらいになっていてもおかしくない功績なのだが…本人が全て辞退したり、他人に功績を譲っているんだ…」

火彩「…ずいぶん変わったやつだな…年齢は？」

クロノ「確か…17だったはずだが…」

火彩「若いな…なんでまたそんな奴に会うんだ？」

クロノ「…今回の闇の書事件に協力を頼んであるんだ」

火彩「俺とどつちが強いかな？」

クロノ「…さあ…？君も相当強いからな…」

火彩「…（…零夜とならどつちが強いかな…）」

俺はそんなことを考えながら、その人物のもとへ向かっていた

クロノ「失礼します。」

ついにたどり着いた…いつたいどんなヤツだ…

「ハラオウン執務官…久しぶりだな…」

クロノ「…お久しぶりですね…・スカイライン執務官…」

紅いバンダナを付け、長い黒髪の青年がいた

「…その少年は…？」

クロノ「今回の事件で、協力してくれているんですよ。」

「…少年…名はなんと…？」

火彩「…闇咲火彩だ」

「私は、ヴィンセント・スカイライン。ヴィンセントと呼んでくれて構わない。」

火彩「ああ…」

ヴィンセント「…いい眼をしているな…」

火彩「は…？」

ヴィンセント「迷いが無く、真っ直ぐ未来を見ている…それでいて、強い戦士の眼をしている…」

火彩「…アンタは…」

ヴィンセント「…さて…そろそろ仕事の話をしよう…」

火彩「…」

クロノ「…では、これを…」

ヴィンセント「…資料か…助かる…」

ヴィンセント「…なるほど…わかった、私もそちらへ向かおう。」

クロノ「ありがとうございます…」

ヴィンセント「…だが…解せんな…」

クロノ「何が…でしょうか…？」

ヴィンセント「闇の書の主と言うのは、これまでの事を考えれば、騎士たちが蒐集している間、何処かに隠れているものだ。だが、わざわざ自分が出向いて蒐集に参加するなどあり得ないはず…そもそも、コイツでは闇の書の主には不適格のはずだ…」

火彩「不適格？」

ヴィンセント「そうだ、闇の書は基本、魔力が少ない者を主に選ぶ傾向がある。だがしかし、コイツは…自称闇の書の主は明らかにSランクオーバーの魔力持ちで、ハラオウン執務官を圧倒し、数十人による結界を一撃で破壊した。…明らかに異常…」

クロノ「つまり、コイツは闇の書の主じゃ…ない？」

ヴィンセント「その可能性が非常に高いな。そしてもう一つ、騎士たちの言動が明らかにおかしい。」

火彩「おかしい？どこが？」

ヴィンセント「…わからないか？もしこの仮面をつけた黒いコート  
の男が主なら、敬語で話すのが今までの例だ。それに、騎士たちが  
最初は主に秘密で蒐集を行っていたように思える。そして…何より  
も騎士たちの発言が…明らかに違う。彼女たちの発言は、まるで自  
分たちの意志で蒐集を行っているようにしか思えん…この事件…  
思ったより厄介な事件になりそうだ…」

クロノ「厄介…と言いますと？」

ヴィンセント「もしかしたら主は蒐集の事を一切知らずに居る可能性が非常に高い。そして、主は…おそらくだが、何らかの病にかかっ

ているのかもしれない…彼女たちは主を助けようとしているように見える…」

クロノ「つまり…彼女たちが主に秘密で蒐集している…と…?」

ヴィンセント「そうだ…私はこれまでのデータや映像からそう推測した…まあ、あくまで可能性の話なのだが…」

火彩「…面倒な事になってきたな…」

コイツ「…どんだけ勘が鋭いんだよ…何者だ…コイツ…」

ヴィンセント「…一度自分の眼で確かめたい、すぐにそちらへ向かおう…」

クロノ「…お願いします…」

ヴィンセント「…それと…この…協力してくれていると言う少女達…彼女達にはまだこの話の内容は隠していた方がいい…」

クロノ「…?何故ですか?」

ヴィンセント「この子達はまだまだ純粹だ…故に戦えるのだから…そんな所に話をややこしくして見る…迷って戦えなくなる可能性がある…」

…な訳ねえだろ…

火彩「…アイツ等はそんなに子供じゃありませんよ…迷うどころか、むしろ助けたいと願うはずです…」

ヴィンセント「…(やはり…この少年は…):…そうか…だが、万一の事もある、もう少し先にしておこう…」

俺とクロスケは頷いた。

そして、ヴィンセントは少し荷物を取ってくると言って一度自宅へと帰った。

.....

火彩「…なあ…クロスケ…色々調べられる場所には何時連れてってくれるんだ？」

クロノ「…ユーノが先に行ってる…ここだ…後は自分で頼む…」

火彩「…?お前はどつするんだ？」



火彩「とりあえず、ユーノはどこだ？」

「ありゃ？」

火彩「ユーノはどこだ〜つと…」

「おい！そこの君〜！」

火彩「ん？」

「君がクロスケの言ってた子かな？」

火彩「ああ…確か…アンタらはクロスケの…」

ユーノ「火彩！」

火彩「お、居たか。」

「ん〜…」

…なんだ？俺の顔をじつと見て…

「…格好いい」

火彩「…は？」

最高に意味がわからねえ……



火彩「…なるほどねえ…クロスケの師匠か…えと…リーゼアリアとリーゼロツテ…よし…覚えた！」

ユーノ「火彩はなんでこの無限書庫に？」

火彩「まあ、今回の事件についてちょっと個人的に調べたいことがあってな。お前が見た資料でいいから、読み終わったら俺に回してくれ。」

ユーノ「うん。」

リーゼアリア「ていうか、自分で調べたほうが早いんじゃない？」

火彩「…悲しいことに検索魔法が一切使えませんので…」

リーゼロツテ「ああ…納得…」

火彩「…はあ…」

そして、調べ物を探すことにした。

続く…

A、S第9話 最強つてのは力だけで決まる訳じゃない」「その通り!」(後書き)

夜影ラジオ

Let's rock!!

(BGM:蒼穹のflight)

DO「もう今回はすっ飛ばし!作者のデスサイズ・0!」

火彩「Ha!」

バゴツ!

DO「ひでぶ!」

ドゴオオン!

秀吉「いきなりドロップキック!」

火彩「なあああにキャラクター増やしてんだコラあああ!」

DO「前から出すのは決めてた!設定はつい最近出来たけど!」

火彩「コノヤロー!本編で俺の仕事が増えるじゃねえか!」

フェイト「まあまあ、火彩落ち着いて。」

火彩「はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…」

DO「いてて…」

秀吉「今回はいきなり凄まじいな…」

DO「さて…今回から登場するヴィンセント・スカイライン。実はあるゲームのキャラを元にしてます。」

火彩「ほとんど全部だろ？」

DO「違うわっ！全部じゃねえ！！一部だ一部！まあ名前で分かる方がいるかも…ちなみに、スカイラインとは、俺の大好きな車の名前ですwww」

秀吉「日産スカイラインGT-Rだな。」

DO「そつだ、俺はR-32が好きだ。もちろん色は黒！」

秀吉「板金7万円コースだなww」

DO「うわああああああ！！！」

続かなければ生き残れない！

A・S 第10話 体格の差が戦力の決定的差でないことを教えてやる！「通常の

今回のサブタイのネタ分かる方居るでしょうか

ヒントは赤くて仮面で通常の三倍の人

L e t ' s r o c k ! !

A・S 第10話 体格の差が戦力の決定的差でないことを教えてやる！「通常の

零夜「はああああ！！！」

ザシュツ！

俺は蒐集のため、バカでかいイカカタコみたいな生物と戦っていた

零夜「チツ…足が邪魔だな…夢幻刀・八閃！！！」

ヒュンヒュンと音を立てながら掲げた左手の上で八つの夢幻刀が高速回転する

零夜「ハアツ！」

八つ全てがイカタコもどきの足を切り裂いて行く

零夜「ライトニングドライブ！」

モード2にした極夜に雷を纏わせ、剣を逆手に持ち、振り上げる

剣に纏わせた雷を飛ばし、イカタコもどきにぶつける





零夜「…ありやあ…なんだか…」

ザフィーラ「さあ…？」

目の前の海中にはサメみたいなのが一匹

ただ…

零夜「でかすぎるにも程があるだろう！！」

その体長

目測100mオーバー

零夜「…これでリンカーコアの質が低かったら俺は泣くぞ…」

と、言いながらも既に仕留めにかかっているのだが

零夜「…雷龍牙…！」一転突破の突きで体に突き刺す

バチバチと稲妻が走るが、まだ痺れて動かなくなる様子はない

零夜「チツ…なかなかタフだな…」

ザフィーラ「うおおおおおお！！」

ザフィーラが雄叫びを上げながらサメもどきに噛みつき、攻撃する。

しかし、ザフィーラはヒレにより吹き飛ばされる

なんとか空中で踏みとどまる事には成功したようだ

零夜「雷龍爪！」

刀を突き刺したまま、体をの上を駆け抜け、体を切り裂いて行く

零夜「つらあ！！」

駆け抜け、飛び上がり振り向けばブシュー！と血が噴水のように吹き出していた

零夜「雷龍破！」

刀から撃ち出した雷が黒い龍の形で襲いかかる。

その龍の顎がサメもどきの傷へ食らいつき、全身に黒い稲妻を走らせる

サメもどきは体を反り返らせ、雄叫びを上げた。

さらに

零夜「ハアアアアア!!」

デビルフリンガー  
悪魔の右腕を展開し、土手っ腹にアッパーを打ち込む

サメもどきは上に吹き飛ば

さらに、巨大な牙を展開した悪魔デビルフリンガーの右腕で掴み、俺自身をサメもどきの上へ引っ張り上げ

零夜「雷龍破!!」

口の中へ雷を撃ち込む

全身に電撃が走り、雄叫びを上げながら海へ落下し、気絶して浮か



この先どうなるか解っているのに何も出来ない自分に腹が立つ…!!

だが、決して希望を見失う訳にはいかない…!!

必ず…はやては助けてみせる…!!



火彩「…何か…何かないのか…！夜天の書を救う術は…！」

もう何冊の本を読んだらどうか…

未だに明確な解決法が見つからない。

夜天の書に関する情報自体はかなり出てきた

しかし、そこで止まっている

…やはり、管理局が…



火彩「チツ…やはり…これしかないか…」

一つだけ、解決出来そうな方法を見つける事は出来た

火彩「…時間が足りれる…とは言いがたいが…やるしかないのか…！」

…明日の朝、零夜と氷雨と三人で会議としゃれ込むか…

続  
く  
…

A・S 第10話 体格の差が戦力の決定的差でないことを教えてやる！「通常の

夜影ラジオ！

Let's rock！！

DO「どうも、気が付いたらもう後わずかで期末テスト、作者のデ  
スサイズ・0です」

零夜「ある意味、無限の電源、影宮零夜だ」

はやて「出番が減って寂しい、八神はやてや」

秀吉「…もうレギュラーでいいのか？…俺が秀吉で化物級の主人公、  
木下秀吉だ」

DO「…あのさあ…今更だが、ここでコーナーを作ろうと思うんだ  
が…」

零夜「ほう…どんなコーナーだ？」

DO「そうだな、名付けて！『一度言ってみたい台詞！』だ！」

はやて「な、なんやそれ…」

DO「ルールは簡単、こちらがお題を出すからその状況で言ってみ  
たい台詞を読者の方から募集する！そして、それに俺達がツッコん  
だり、共感したりする！ただそれだけ！」

秀吉「なるほど…」

DO「そうだな…まず最初のお題は…そうだな…まだまだだが、まあすぐ来ちまうクリスマススに關するお題、『クリスマス夜の夜、部屋でたった1人寂しく過ごし、雪が降る外を窓越しに見ての一言』だ！」

秀吉「それはまた随分と…」

はやて「て言うかそれ、作者の状況やないんか？」

DO「ウグツ！」

零夜「だろうな」

DO「…とにかく、もしこのコーナーに参加して頂ける方は、感想、メッセージ、どんな方法でも構いませんので俺まで一言を書いて送ってください！ネタだろうが真剣に考えたものでも何でも構いません！よほどたくさん来ない限り全てやりますので！」

後、感想はどなたでも書けるよう制限を外してしますので！よろしく  
お願いします！」

続かなければ生き残れない！

A・S 第11話 作戦会議は極秘で行うから意味がある(前書き)

タイトル通り

L e t ' s r o c k ! !

A・S 第11話 作戦会議は極秘で行うから意味がある

翌日、早朝

零夜「…まだか…」

俺は昨日の深夜に火彩に、いつもより少し早くいつもの場所に来てくれと言われ、いつもより30分早くきたのだが、まだ火彩は来ていなかった。

零夜「遅い…よし、帰って寝」「寝るなあ!!」「あだっ!」

何者かに後頭部を蹴り上げられた

何故蹴り上げられたか解るかって？

こんな強烈なサマーソルトをするのは…

零夜「火彩…何しやがる…!」

火彩「お前が帰って寝るとか言い出すからだろうが!!」

零夜「お前が来るのが遅いんだよ!!」

火彩「お前どんだけ早く来てんだよ!!」

零夜「いつもより30分早くだ!!」

火彩「早すぎんだろ!!」

零夜「少し早く来いって言ったのはお前だろ!!」

火彩「少しいつてのは10分くらいだろ!!」

零夜「ふざけるな!それでは遅すぎだ!!」

氷雨「ま、まあまあ二人とも…落ち着いて…」

火彩「お前の基準がおかしいんだよ!!」

零夜「お前がだろ!!」

氷雨「だから、落ち着いて…」

火彩「だいたいお前は…!!」

零夜「なんだと…!!」

その瞬間

プチッ

何かがキレる音がした

そして

B a n g...!!



突然銃声が鳴り響いた

氷雨「…落ち着いてって…僕言ったよね…」

「「……」」

…What's happen!?

氷雨「…二人とも…頭、冷やそう…」

ヤバい、なんかまわりが凍り付いている…

火彩「ヤバい…ってこいつ…いつの間にか結界を張ってやがる…」

零夜「…マズいな…」

火彩「…死ぬなよ…」



零夜「あー…あのまま凍りづけで死ぬかと思った…」

火彩「俺が氷を溶かさなかったらな…」

氷雨「ごめん、さすがにやりすぎた。」

火彩「…俺が居たからいいもの…零夜だけなら凍り付けで凍死してたところだ…」

氷雨「ホントごめん、やりすぎた。」

零夜「…まあそれは置いてだ…火彩、こんな朝早く呼び出したからには何かあるんだろうな？」

火彩「…いいニュースと悪いニュースがあるが、どっちから聞きたい？」

零夜「悪い方から」

火彩「…わかった……管理局最強の魔導師がここに来た。」

零夜「…最強…？」

火彩「…ありゃあ、ただもんじゃねえ。勘も鋭い、お前が闇の書の主じゃない事や、騎士達が本来の主に秘密で蒐集している事も気付



ヴィンセント「ここか…部屋はどこだったか…」

私はマンションにたどり着いたのはいいが、部屋の番号を再度確認するのを忘れてしまい、うる覚えで来てしまっていた

ヴィンセント「…仕方ない…確か…上の方だったはずだな…一つ一つ探すしかあるまい…」

…久々に私らしくもないミスをした…

普段ならこんなミスを犯すことは無いのだが…

まあ…良いだろう…

.....

僕は、臨海公園で作戦会議をまだやってた

火彩「…で…そのお前の師匠とやらはどれくらい強いんだ？」

氷雨「そうだね…まず確実に僕は勝てない、火彩は…互角か…いや、師匠の方が強いかも…」 零夜「俺は？俺とならどうなりそうだ？」

氷雨「さあ…僕は零夜の力をまだまだ把握してないからね…」

火彩「コイツは俺よりも強いぞ、確実な。」

氷雨「じゃあ…互角ってところかな…」

実はこれも希望的観測だったりする

だって、師匠の全力を僕でさえ一度も見たことはないから…

火彩「おいおい…冗談じゃねえぞ…零夜と互角に戦ったのはいままで三人しか居ねえぞ…」

三人？誰だろう…僕の先祖がその中の1人だったりするのかな…？

零夜「火彩と…団長と…」 親父”か…？あいや、” 父さん”と” 母さん” もそうだったかな…」

火彩「…ああ…そう言う事か…」



インターホンを鳴らして早く合流するでしょう

ヴィンセント「…と言う訳で…本日から、一時的ですが…この部隊の所属になります…」

リンディ「ええ、クロノから話は聞いています。」

ヴィンセント「…今回は…私もミスを犯す訳には行きません…11年前のような…！」

リンディ「…あれは、貴方のせいではないわ…」



ヴィンセント「いや…私が最後の封印確認をもっとしておくべきでした…そうすれば…少なくとも死傷者は出なかったはずですよ…私のミスですよ…」

あの悲劇を…繰り返す訳には行かない…

リンディ「…封印したはずの書が暴走したのは事故…誰もあんな事態を予測なんて出来なかったわ…例えば貴方でも…」

ヴィンセント「…」

…11年前…私はまだ…”普通の人間”だった頃…

あの後から…私の時は動いていない…



い…だが、闇の書が完成すれば主が目覚めることはない…」

氷雨「じゃあ、結局無理なんじゃ…」

火彩「いや、逆に言えば主を無理矢理目覚めさせてやればいいわけだ。」

零夜「どうやって？」

火彩「そりゃあ、俺達の得意技だろ？」

氷雨「…やっぱり結局それなんだ…」

零夜「それしかないなら…俺は迷わない…」

「「「全力の一撃でぶっ飛ばす!」」」

続く…

A・S 第11話 作戦会議は極秘で行うから意味がある(後書き)

夜影ラ(ry

DO「作者のデスs(ry」

秀吉「省略すんなよ…」

DO「ヒヤツハアアアアアアアアアアアアアアアア!」

秀吉「何があつたし」

DO「感想こない」

秀吉「…そうか」

DO「ぶつちやけ寂しい。コーナー作った意味ないじゃねえか。こ  
うすりや感想来ると思ってたんだがなあ。」

秀吉「アクセス数とユニークは？」

DO「アクセス約70000、ユニーク約80000くらい」

秀吉「まあまあか。」

DO「…頼みます、書いてください。」

続かなければ生き残れない！

A・S 第12話 タイムリミット(前書き)

後半、零夜、バーサー化！

Let's rock!!

A・S 第12話 タイムリミット

零夜「ただいま…」

はやて「お帰り！」

零夜「はやて…」

俺ははやてを見つめて…

はやて「…?どないしたん？」

はやてが首を傾げてこちらを見つめる…

俺は…俺は…

はやて「ふぁッ!?!?///」

俺は…はやてを抱き締めた

はやて「ちょ、ちょ、れ、零夜君!?!?///」

零夜「…俺が…必ず助けてみせるからな…!!」

はやて「え、ちょ、いきなりどないしたん?///」

突然抱き締めてしまったのはやはりアレだったか…



零夜「……はやてがあまりにも可愛かったからな……」

はやて「あ……じゅうじゅう……／＼／＼／＼／＼／＼／」

.....

零夜「はやて、体は大丈夫か？」

はやて「いや、なんもないけど……」

零夜「そうか……良かった……」

はやて「……？どないしたん？さっきから怖い顔して……？」

零夜「え？あいや、ちょっと考え事をな……」

はやて「そう……ならええんやけど……」

零夜「うん……あ、はやて、おかわり……」

はやて「はい。」

零夜「ありがとう……」

.....



火彩「ただいま〜ツと…」

ヴィンセント「…どこかへ出かけていたのか…」

火彩「…朝のランニングに…」

ヴィンセント「…それにしても、遅かったそうじゃないか。彼女が心配していたぞ…」

火彩「…まあ、今日は少し距離を伸ばしたもんでね…それよりアンタ、自分の弟子に会いに行かなくていいのかよ」

ヴィンセント「…何故私に弟子がいたことを知っている…」

火彩「本人から直接聞いた…」

ヴィンセント「そうか…」

火彩「で？いつ会いに行くんだ？なんなら、道案内を引き受けるが…」

ヴィンセント「いや、いい。氷雨は今日ここに来るのだから？」

火彩「そりゃ、まあ、そうだが…」

ヴィンセント「なら、私が出向く必要はない。」

火彩「おいおい…そんなんでいいのかよ…」

ヴィンセント「現在は作戦行動中だ…大した用も無くわざわざ捜査本部を開けて出ていくほど私はバカではない。もし仮に私がいな  
い間に敵が現れたらどうする？」

火彩「俺とフェイトとアルフがいる。」

ヴィンセント「では、もしその敵が君らよりはるかに強い場合はど  
うする？もし大多数で来ればどうする？三人で対応できなければど  
うする？」

火彩「…」

ヴィンセント「人数は少ないよりも多いほうがいいだろう…それに  
「わかったわかった！アンタの言うとおりだ！」…」

火彩「ハア…」

こつこつこのを考えるのは全部刀夜に任せてたからなあ…

俺にはよくわかんねえ

敵が来たらとにかくぶっ飛ばす、勝てそうになくてもとにかく一発  
ぶん殴る、そんでもって逃げる

それが俺のポリシーだ

火彩「そろそろくるんじゃないかねえかな」

ヴィンセント「…」

なのは「こんにちは〜」

氷雨「お邪魔します…」



なのはが驚きすぎたときは絶叫するからなあ…

氷雨「み、耳が…」

ヴィンセント「す、凄まじいな…」

フェイト「な、なのは…声大きすぎだよ…」

火彩「相変わらずすげえな…」

なのは「し、ごめん…でも…凄いびっくりしちゃって…」

火彩「まあ…解らなくはないが…」

フェイト「うっ…耳が痛い…」

火彩「大丈夫だ…すぐ治る…」

ヴィンセント「…あの二人は放置しておくか…」



.....

零夜「黒雷龍爪！」

俺は…技のレベルを一つ上に上げるため、蒐集のついでに暴れていた  
というより、もともとのレベルへ戻す、と言った方が良さだろう

零夜「黒雷龍牙！」

ついでに、名前も少し変えることにした

と言っても”黒”と言う文字を追加しただけなのだが。

零夜「黒雷龍翼！」

今倒したやつで合計5ページは集まった

零夜「黒雷龍破！」

まだまだ！こんなペースでは遅い！もっと！もっとと速く！

零夜「雷龍霸斬！」

ダメだ！スピードが足りない！

零夜「黒雷龍爪！」

昔はこの程度ではなかった！もっと威力も高く、もっと速かった！

零夜「夢幻刀・雷！」

雷を帯びた魔力刀を展開し

零夜「行けえ！」

多数の生物へ 投げつける

零夜「もっと速く！もっと強く！八刀一閃！」

刀を長刀へ変え、切り裂く

もっとだ！

零夜「モード2！フラッシュセイバー！」

長刀を両刃の大剣へ変え、高速の踏み込み斬りをする

いつの間にか、俺は周囲の生物全てを打ち倒し、蒐集していた

零夜「ハア…ハア…ハア…ハア…」

シグナム「随分と派手に暴れたものだな…」

零夜「速く蒐集を終わらせて、はやてを助けなきゃならないからな…そろそろ時間もマズいだろう…」

シグナム「主の体はもう…どれくらい持つか…」

零夜「俺が…俺達が頑張らなきゃ…」

続く  
⋮



零夜「何考えとんじゃボケええええ!!」

DO「友人の妄想から生まれた計画だよ!最初、なんとなく勉強の息抜きに描いた零夜がなんか凄い女の子みたいになって、それを友人に見せたらこうなったんだよ!!」

秀吉「……………うッ……………」

DO「ちなみに絵も描いたよ!友人いわく、下手なヒロインより可愛く見えるらしい!」

零夜「うああああああ!!!!」

はやて「ちょ、その絵見せて……………」

DO「下手くそだからヤダね」

秀吉「じゃあ俺達にだけでも……………」

DO「しかたねえなあ……………ホレ……………」

「……………悪くないかも……………」

零夜「な、なんだってえ……………ッ!!」

DO「ちなみに、俺の脳内では一度妄想してみたところ、はやてと凄い百合な感じになっちまったZE!」

零夜「なっちまったZE!!じゃねえよ!!ふざけんなああ……………」

はやて「で、作者さん作者さん。」

DO「なんだ？」

はやて「計画は実行するん？」

DO「いつか必ずな。」

はやて「…じ…じ…」

続かなければ生き残れない！！



A・S 第13話 過去の後悔は後から辛くなる(前書き)

辛くなる

L e t ' s r o c k ! !

A・S 第13話 過去の後悔は後から辛くなる

火彩「…眠い…」

相変わらず学校は眠い…

かと言って寝るわけにもいかねえ…

暇極まりねえな…

目を開けたまま寝る事が出来りゃあいいんだが…

あいにく俺にそんな特殊能力は備わっちゃいない…

…作者の友人は立ったままそれが出来るらしいが…

あゝ…何とか何ねえかな…全く…



火彩「ありや？もう出かけちまったか…」

ヴィンセント「…ああ」

フェイト「アースラの武装の追加が済んだから、試験航行だつて」

氷雨「アースラに武装追加？」

ヴィンセント「…アルカンシエルだそうだ…」

火彩「…なんだそりゃ？」

エイミイ「あんな物騒なもの、最後まで使わずに済めばいいんですけど…」

ヴィンセント「…あんなものをここで使ってしまったえば、この星が壊滅すると思えん…それがわかっていながら、何故管理局はあんなものを…」

火彩「…要は凄まじい破壊兵器か…」

ヴィンセント「まあ…その考えで間違つてはいないな…」

管理局もムチャクチャだな…

確か向こうじゃ飛ぶこともまともに出来ないうえに許可されたとき以外は非破壊、非殺傷の設定でしか戦闘は許可されていない…

…強いヤツにあつたらひとたまりもねえな…



零夜「この惑星<sup>ほし</sup>ごと闇の書を消し去るつもりかもしれないと!？」

火彩「ああ、管理局は本気だ。最悪の事態になれば、だろうがな…」

氷雨「このままじゃマズいよ…」

零夜「はやての状態もかなりマズいだろう…時々胸を押さえている時があるんだ…」

火彩「…無駄だと解っているが…病院には…?」

零夜「いや…はやてはずっと隠しているからな…」

氷雨「気付いてるなら、病院に連れて行った方が「駄目だ…」なんぞで!？」

零夜「病院に行ったところで進行が遅くなる訳じゃない、ましてや病院だとストレスが溜まっていく…ただでさえ弱っているはやての命を削る羽目になるかもしれない…」

氷雨「…」

火彩「今はなるべく、その子と一緒に居てやれ…その方がまだ安心するだろう…」

零夜「…そのつもりだ…」

氷雨「…やっぱり、闇の書を夜天の書に戻すには…あの方法しかないのかな…？」

火彩「…おそらく…あれ以降、何も見つからないからな…」

氷雨「…今思ったんだけど…元に戻すのに…原型の設計図的な物がないと戻せないんじゃない…」

火彩「あ…そうか…しまった…！！」

零夜「クソツ！肝心な事が抜けていた…！！”原典”が解らなければ元には戻せん…！」

火彩「振り出しに戻っちまった…」

零夜「クソツ！クソツ！クソツ！クソツ！」

火彩「零夜…」

氷雨「火彩、無限書庫には原典の事について書いた物は無かったの？」

火彩「残念ながら…俺が調べた限り見つからなかった…後でユーノに頼んでおくが…期待は出来んだろうな…」

零夜「…美月…」

今やどうにも出来ない

会う事も話す事も叶わない

かつての自分の恋人の名を呼んだ

だけど、何も変わらない

美月…お前が作ったんだろ…？

だったら…教えてくれよ…

夜天は明けることのない闇なのか？夜は明けることはないのか？

原典…最初にお前が持っていた夜天の書…

俺の封印された記憶にあるのか？

刀夜が持っているのか？

…俺にはやては救えないのか…？

…やはり、生きて帰ると言う約束を破った俺が悪いのか？

だとしたら…許してはくれそうにないな…

…それでもはやては助けてくれ…



はやてが死ぬ所なんて絶対に見たくない…

お前にそっくりな…あの子だけは…

続く…

A・S 第13話 過去の後悔は後から辛くなる(後書き)

夜影 r ) r y

D O , 作者 n ) r y

零夜「オイ…省略しすぎ) r y おいや) r y

D O , H a h a h a h a h a h a

零夜「H a h a h a h a h a h a じゃねえよ…! ぶざけ) r y おい  
! 強制省略や) r y

D O , H a h a h a h a h a h a h a h a

続かなければ生 k ) r y

A・S 第14話壊れた過去と現在と（前書き）

久々だ…色々忙しかったからな…

A・S 第14話壊れた過去と現在と

- - - 管理外世界 - - -

- - - 砂漠 - - -

シグナム「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ヴィータが…手こずるわけだ  
な…コイツは…少々厄介な相手だ…」

巨大なムカデのような生物と対峙し、予備のカートリッジを取り出すシグナム

その瞬間、背後の砂の中から尻尾が飛び出し、シグナムに襲いかかった

シグナム「ッ！」

上空に飛んで回避しようとするが、触手に捕まり、体を締め付けられた

シグナム「う…しまった…」

ギリギリと締め付けられ、さらに尻尾が襲いかる

瞬間

『Thunder  
read』







零夜「…やはり来たか…」

火彩「ああ、騎士達が動いていることが解ったからな、主が動くのも予測くらいは出来る。」

氷雨「半分の仮面、どうせなら取ればいいと思うけど？どうせ今から捕まる訳だし」

零夜「…吼えるなよ…」人間”…」

ヴィンセント「…それはこちらの台詞だ…」人間”…」

火彩「は？」

零夜「……」

ヴィンセント「一つ問おう、お前は本当に闇の書の主なのか？」

零夜「…ああ」

ヴィンセント「…やはり嘘だな…」

零夜「何…!？」

ヴィンセント「…お前は今まで一度も自分自身の命令で蒐集を行ったことがない…もし本当に主ならば自分自身で蒐集する事も可能はずだ。」

零夜「……」

ヴィンセント「それに、騎士達よりも主が強いなら自分で闇の書を持っていた方が安全なはずだ……だがお前は……一度も闇の書に触れていない……必ず騎士達の誰か1人が持っている……」

零夜「……ハア……全てお見通し……と言う訳か……まあいい……確かに俺は主じゃない……」

ヴィンセント「……本来の主はどこだ……」

火彩「さっさと言えよ（いいか……絶対に隠せよ……）」

零夜「（解っている……）答えるはずが無いだろう……」

ヴィンセント「ならば力づくで聞かせてもらおう。……ケルベロス……」

『Set up』

銃口が3つのリボルバー式の銃を手に取り、真紅のマントを纏った

零夜「来い……全員同時にな……！」

長刀を構えながら、挑発した

砂埃が立ちこめる中、フェイトとシグナムはにらみ合っていた

-  
-  
-  
-  
-  
再び砂漠  
-  
-  
-  
-

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

フェイト「…」

シグナム「…」

エイミー「フェイトちゃん！助けてどーすんの！捕まえるんだよ！」

フェイト「あ…ごめんなさい…つい…」

シグナム「礼は言わんぞ、テストロッサ」

フェイト「お邪魔でしたか…」

シグナム「…蒐集対象を潰されてしまった…」

レヴァンティンにカートリッジをリロードするシグナム

フェイト「まあ…悪い人の邪魔が、私の仕事ですし…」

シグナム「そうか…悪人だったな…私は…」

ガシャン、と音を立て、レヴァンティンの柄が元に戻った





同時に飛び出した！

バルディッシュとレヴァンティンがぶつかり、離れる

すぐ切り返し、すれ違いざまに攻撃する

シグナムの一撃は障壁によって防がれ、

フェイトの一撃もまた、障壁によって防がれた

同時に着地した瞬間、シグナムの前からフェイトの姿が消えた

一瞬にして背後に回り込み、フェイトは一撃を狙う

シグナムは、レヴァンティンを鞘に瞬時に納め、バルディッシュを  
防ぐ

鞘で攻撃を受け止め、抜刀したまま斬りつける

フェイトはバルディッシュでガードしたが後ろに吹き飛ばされる

シグナム「…」

『Schlangerform!』

レヴァンティンはカートリッジを一発ロード、連結刃シユランゲフ  
オルムへと姿を変える

シグナム「てえあつ!」

とてつもなく長くのびた刃はフェイトを狙いながら迫って来る

その様は、まるで、地を這う大蛇の如く

フェイト「クッ」

『Load cartidge、Haken form.』



バルディツシュがカートリッジを一発ロードし、先端部から金色の魔力刃が伸び、鎌、ハーケンフォルムに変形する

フェイト「ハーケン、セイバー!!!」

鎌を低く構えながら、連結刃のわずかな隙間を狙い、刃を打ち出す

「B r i z r u s h .」

再び金色の魔力刃が伸びる

シグナム「ハアアアッ!」

巧みに連結刃を操り、魔力刃の直撃を防ぐ

さらに追尾してくる魔力刃を空に上がることで回避する

が、

フェイト「ハアアアア!」

すでに上空からフェイトが迫っていた

『H a k e n s l a s h .』

魔力刃がさらに一回り大きくなった

フェイトは鎌を振り下ろした

が、

フェイト「ッ…鞘!?!」

レヴァンティンの鞘によって防がれた

シグナム「ッ…ハアアアアア!」

一瞬の隙をつき蹴りを放つ

フェイトは蹴り飛ばされながらも何とか障壁で防いでいた

『Plasma Lancer』

バルディッシュから高速の魔力弾が撃ち出され、シグナムに当たる

地面に着地したフェイトはシグナムが落下して来るであろう地点を  
みていた

『Assault form』

鎌の形態から杖であるアサルトフォームに戻るバルディッシュ

シグナムは地面に着地し

『Schwert form!』

レヴァンティンを連結刃から通常の剣へ戻した

フェイトはカートリッジを再びロード、足下にミッド式の魔法陣が

展開され、左腕と自身の前方にリングが形成される

そして、強力な一撃を撃つべく、左手に溜まっていく金色の雷の魔力を構える

フェイト「プラズマ……」

シグナムはレヴァンティンを鞘に納めた状態で同様にカートリッジをロード、

足下にベルカ式の魔力が展開され、周囲を薄紫に魔力が吹き出す

シグナム「飛龍……」

フェイト「スマツシャー!!!」

金色の雷の砲撃が撃ち出され

シグナム「一閃!!!」

抜刀した瞬間、魔力が込められた連結刃を地面に叩き付け、衝撃波を発生させる



零夜「クツ…さすがにキツいか…？」

火彩「っらあああああ！！！」

バスターソードの横薙の一閃を上体をそらすことで回避しながら零夜はつぶやいた

氷雨「…」

B a n g !

零夜「チッ！」

狙撃で飛んできた弾を魔力で作った刀で弾く

ヴィンセント「…ウインドバレット-H」

ヴィンセントが3つの銃口から通常の魔力弾から、自身の魔力変換資質、風の魔力弾を放った

風の弾は零夜を襲い、体に切り傷を増やして行く

ヴィンセントの風の魔力による鎌鼬かまいたちの影響だ

零夜（厄介だな…仕方ない…アレやるか…）

バックステップで一度距離をとり、長刀を腰の辺りに構える

零夜「…さあ…来い…」

ヴィンセント「…ケルベロス…」

『All right』

再び風が撃ち出される

しかし、今度は先ほどとは違い、3つの銃口から同時に撃ち出された

零夜「…来た！」

弾が当たる直前、零夜の前方に黒い霧のようなモノが薄く広げられ、  
風はそこに吸い込まれ、消滅した

ヴィンセント「…!!?何だ…今のは…!!?」

零夜「…居合、風斬かぜきり…！」

長刀を振りぬいての一閃、しかしその一閃には異常な事態が発生した

風が発生し、かまいたちが発生したのだ

ヴィンセント「なんだ…今のは！？奴は2つ変換資質を持っているのか！？」

火彩「炎龍！爆炎波！」

大剣を地面にたたきつけ、地面を這うように炎を撃ちだす

零夜「……………」

再び黒い霧のようなモノが広がり、炎を飲み込む



火彩「チツ……」

零夜「居合、炎斬……！」  
ほのおきり

炎が居合とともに撃ちだされる

火彩「なにイ！？」

ヴィンセント「変換資質を3つ持っているのか！？」

氷雨「下がって！氷龍！氷刃剣！」

真紅の氷が地面に沿って刃に変わり、飛び出す

零夜「ハアツ！」

再び黒い靄が発生し、氷が飲み込まれる

零夜「居合、氷斬……！」  
こおりぎり

居合と共に今度は氷が撃ちだされる

氷雨「うわっ！？」

ヴィンセント「4つ！？奴はいったい何者だ！」

零夜「言っておくが……俺は……ほぼ全ての変換資質を扱える……」



の守護獣の子と、それに、零夜君は3対1で、しかも相手はかなり強くて…それでも互角には戦ってるけど…」

ヴィータ「(けど…長引くとマズいな…助けに行くか…あっ…!)」

空を飛んでいたヴィータの前に、白い服の魔導師、なのはがいた

シヤマル「(ヴィータちゃん?)」

ヴィータ「(クッソ…こっちにも来た…例の白服…) 高町なんとか!」

なのは「にゃっ!?!なのはだってばー!!な・の・はー!!」

思いつきり自分の名前を忘れられていたなのはだった…

なのは「ヴィータちゃん…やっぱり、お話聞かせてもらっわけにはいかない?もしかしたらだけど…手伝えることとか…あるかもしれないよ?」

一瞬、ヴィータの脳裏をはやての笑顔がよぎった

…が

ヴィータ「うるせえ！！管理局の人間の言うことなんか信用出来るか！！」

なのは「私、管理局の人じゃないもの。民間協力者。」

両手を広げ、笑顔でまるで受け止めようとするかのような体制なのは

ヴィータ（闇の書の蒐集は魔導師1人につき一回…つまり、コイツを倒してもページにはなんねえな…カートリッジの無駄遣いも避けたいし…）

なのは「ヴィータちゃん」

ヴィータ「ブツ倒すのは！！また、今度だあ！！」

足下にベルカ式の魔法陣が展開され、ヴィータの左手には魔力が球体状に集まっている

なのは「あっ！」

ヴィータ「吠えろ！！グラーファイゼン！！」

『Eisengeheil！（アイゼンゲホイル！）』

左手の魔法の球体をグラーファイゼンで殴る

すると凄まじい爆風と爆音と閃光が発生した

なのははたまらず耳と目をふさいでしまった

ヴィータ「脱出…！」

その際にヴィータは離脱し、飛び去ろうとした

なのは「うう…あつ！」

爆風が収まり、視界が確保できた所でなのははヴィータが遙か遠くにいることに気付いた

『Master』

なのは「うん。」

ヴィータ「よし、ここまで離せば攻撃も来ねえ！次元転送…！！…あつ…！！？」

『Buster mode・Drive ignition』

三枚の翼を展開したレイジングハートを構えたなのはがヴィータにははつきりみえた

なのは（…氷雨君みたいに正確じゃないけど…よく…狙って…！）  
スコープで照準を付け

なのは「いくよ！久しぶりの長距離砲撃！」

『Load cartridge』

二発のカートリッジを消費し、リングを展開、魔力のチャージを開始する

ヴィータ「まさか…撃つのか！？あんな遠くから！？」

さらにレイジングハートの先端部に魔力が集まって行く

『Divien buster・Extension』

なのは「デイベイイイイイン！！！」

集まった魔力が一気に収束され、

なのは「バスタアアアアアアアアアア！」

ヴィータに向かって砲撃を放った

ヴィータ「うそお!？」

ヴィータの視界がピンク色の光に覆われ

大爆発を起こした

レイジングハートは余剰魔力を排出し、冷却する

『It's direct hit. (直撃ですね。』

なのは「…ちょっと…やり過ぎちゃったかな…?」

『Don't worry. (いいんじゃないでしょうか。』

よくねえよ、と突っ込みたいが、気にしないでおく

とにかく、煙で何も見えなかった

しばらくして、煙が晴れるとヴィータの前には仮面を付けた男がいた。

以前、零夜と接触した男の片方である

ヴィータ「ア、アンタは…」

「行け…闇の書を…完成させるんだろ…?」

ヴィータ「…ッ…」

仮面の男の言葉を聞き、ヴィータは次元転送を再開する

なのは「ダイバイイイイインー!!」

再びダイバインバスターのチャージを開始するのは



だが、

「……」

仮面の男がカードを取り出した

『Master!!』

なのは「っあ！？バインドッ……！？そんなッ……！あんな距離から、一瞬で……！？」

仮面の男はなのはが長距離砲撃を行った距離と同じ距離から、一瞬でバインドをしようと云う荒技をやったのだ。

その際に、ヴィータは次元転送を終え、なのははバインドを解除したが、ヴィータも仮面の男も、もういなかった

『Sorry master』

なのは「うっん、私の油断だよ……」



火彩がりボルバーのハンドガンを握り、引き金を引く

ガガウン！という銃声と共に上下二つに連なった銃口から二発の弾が撃ち出される

零夜「グッ！」

すぐさま横へ飛び、回避する

ヴィンセント「ウインドバレットオフ、ノーマルバレット、ケルベロスシフト。」

『All right.』

ヴィンセント「唸れ、地獄の番犬ケルベロス」

3つの銃口から三本の深紅の砲撃が放たれ、岩場の大地を抉りながら零夜へ殺到する

零夜「八刀一閃！！」

シャリン！という高い音と共に八回の斬撃が同時に迫り、三本の砲撃を切り裂く

零夜（このままじゃケリはつかない……！仕方ない……）アレ”やるか……）

氷雨「ッ！」

突然、零夜が立ち止まり、両手を広げ目を閉じた

ヴィンセント「…何か仕掛けてくるつもりか…！」

火彩「そうはさせねえ…！炎龍破！」

蒼炎が龍になりながら迫る

「……………刺し貫く刀は全てを包む……………」

「……………ムゲン夢幻の刀は夢幻……………」  
ユメマボロシ

「……………闇をも穿つ無限の刃……………」

「……………ユメマボロシ夢幻の包む影の刀……………」

「……………ムゲンホウエイトウ夢幻包影刀……………」

刹那、炎龍破が零夜に直撃、大爆発を起こした

が、次の瞬間

火彩「な、なんじゃこりゃあ!!」

氷雨「…これは…刀…？」

三人の周囲に、大量の魔力で作られた刀が配置されていた

いや、大量という言葉では表せないほどの刀だった

刀は空を埋め尽くし、ドーム状になっている

零夜「夢幻包影刀。絶対に回避も防御も不能な現時点で俺の最強魔法だ。」

火彩（オイオイ…こんな隠し玉があったのか…）

氷雨「回避不能防御も不能？じゃあ、どうすれば…」

ヴィンセント「簡単だ…破壊すればいい…」

ケルベロスを構え、再び砲撃を撃ち、刀を破壊する

零夜「無駄だ」

破壊された刀が再び再生し、再び覆い尽くす

零夜「さあ、決着をつけよう。夢幻包影刀、滅殺！」

零夜の合図で刀が一斉に発射される

ただ発射されるのではなく、連続で撃ち出された刀が再び現れ、全方位からマシンガンのように連続発射される

零夜「この技は回避しようにも回避する隙がなく、防御しようにも刀は切れ味と貫通力のみを極限まで高めたため、いかなる防御をも貫く。」

火彩「じゃあ全部同時にぶっ壊しゃ良いだけだろっがよー！」

零夜「何！？」

火彩「うらあアアアア！！！！」

地面に向かって大爆発を起こし、刀を全て同時に破壊する

ヴィンセント「ファントムダッシュ！」

ヴィンセントの深紅のマントが広がり火彩と氷雨を抱え、飛び上がる

その姿は、まるで幽霊のように飛び回り、捕らえることができない

零夜「チッ！」

火彩「へッ！やっぱりか！全部ぶっ壊しちまえば再展開に時間はある！」

ヴィンセント「だからと言ってさすがに今のはやりすぎだろう…」

氷雨「僕が障壁を張るのが少しでも遅かったら危なかった…」

火彩「大丈夫だって！俺が生きてっから！」

「それは君だけだ！」

零夜「…よし、今のうちに…」

零夜の背後に無数の刀が現れる



火彩「げ…なんかヤバくね？なんか王の財宝みたいなもんが見えるんだが…」

氷雨「…いやな予感しかしない…」

ヴィンセント「…」

零夜「…夢幻刀・掃射形態！」

「「うおおあああああああああああああああ！？」」

「…ハア…」



シグナム「ハア…ハア…ハア…ハア…（ここに来て…なお速い…目で追えない攻撃が出てきた…早めに決めないとマズいな…）」

レヴァンティンと鞘とを構える

フェイト「ハア…ハア…ハア…ハア…（強い…クロスレンジも、ミドルレンジも圧倒されっぱなしだ…今は、スピードでごまかしてるだけ…まともに食らったら、叩き潰される…!）」

バルディツシュを構える

シグナム（シュツルムファルケン…当てられるか…）

フェイト（ソニックフォーム…やるしかないかな…）

数分の沈黙の後、二人同時に飛び出した

次の瞬間、フェイトの胸から白い手が突然出てきた

シグナムは突然の事に驚き、途中で立ち止まった

気が付けば、フェイトの背後に仮面の男が立っていた

シグナム「テストロッサ…」

仮面の男が拳を握り、青い光が放たれ

フェイト「うあ…あああああああああああ…!!」

シグナム「貴様！」

仮面の男のにはいつの間にか、金色に輝くフェイトのリンカーコアがあった

シグナム「ッ!？」

フェイトは激痛のあまりなのか、気を失っていた

「さあ…奪え…」

シグナム「クッ…」

「…どうした…何を躊躇う…ッ!？」

突然、刀が仮面の男の左腕へ超高速で飛んでくる

「クッ！」

仮面の男は仕方なく、リンカーコアを元に戻し、左腕をフェイトから引き抜いて回避した

零夜「…余計な事はするなと言ったはずだ…ましてや騎士の1対1の戦いに水を差すなど…やはり今ここでしとめさせてもらう…」

零夜が左腕を掲げ、

「……貫く刃は矢となりて……」

「……切り裂く刃は閃光に……」

「……刃を以て断絶する……」

「……ムゲンゼットウ夢幻絶刀……」

左手の上に薄く、長い刀が現れた

零夜「…貫け！夢幻絶刀！」

刀を掴み、仮面の男に投げつけた

しかも音速に近い速度で、だ

「ぐあっ！」

音速に近い速度で飛来する刀を簡単に避けられるはずはなく、心臓を狙うはずだった刀は右腕を斬りつけた

零夜「チツ…それなりにはやるようだな…今の刀で致命傷を避けるとは…だが…2度目はない…」

「……貫く刃は矢となりて……」

「……切り裂く刃は閃光に……」

「……刃を以て断絶する……」

「……夢幻絶刀……」

再び薄く、長い刀が現れる

「…クツ！」

零夜「…！？」

仮面の男がバインドを仕掛けた

が

零夜「…フン…」

零夜は力業だけでバインドを引きちぎり、再び刀を投げた

が、仮面の男は転送をギリギリで終え、すでに居なくなっていた

零夜「チツ…しくじった…俺も弱くなったものだ…」

シグナム「さっきの仮面の男は…」「シグナム、この子から少し蒐集をしてから悪いが先に戻っておいてくれ…」「…わかった…」



零夜「…来たか…」

火彩「テメエ…」

零夜「勘違いするな…バカな仮面が余計な事をしたからだ…」

火彩「ハア？」

零夜「…ほらよ…」

火彩「あ…おい…」

零夜「…大切にしてくれよ…」

火彩「…？」

零夜「…じゃあな…」

火彩「あ、おい！」

続く…

A・S第14話壊れた過去と現在と（後書き）

はあ…夜影…以下略

零夜「オイコラちゃんとやれ」

「…いや…今年ももうすぐ終わりか…」

零夜「まあ…そうだな…」

「…技…整理しとくか…」

零夜「は？」

「クリスマス最終決戦が近いから…」

零夜「ヲイ」

続く…らしい…

A・S 第15話 悲しい決意、勇気の選択、戦士の覚悟（前書き）

…やべえ…クリスマスまでにあと3話は書かないと…

ま、とにかく

L e t ' s r o c k ! !

A・S 第15話 悲しい決意、勇気的選擇、戦士の覚悟

火彩「アイツ…何のつもりだ…」

零夜の奴…なんでまたフェイトを助けた…：まあ、しっかり蒐集はしてやがったが…

ま、大したことは無かったからいいが…

火彩「現在、最も厄介なことはあの仮面の男か…」

ちなみに、今他のメンバーは会議中である

で、俺はアースラの医務室でフェイトにつきつきりなわけだ

え？何故かって？

ややこしい話はわけわからんからな

全部他のメンバーに任せる

…やっぱり…少しくらい顔出すか…



火彩「管理局内に、裏切り者…あるいはスパイ的な何かがいるという可能性もある…」

氷雨「…まさかスーク的なのが…」

火彩「いや、雷〇かも…」

ヴィンセント「グ〇イ・フォックスかもしれないな」

なのは「ってなんでメ〇ルギア話になってるの!？」

火彩「…ともかく、システムを再構築したほうがいいだろう…同じことが起こらないとは限らない…」

エイミー「もつと強力なシステムにしないと、どうにもなりそうにないかな…」

ヴィンセント「…私も協力しよう…ある程度私も知識を持っている…」

なのは「ギャグからいきなりシリアスになるってどういうことなの!？」

なのは、気にしたら負けだよ

僕も一瞬思ったけど、と言うか僕が原因なんだけど…

クロノ「フェイトの時もよくわからないな…」

アルフ「ああ…あたしが駆け付けた時には…仮面の男はいなかった





シャマル「助けてもらった…って言うていいのかしら…」

シグナム「少なくとも、ヤツが闇の書の完成を望んでいるのは確かだ。」

ザフィーラ「完成した闇の書を利用しようとしているのかもしれないな…」

ヴィータ「ありえねえ！だって、完成した闇の書を奪ったってマスター以外には使えないじゃん！」

零夜「…あるいは…恨みがあるのかもしれない…はやて以前のマスターが何かやらかしたのではないか？」

シャマル「えつと…あれ…？」

シグナム「…何も…思い出せない…？」

零夜「…思い出せないなら仕方あるまい…とにかく、あの仮面の男は敵だ。数日前、この家を監視していた。…あの時、余計なことはするなと警告はしておいたのだがな…無駄だったようだ…」

シグナム「監視されていたかと？」

零夜「ああ。」

シャマル「…セキュリティを強化しておいた方が良さそうね…」

ザフィーラ「念のため、主のそばに常に誰かいた方が良さそうだな…」

零夜「…なるべく、俺が居るようにしよう…そうすればはやくも安心するだろうし、いざという時は、ある程度の相手でも俺ならばはやくも無事に逃がすくらいなら出来る…」

(( (( …絶対負けないだろうな… )) ))

…何か…4人が何か言いたそうな顔でこちらを見てくる…

…気にしないでいい…



カーテンの隙間から朝日が差し込み、はやては目を覚ました

隣でヴィータが寝ていないことに少し寂しさを感じつつも、起き上がりカーテンを開ける

窓から朝日が差し込み、部屋を明るく照らす

はやてはベッドから車椅子に移ろうとした瞬間

はやて「っ…！」

ドクン、と心臓が音を鳴らしたと感じた刹那、はやての胸に激痛が走った

はやて「う…あ…あ…あ…」

激痛により床に倒れ、車椅子も横倒しになってしまった



零夜「はやて!!」

やはり、はやては倒れていた

まず、首に指を当て、脈を計る

…昔から仲間が倒れたり、倒れた人を助けるときなどに、まず脈を計っていたせいか、ついやってしまった

はやては生きていて、目の前で苦しんでいるというの…

しかし、よかったかもしれない

心拍数が非常に高い

非常にマズい状態だ…

ヴィータ「はやて! はやて!」

零夜「起こすな! すぐ病院に連れて行く! 連絡を頼む!」

シャル「救急車を呼んで…」

零夜「その時間もないかもしれん！だから俺が最速で走った方が速い！頼む！10分以内に到着してみせる！」

瞬時にはやてを抱きかかえ、バリアジャケットだけを展開し、窓から飛び降りる

全身をバネにして、衝撃を和らげたのではやてには衝撃は伝わってはいないはず

足全体、足の裏に闘気を集中させ、一気に爆発させ、俺は飛び出した  
全身に闘気を纏い、最小限の動作で最短の距離を目で瞬時に選択、  
家の屋根、電柱、壁

様々なモノを足場に、はやてを抱きかかえたまま出せる最高速度で  
駆け抜ける



…頼む…はやく…持ってきてくれ…!!



火彩「ここはアースラき。フェイトは砂漠での戦闘中に背後からいきなり襲われて、気絶して、リンカーコアを吸収されて今に至るって訳だ。…ああ、リンカーコアはすぐ治るらしいから…心配はするな…」

フェイト「私…やられちゃったんだね…」

火彩「気にするな…管理局のサーチャーでも発見できなかった程の不意打ちだ…俺ならともかく、普通は気付けないさ…」

フェイト「…」

火彩「…良かった…お前が無事でいてくれて…」

俺は手をずっと握っていた

火彩「…うなされてたからな…」

フェイト「…ありがとう…」

火彩「…まあ…しばらくはゆっくり休め…学校には、なんとか適当に言っとくからさ…」

フェイト「うん…」

火彩「ああ、そくだ…腹、減ってるだろ？何か持ってくるわ…何が良い？」

フェイト「いや…そんな…」



零夜「ハア…ハア…ハア…ハア…」

はやて「もお…無理するからやで？」

数10分前から…現在絶賛息切れ中…

さすがに疲れた…

…やはり体が幼くなっている分、昔のようにには行かないな…

…調整が必要みたいだ…

…あと…どうでも良いが…

バリアジャケットで居たため、かなり妙な目で見られた…

いや、確かにコートなのだが…一応肩に防御の為のアーマーを装備しているし、腹にもアーマーは装備しているし、全身真っ黒だし…

零夜「あのな…ハア…いきなり…ハア…ぶっ倒れられたらなあ…ハア…無茶苦茶…心配するんだよ…」

はやて「みんなして大事にして…ちょう胸とてがつって、めまいがただけやって、言ったやん」

シャマル「でも…頭打ってましたし…」

シグナム「何かあったら大変ですし…」

ヴィータ「はやて…」

…胸と手がつるなんぞ、そうそう起こるもんじゃねえぞ…

…と言うか…見たことねえよ…胸と手が同時につるって…

それにあの痛みは異常だ…

…つってめまいがしたくらいで意識を失いかけるか？

…明らかにマズい…



シグナムが花瓶の花を取り替えながら答える

はやて「それはええねんけど…」

零夜「心配するな…飯なら俺が作るし、毎日会いに来るしな…」

ヴィータ「あたしも！毎日会いに来るよ！」

はやて「ヴィータはええ子やなあ…せやけど毎日や無くてもええよ、やること無いし、ヴィータ退屈や。零夜君も、無理に来んでもええよ」

零夜「いや、むしろ俺ははやてと居たいのだが…」

はやて「ほんなら私は、三食昼寝付きの休暇をのんびり過ごすわ」

入院を休暇って…

はやて「あ！あかん！すずかちゃんがメールくれたりするかも！」

シヤマル「私が、連絡しておきますよ。」

はやて「お願い…」

零夜「火彩にも言っとくよ。アイツ、結構仲良いみたいだからな」



シグナム「では、戻って着替えと本を持ってきます、」希望がかり  
ましたら…」

はやて「何にしようかな…うん…今はええわ」

零夜「ああ、俺はもうしばらく残る…」

シヤマル「そう、ならはやてちゃんの事、よろしくね」

零夜「ああ。」

…今の”よろしく”は確実に はやてを守って と言つ意味だな…

…そう言えば火彩…携帯か何か持ってんのか…？

念話があるから良いか…

みんなが一度家戻って数十分後…

零夜「…はやて…ごめんな…」

はやて「え？」

椅子に座りながら、俺ははやてに謝った

零夜「…俺が助けるって言うときながら…俺は何も出来ていない…」

はやて「…そんな事無い…零夜君は…ずっと私のそばに居てくれる…それだけで十分や…」

はやては優しいよな…けど…もっと自分に素直になってほしい…

零夜「…はやて…本当は…胸と手がつって、めまいがしたんじゃないんだろっ…？」

はやて「…！！」

零夜「…本当は…もっと別の…何かわからない痛みなんだろうっ？」

はやて「う…」

零夜「…誰もいない」

はやて「え？」

零夜「…今…此処には俺とはやて以外誰もいない…だから…だから無理はしなくていい…」

はやて「ふえ…」

零夜「全部…俺が全部…受け止めるから…」

俺の言葉を聞いた途端、はやてはついに泣き出した

はやて「…う…うああああ…グスツ…いやや…死にたくない…私は…まだ…死にたくない…！」

零夜「…絶対に…俺が絶対に…死なせはしない…！！俺の命に変えても…！」

泣いているはやてを抱きしめ、俺は窓の外を見ていた

続く…

A・S 第15話 悲しい決意、勇気の選択、戦士の覚悟（後書き）

夜影ラジヲ！Let's rock！！

「フ…フハハ…ハハハハハハ…フウーハハハハハハハハハハ！！！！  
ついに！ついにこの日が来たああああああああああああああ  
ああああ！！！！！！！！」

零夜「うるせえな！本編のシリアスぶち壊しじゃねえか！」

「なあにをいつておるかぁ！！今日は！魔法少女リリカルなのはA  
's Podaple GEARS of DESTENY の発  
売日ではないかぁ！！テンションが上がらざるを得ないだろうがア  
！私のテンションは天元突破だああああああ！！フウーハハハハ  
ハハハハ！！」  
零夜「…っーか早く寝ろよ…」

「このテンションで眠れるかアアい！！」

はやて「でも、確か作者さんは学校から帰って昼ご飯食べた後、晩  
ご飯まで熟睡してたやん」

「…し…仕方ないだろ！今週末ともに寝てないんだからさぁ！朝ま  
で3日朝までFFF3やっててやっとクリアしたんだからさぁ！」

零夜「なかなか更新しなかったのはたしか忙しいのもあっただろう  
が、中古購入した頭文字Dのゲームにはまっていたからだろう？」

「ぐはっ!?!」

零夜「しかもEK9に全く勝てないから挫折したらしいな」

「あぐぼあ!?!」

零夜「で?さらには今回の話のラストの俺がはやてを抱きしめるシーンを描いたらしいな?」

「…何か違う絵になったから捨てたけどな…」

はやて「無理ならやめとけばええのに…」

「…血迷った…それに、別に下手だったから捨てたわけじゃない…何故か…零夜がはやてをお姫様抱っこしてる絵になったからなんだ…」

「「…はい?」」

零夜「どうやったらそうなるんだよ…」

「あ、ありのままにあの時起こった事をは「ry」

零夜「…で?結局いま執筆に追いつめられてると…」

「…はい…」

零夜「…アホだ…」

続かなければ生き残れない!!

A・S 第16話 友と仲間と魔導師と（前書き）

間に合え！間に合えええええええ！！

では

L e t ' s r o c k ! !



A・S 第16話 友と仲間と魔導師と

数日後…フェイトも学校に来れるようになった

まあ…まだ魔法は使えないけど…僕としてはしばらく忙しくはなるかも…

で、教室

なのは「入院？はやてちゃんか？」

すずか「うん、昨日の夕方に連絡があったの。そんなに具合は悪くないそうんだけど…検査とかいろいろあって、しばらくかかるって…」

アリサ「そっか…じゃあ、放課後、みんなでお見舞いとか行く？」

すずか「いいの？」

アリサ「すずかの友達なんでしょ？紹介してくれるって話だったしさ。お見舞いも、どうせなら賑やかな方がいいんじゃない？」

いや…お見舞いが賑やかかって…

なのは「うーん…それはちょっとどうかと思うけど…」



八神家…

シヤマル「くくく　くよいしょつと…」

鼻歌を歌いながらお弁当を作るシヤマル

…今回は暗黒物質ダークマターは精製されなかったようだ…

シヤマル「くくく　…あら？」

ポケットの携帯に着信が入った

ポケットから取り出し、携帯を開く

シヤマル「すずかちゃん…」

すずかからのメールだった

内容は、放課後に友達とお見舞いに行きたいと言ったものだった

シヤマル「すずかちゃん…いい子ね…」

携帯を操作し、文を読み進める

しかし

”もしご都合が悪いようでしたら、この写真をはやてちゃんに見せてあげてください。”と書かれた文章の下に添付されていた写真に驚愕し、目を丸くした

そう、現在、敵対関係であるはずのなのはとフェイト、火彩と氷雨が”早く良くなってね”と書かれた横断幕と共に写っていたのだ

驚きのあまり、箸を落としてしまったシャマルだった…

シグナム「何？テストロッサ達がどうしたって？」

シャマル「だから！テストロッサちゃんとなのはちゃん、それと零夜君がいつも戦ってる二人の魔導師の子の4人がはやてちゃんに会いに来ちゃうの！すずかちゃんのお友達だから！ハア…どうしよう！どうしよう！」

とりあえず、シャマルはシグナムに通信をして聞いてみることにしていた

凄まじい慌てようだが。

シグナム「落ち着けシャマル！大丈夫だ！幸い、主はやての魔法資質は闇の書の中だ！詳しく検査されない限り、バレはしない！それ以前に、零夜が影で魔力反応をゼロにしているからバレる事はない！つまり、私達が鉢合わせる事が無ければいいだけだ」

シャマル「ううう…顔を見られちゃったのが失敗だったわ…零夜君  
みたいに変身魔法使うか…仮面でも付けておけば良かったわ…」

シグナム「今更悔いても仕方ない、ご友人のお見舞いの時は、私達  
は外そう」

シャマル「うん…」

シグナム「後は、主はやて、石田先生に我らの名を出さぬようにお  
願いを…それから、零夜にも…」

シャマル「はやてちゃん…変に思わないかしら…」

シグナム「仕方あるまい…零夜なら、バレてはいないから、零夜に  
任せよう…」

シャマル「うん…私から連絡しておくわ…」





零夜「（ああ、知ってる。）」

シヤマル「（え？な、なんで？）」

零夜「（あー…俺がいつも戦ってるヤツで、茶色い髪で、大剣を持って蒼い炎を使うヤツが居るだろう？アイツが俺の親友だ。…ああ、心配するな…はやて以外のみんなの事は伏せてある…）」

シヤマル「（じゃあ、今までずっと親友と戦ってきたの！？）」

零夜「（まあ、そうなるな。）」

）」

シヤマル「（…ごめんなさい…そんな…）」

零夜「（気にするな…昔から暇さえあれば良く戦ってたからな…その時と何ら変わり無いさ…それに、アイツの性格なら気にしないだろうし、俺も気にしない…）」

シヤマル「（じゃあ、とにかく、私達の事は、隠しておいてね）」

零夜「（極めて了解）」

はやて「零夜君、どないしたん？さっきからぼーっとして」

零夜「ん？はやてがどうやったら早く元気になるかな？って考えた」

はやて「もお…／＼／＼」

零夜「あ、そうだ。友達がお見舞いに来てくれるってさ。」

はやて「へ？」

.....

夕方…

コンコン、と扉をノックする音がなった

来たか…

はやて「はあい！どうぞ！」

「「「「「こんにちは！」「」「」「」

やはりだったか…珍しいな、火彩がいる…昔からこつこついう事にはあまり来なかったんだがな……

はやて「こんにちは！いらっしやい！」

零夜「どうも。」

すずか「お邪魔します。はやてちゃん、大丈夫？」

はやて「うん、平気や。」

はやては笑顔で答えた

零夜「珍しいな、お前がこういう場にくるなど、ほとんど無かったはずだが？」

火彩「…まあ…そうなんだが…な…うんまあ…その…いろいろあったわけだ…」

零夜「…ああ…そう言うことが…ああ、みんな、座ってくれ」

火彩「おう、ありがとうよ」

零夜「ああ、コート、預かるよ」

なのは「あ、ありがとう。それと、これね、うちのケーキなの」

はやて「そうなん!？」

零夜「ああ、あれは美味かったな。」

はやて「ってこれ翠屋のケーキ!？」

火彩「零夜、そう言えば」

零夜「ん？」

火彩「…なんでコート着っぱなしなんだ？」

零夜「…朝くるときに寝坊して慌てて上着着るの忘れた…」

火彩「お前ってヤツは…」

…止めてくれ…俺も自分でびっくりしたから…

アリサ「なんかあの二人凄い馴染んでるんだけど」

フェイト「二人共、昔からの親友なんだって」

アリサ「ふん…」

零夜「ああ、そうだはやて、前々から紹介しようと思ってなかなか紹介出来なかったからな、こいつが俺の親友」

火彩「闇咲火彩だ。よろしく！」

はやて「八神はやてです。よろしく」

なのは「氷雨君もあの二人の中に入れば？」

氷雨「まあ…そうなんだけど…せっかくの親友の再会みたいだからね…水を差しちゃ悪いかな」と思って…まあ、何度か会ったことはあるしね…」

なのは「そうなの？」

氷雨「まあね」

零夜「よし、火彩、氷雨、適当に話合わせといてくれよ」

「「（了解！）」」

と言う訳で、みんなでいろいろ話ながら過ごしていた

火彩も氷雨も適当に言った話に無理矢理話を合わせ、アドリブだけのでっち上げの話（もしくは茶番とも言つ）に合わせると言う無茶をやったのけてくれた

本気でコイツ等すげえと思った…

.....

しばらくして、みんなは家に帰った。

俺は面会時間ギリギリまでは病室にいる事になっている

零夜「どうだった？友達のお見舞いは？」

はやて「うん、みんなええ子ばっかしやったなあ。零夜君の親友にも会えたし。」

零夜「俺も、火彩に会ってほしかったんだ。良かったよ、アイツ、かなりバカだからな。」

はやて「ああ…ちょっとそんな所もあったかも…」

零夜「まあ、昔はもっとひどかったけどな…ま、良いヤツなのは俺が保障する。なんてったって、何百年間の親友だからな。あ、この何百年間とか、魔法の事とかは、みんなには内緒な？」

はやて「わかってるって」

零夜「頼むな」

はやて「また、時々来てくれるのは嬉しいなあ……」

零夜「ああ……」

はやて「せやけど、もうすぐクリスマスやなあ……みんなとのクリスマスは初めてやから、それまでに退院して、パーツと楽しく出来たらええんやけど……」

零夜「フツ……そうだな……出来たら……いいな……」

はやて「フフフツ」

はやては先ほどみんなから送られた本を眺めながら、楽しそうに笑っていた

……俺はこの笑顔を……必ず守ってみせる……







極夜は遙か昔のデバイス故に、無理矢理つけたカートリッジシステムなので、通常のカートリッジではなく、特殊な方法で魔力を通常の2倍込められたカートリッジを使用する。

故に一度に作れる数は少ない

だが、銃を使用しているときはともかく、刀や剣の時は2発しか装填できない上に、雷龍霸斬以上の技で無い限りカートリッジは使わない。

まあ無くて問題は無いのだが、使って魔力を温存するに越したことはないので使っている

結局、火彩達か、よほど厄介な獲物で無い限り使わないので数は貯まっている

シヤマルには魔力と時間の余裕があったときのみに作ってもらっているが、普段は自分で作っている。

零夜「じゃあ、行ってくる」

2発のカートリッジを受け取り、俺は自分を転送をする







A・S 第16話 友と仲間と魔導師と（後書き）

夜影ラジヲ！Let's rock!!

「フーハハハハハハハハハハ！ストーリー完全制覇！全キャラ使用可能！フーハハハハハハハハハハ！」

零夜「はよ小説書けや」

「フーハハハハハ！わずか半日でストーリー完結！1日で完全制覇、全キャラ使用可能！俺何やってんだあああああああああああああ  
ああ！！」

零夜「自分を見失ってやがる…」

「ストーリーは良かった！マテリアルツ娘達が凄かった！そしてはやて強くて凄くて可愛い！そう！はやて最高！ラストにはまさかのy「ネタバレ止める！！雷龍霸斬！」アーーーーーッ！！」

続かなければ生き残れない！



A・S 第17話 覚醒（前書き）

…ちくせう…昨日中に投稿したかったのに…

…Let's rock!!

A・S 第17話 覚醒

12月22日 PM4:45

零夜「……………」

はやて「……………」

何も出来ず、何も話せず、ただただ…時間だけが過ぎていた…

……………

シャマル「ええ、此処までは、上手く行ってるわ。」

シグナム「（ああ、そっちに戻らなくなった分、管理局もこちらを  
追いきれていないようだ。主はやては、寂しがってはいないか？）」

シャマル「私には、一言も…でも…常に零夜君がいるから少しはマシじゃないかしら…それに、お友達は良く来てくれてるみたいなの…すずかちゃん達…」

シグナム「そうか…だが、心配させてはいけない、数日中に一度戻る」

シャマル「うん、気を付けて…」

シグナム「…ああ…」

シグナムは岩場に降り立ち、闇の書をパラパラとめくった

シグナム「…残り…60ページ…」

それは、全ての終わりが近い事を示していた



桃子「フェイトちゃんも、火彩君も、たくさん食べてね」

フェイト「はい！ありがとうございます！」

火彩「ありがとうございます！」

恭也「はい、なのは、取り皿」

なのは「ありがとうございます。はい、フェイトちゃん、火彩君」

フェイト「ありがとうございます」

火彩「ありがとよ、ほい、氷雨」

氷雨「ありがとう」

美由希「ん？」

…何やってんだ？美由希さんは…俺の足元になにか…ってアルフか  
…肉を丸かじりしてるし…

士郎「フェイトちゃんは、今年のクリスマスイブはやっぱりご家族  
と一緒に？」

フェイト「はい！えっと…一応は…後、火彩も一緒に…」

火彩「モグモグ…ん？呼んだか？フェイト？」

フェイト「あ、いや…別に…」

火彩「ん、そうかい。モグモグ……」

しかし美味しいな…零夜の作った飯より美味めえ…

アイツも大概料理美味いが…これはそれ以上だな…

士郎「うちは今年も、イブは地獄の忙しさだな…」

士郎さんがなんか疲れた表情で言っている

地獄って…

なのは「私、今夜のうちに、値札とポップ作っておくから」

美由希「お願いね！私達は、今夜しっかり寝とかなきゃ！」

氷雨「…どゆこと？僕には良く…」

なのは「翠屋のクリスマスケーキ、人気商品だから、イブの日はお

客さんいっぱいなの！」

美由希「それにね、イブを過ごす恋人同士とか、友達同士のために深夜まで営業してるんだよ」

氷雨「そ、そうなんだ…じゃあ僕も手伝いますよ、1日くらいなら寝なくても平気だし。」

なのは「じゃあ、まず私を手伝って欲しいの！」

氷雨「うん、わかった」

美由希「恭ちゃんの良いよね、店の中で忍さんとずっと一緒だし」

恭也「それは関係ないだろ…」

恭也さんが美由希さんになんか面白いものを見る目で見られてる…

いや、もう士郎さんにも桃子さんにも、なのはにも、氷雨にも見られてる…

こりゃ相当だな…WWW

桃子「アリサちゃん家とすずかちゃん家の分はちゃんとキープしておくからね」

なのは「ありがとう！」

それでいいのか、店主よ…予約してるのか？ならいいが…

士郎「リンディさんからも予約いただいでるからなあ、お楽しみに」

フェイト「はい…！ありがとうございます…」

…やっぱ…フェイト緊張してるのか…？







突然、ヴィンセントがモニターの電源を消した

その瞬間、扉が開き、エイミーが入ってきた

エイミー「あれ？二人とも、なにか探し物？」

ヴィンセント「あ、いや、まあそんなところだ……」

とにかく、さっき調べていた事がバレないようにする

クロノ「まあ……ちょっと調べものを……」

エイミー「なんだ……言ってくればやるのに……」

ヴィンセント「あ、いや、個人的な事だ、問題無い……」

クロノ「それよりエイミー、闇の書に関するユーノのレポート、なのは達に送っておいてくれたか？」

エイミー「なのはちゃん達も、闇の書の過去に関しては、複雑な気持ちみたい」

クロノが話題を無理矢理変えたことで、調べもののごまかせたようだ









「こんにちはー」

「あれ？すずかちゃんや、はい！どつぞー！」

「「「「こんにちはー！」「」「」

「「……………」

すずか「今日は皆さんお揃いですか？」

アリサ「こんにちは、はじめまして！」

なのは「あ……」

フエイト「あ……」

零夜（やっぱこうなったなオイ！！）

火彩（…念話を通じない…妨害か…）

氷雨（…終わった…）

アリサ「ああ、すみません、お邪魔でした？」

零夜「いや、別に…いらっしやい……」



俺達からすれば最高の bad timingだよさくせし…

はやて「ところで、今日はみんななどないしたん？」

「せうの…サプライズプレゼント」「

アリサとすずかが手に持っていたコートの下からプレゼントが出てきた

はやては大喜びだが、俺らにとつちや最凶最悪だ…まあ、プレゼントは有り難いわけだが…

すずか「今日はイブだから、はやてちゃんにクリスマスプレゼント  
！」

はやて「わあ…ほんまか？ありがとうなあ…」

すずか「はい、零夜君にも」

零夜「俺に？いいのか？」

すずか「もちろん！」

零夜「ああ…ありがとう…」

アリサ「後で開けてみてね！」

…マズい…ヴィータが物凄い睨んでる…頼むから止めてくれ…  
頼むから…

はやて「なのはちゃん、フェイトちゃん、どないしたん？」

なのは「あ、うん…なんでも…」

フェイト「ちょっと、ご挨拶を…」

シャマル「ああ、みんな、コート預かるわ…」

「」「」「はーい」「」「」

フェイト「念話が使えない…通信妨害を…？」  
シグナム「シャマルはバックアップのエキスパートだ…この程度は、  
造作もない…」

ヴィータ「うううう」…！

ヴィータ…頼むから睨むのを止めてくれ…

なのは「えっと…あの…そんなに…睨まないで…」

ヴィータ「睨んでねーです。こういう目つきなんです」

いや違うだろ

最初は確かにそんなだったけどな…

はやて「ヴィータ、嘘付いたらあかん！悪い子はこつやで」

とはやてに鼻をつままれて引っ張られているヴィータ

フェイト「お見舞い…してもいいですか…？」

シグナム「…ああ…」





なのは「はやてちゃんが…闇の書の主…」

シグナム「悲願は後僅かでかなう…」

シャマル「邪魔をするなら…はやてちゃんのお友達でも…!!」

なのは「まって!ちょっとまって!話を聞いてください!駄目なんです!闇の書が完成したら、はやてちゃんは…」

ヴィータ「うああっ!!」

背後からヴィータがグラーファイゼンを振り、なのはに襲いかかった

なのは「ッ!」

すぐにプロテクションを張って防御するが、破られてフェンスまで吹き飛ばされる

フェイト「なのは!」

シグナム「うおおおおああああああッ!!」

レヴァンティンを振るい、フェイトに斬りかかるシグナム



そして、爆発が起きた

ヴィータ「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…」

目の前には炎の海

仕留めたとヴィータは思った

が、炎の中から、ゆっくりと近づく影があった



炎の中からはがでてきたのだった

「ヴィータ」…悪魔め…!」

なのは「悪魔で…いいよ…」

なのはレイジングハートを展開し、カートリッジを装填した

『Accelerate Mode・Drive Ignition』

「悪魔らしいやり方で…話を聞いてもらおうから!」

零夜「悪いがすぐさまカタをつけさせてもらっぞぞ」

火彩「構わん、こちらとて同じだ」

氷雨「早くカタを付ける…吹雪、3で行くよ」

吹雪「はい。」

火彩「白夜、アレで行くぞ、3だ」

白夜「了解！」

零夜「変則的に行く、極夜、2だ」

極夜『了解』

火彩は両手両足に籠手と具足を装着した

淡く蒼色に輝いている

零夜は両刃の大剣を片手で構えている

そして氷雨は・・・

零夜「変わった形の剣だな…」

氷雨「そうだろうね、これはブレイズエッジと言う武器で、剣と銃を切り替えることができる武器だ。」

零夜「まあ関係無い事だ。行くぞ!」

ちなみにこの三人、

今のセリフ全て棒読みである

シグナム「シャルル…お前は離れて通信妨害に集中してろ…」

シャルル「うん…」

2、3歩下がり、バリアジャケットに姿を変える

フェイト「闇の書は、悪意ある改変を受けて、壊れてしまっている…今の状態で完成させたら、はやては…」

シグナム「我々はある意味で、闇の書の一部だ」

ヴィータ「だから当たり前だ！あたし達が一番闇の書の事を知ってるんだー！」

空中でヴィータがグラーフアイゼンをなのはに叩きつけながら、叫ぶ

なのは「じゃあ、どうしてー！ー！」

『Acceler shooter』

なのははプロテクションで防ぎながら答え、足元にピンク色に輝くミッド式の魔法陣を展開し、7つのアクセルシューターを出現させる

ヴィータはアクセルシューターが出現する前に回避した

なのは「どうして！闇の書なんて呼ぶの！？」

ヴィータ「…？」

なのは「なんで、本当の名前で呼ばないの！？」

レイジングハートを構えながら、叫ぶなのは

ヴィータ「本当の名前…名前…！」



ビルの屋上、

フェイトはバルディッシュを構えた

そして

『Barrier jacket・Sonic form.』

今までとは違い、マントはなく、下はスパッツに両手にガントレットと言っ薄かった装甲をさらに薄した姿でいた

『Harken』

バルディッシュがカートリッジをロードし、戦斧から鎌へと姿を変え  
える

シグナム「薄い装甲を、さらに薄くしたか……」



フェイト「その分、速く動けます」

シグナム「緩い攻撃でも、当たれば死ぬぞ。正気か？テストロッサ」

フェイト「貴女に…勝つためです…！強い貴女に立ち向かうには、これしかないと思ったから…！」

強い意志のこもった瞳で、シグナムを真っ直ぐ見つめるフェイト

シグナム「…ッ」

薄い紫の炎がシグナムを覆い、バリアジャケットを装着する

「こんな出会いをしていなければ…お前と私は、いったいどれほどの友になれただろうか…」

俯いたまま、静かに言うシグナム

フェイト「まだ…間に合います…！」

シグナムはレヴァンティンを両手で構える

シグナム「止まれん…」

そう小さな声で言ったシグナムの頬を涙が伝った

そして、レヴァンティンにカートリッジをロード、

足元に薄紫に輝くベルカ式の魔法陣が描かれた

シグナム「我ら守護騎士…主の笑顔の為なら、騎士の誇りさえ捨てると決めた…！もう…止まれんのだ…！」

俯いていた顔を上げ、涙を流しながら叫ぶ

フェイト「止めます…！私と、バルディッシュが！」

『Yes sir.』

フェイトの足元に、金色に輝くミッド式の魔法陣が描かれた

ザフィーラ（誰にも通信が通らん…！）

ザフィーラは家に居たのだが、あまりにも帰りが遅く、通信が通じないのを心配して急いで飛んでいた



零夜「うらあああああ！」

夢幻刀を投げ、新たに精製し、二刀流になる

火彩「はあああああ！」

火彩は拳の籠手に光を纏わせながら刀を殴り、消滅させる

氷雨「アイスバレット！」

銃に変形したブレイズエッジから氷の弾を撃つ

零夜「夢幻刀・八閃！」

八つの刀を飛ばし、氷を迎撃する

零夜「砕け散れ！ライトニングドライブ！」

大剣を振るい、雷を撃ち出す

火彩「はあああああ！！日輪拳ッ！」

光を拳に載せて雷をかき消した

零夜「…ヤベエ…めっちゃめっちゃ離れちまったな…今海の上だぞ…」

氷雨「…これやばくない？」

火彩「…張り切りすぎたな…」

.....

なのは「本当の名前が…あつたでしょ？」

ヴィータ「闇の書の…本当の名前…？」

なのはは無言で頷いた

## 次の瞬間

なのはに三重のバインドが仕掛けられた

フェイト「なのは!?!」

シグナムと鏝迫り合いになっているフェイトは一度後ろに下がり

『Plasma Lancer』

周囲を見渡し、

フェイト「そこっ!!」

プラズマランサーを撃つ

何も無い空中で”何かに当たった”

フェイト「ハアアアアアアア!!」

バルディッシュを振るい、何か、がある場所に斬りつける

すると空間が歪み、仮面の男が現れた

胸を斬り付けられ、抑える

フェイト「この間みたいには、いかないッ!!」

バルディツシュから余剰魔力を排出する

シグナム「気を付けるテストロッサ！奴らは二人居るはずだ！」

フェイト「えっ!?!」

そして飛び出そうとした瞬間

「ハアッ!!!」

フェイト「うわああああ!!」

蹴り飛ばされ、バインドで拘束されてしまった

さらに、カードを数枚取り出し、その場に居る全員を拘束した

「この人数だと…バインドも通信防御もあまりもたん…速く頼む…」

「ああ…」



仮面の男の片方が右手を挙げると、闇の書が現れた

シャマル「あぁっ！いつの間につ！？」

闇の書を開くと、輝きだした

そして

ヴィータ「ううっ…うあ…うあああ…！！」

シグナム「うっ…ぐ…ああ…！」

シャマル「あ…あ…ああ…！」

三人が苦しみだし、リンカーコアが抽出され、魔力が闇の書へ蒐集される

「…最後のページは…不要となった守護者自らが差し出す…これまでも幾度か…そうだったはずだ…」

『Samm lung』

シャマル「あ…ああああ…ああああ…！」

「壊れたロストロギア…」

シグナム「う…うあ…ああああ…！」

「こんなもので…誰も救えるはずはない…」

ついに、蒐集により魔力を失ったシャマルとシグナムが消滅した

ヴィータ「シャマル！シグナム！なんなんだよ…なんなんだよてめーら…！うあ…うああああああああ！」

「プログラム風情が…知る必要は無い…」

ヴィータも蒐集され、消滅し始めた

ザフィーラ「うおおおおお！！！！！」

ザフィーラが仮面の男に殴りかかるが障壁によってふせがれてしまう

ザフィーラ「うおおっ…おおおお…！！！」

拳が弾かれ、血が吹き出す

「そうか…もう一匹いたな…」



火彩「オイオイオイオイ…こりゃどーゆー事だ？」

三人は、周囲を30人程の魔導師に囲まれていた

零夜「俺が知る訳が無かるう？氷雨、何か解るか？」

氷雨「コイツ等…管理局員だよ…それもかなり強い…多分、全員Aランク以上はあるんじゃないかな…？」

火彩「そのAランクってのは…どれくらい強いんだ？」

氷雨「まあ…なのはやフェイトより少し弱いくらいだね」

零夜「なんだその程度か、その程度なら龍神傭兵団の最弱のヤツより弱いな」

氷雨「え？」

火彩「アイツでも多分なのはやフェイトと良い勝負くらいだったんじゃないか？」



「あの二人は…なのはとフェイトの二人は大丈夫か？」

「四重のバインドにクリスタルケージだ…抜け出すまで数分かかる…」

「あの三人は…」

「Aランク以上の魔導師30人による足止めだ…しばらくは持つ…」

「よし…闇の書の主の…目覚めの時だな…」

「因縁の…終焉の時だ…」

仮面の男がなのはとフェイトに変身し、目の前に魔法陣が描かれ、そこにはやてが転送された

はやて「なのはちゃん…？フェイトちゃん…？うっ…なんなん…これ…？」

胸を押さえながら、見上げるはやて

「君は病気なんだよ…闇の書の呪いって病気…」

変装したなのはが無機質な声で言い放つ

「もうね、治らないんだ…」

変装したフェイトが言い放つ

「闇の書が完成しても…助からない…」

「君が救われることは…ないんだ…」

はやて「…あ…う…そんなん…ええねん…ヴィータを離して…ザフ  
イーラに…何したん…？」

胸の痛みに耐えながら、必死に叫ぶ

「この子達ね…もう壊れちゃってるの…私達がこつする前から…」

「とつくの昔に壊された闇の書の機能を…まだ使えると思いきんで  
…無駄な努力を続けてたんだ…」

はやて「無駄ってなんや…！シグナムは…シャマルは…」

変装したフェイトがはやての後ろを指した













「我は闇の書の主なり…この手に、力を…」

はやての手に、闇の書が現れ

「封印、解放」

『Freiلاسung』

闇の書から煙が立ち上り、はやての体がみるみるうちに大きくなつていく

それはまるで、成長を早回し再生しているようだった

脚は長く、胸は膨らみ、短かった茶色の髪は長い銀髪へ変わった

さらに手足にベルトのようなものが巻きつけられ、体や顔に赤いラインが走る

そして目つきは鋭くなり、黒い服に身を包み、漆黒の翼を広げた姿はもはや別人であった

「また…全てが終わってしまった…」

空を見上げ、目をつむり言う

「一体幾度、こんな悲しみを繰り返せばいいのだ…」

涙を流しながら、つぶやく

なのは「はやてちゃん!!」

フェイト「はやて…」

「我は闇の書…我が力の全ては…」

右手を挙げる

『Diabolic emission』

右の掌の上に、小さなボールのようなものが現れ、すぐに膨らみ、  
巨大な球体になった

「主の願い…そのままに…」

続く…





「ヲヲヲヲヲヲーッ!!」

火彩「刀をキャッチして叩き落として、碎ける前に取り替える!?  
なんだアイツ!? バーサーカーか!? そしてなんで零夜がギル様み  
たいになつてんだ!? 確かにゲートオブバビロンっぽい事は出来る  
けど!」

零夜「クツ…この我に膝オレを付かせるとは…その不敬は万死に値する。  
そこな雑種よ、もはや肉片一つも残さぬぞ!」

火彩「だからなんでお前はギルガメッシュになつてんだよ! ツーか  
勝手に膝ついてるだけだろ!？」

「フハハハハハハハハ!」

零夜「夢幻絶刀、八閃!」

「ヲヲヲヲヲヲヲヲ!」

火彩「コイツ等もうダメだ…あ、投げ返した…爆発した…」

零夜「アーーーーー! - - - ツ!」

「これで…リア充共を…血祭りに上げてやらあ!」

火彩「結局はただの嫉妬かい!! なんてFate/Zeroにな  
つてたんだよ!!」

「うおおおお!!」

火彩「本編のドシリアスぶち壊しだあああああ!」

(リア充と) 戦わなければ生き残れない!!

A・S 第18話 運命（前書き）

…無理だ…今日中にA・S編終わらせなかったのに…

…Let's rock…!!

A・S 第18話 運命

「デアボリック・エミッション」

闇の書のマスタープログラム管制人格の掌の上の球体が収縮し

フエイト「ッ！空間攻撃！」

「……闇に……染まれ……」

急速に広がった

なのは「ッ!?!」

氷雨「なのは！」

火彩「フエイト！」

零夜「……」

零夜と火彩が二人の前に立ち、氷雨がその後ろに立つ

零夜「うおおおおおおおおおおおおお！！」

零夜が巨大な悪魔デヒルプリンガーの右腕を展開し、デアボリックエミッションから

なのは達を守る

火彩「光よ！」

火彩が大剣を振るい、魔力を斬り裂いてゆく

そして、氷雨はシールドを展開し、なのは達を守る

「「「「「おおおおおおおおおおおおお！……！」」」」」

離れたビルの屋上、仮面の男達が様子を眺めていた

「もつかな…あの五人…」

「暴走開始の瞬間まではもって欲しいな…っ!？」

突然周囲に光が発生する

そして、バインドにより拘束される

「くっ……」

クロノ「ストラグルバインド…相手を拘束しつつ…強化魔法を無効化する…あまり使い所のない魔法だけど…こつ言つときには…やくにたつ…」  
と、クロノがS2Uをクルクルと回した瞬間、仮面の男達が苦しみだした

クロノ「変身魔法も…強制的に解除するからね…」

ヴィンセント「そして…しばらく眠ってもらおう…」

ヴィンセントが拳をたたき込み、気絶させる

変身が強制解除された仮面の男の正体は





離れた場所のビルの影…

氷雨「ふう…」

火彩「危なかったな…」

零夜「…」

なのは「ありがとう…」

フェイト「ごめん…大丈夫…？」

零夜「…ああ…」

火彩「問題ねえ」

フェイト「あの子、広域攻撃型だね…避けるのは、難しいかな…バ  
ルディッシュ」

『Yes sir. Barrier jacket, Lightning from』

マントを纏い、いつものバリアジャケット姿になるフェイト

火彩「…どうするよ、零夜…」

背中に背負ったバスターソードの柄に手をかけながら尋ねる

零夜「…まず確認する…あれは、はやてなんだな？」

なのは「…うん…」

零夜「…守護騎士のみんなは？」

フェイト「ッ…」

零夜「クソッ…!!」

ユーノ「なのは!」

アルフ「フェイト!」

なのは「ユーノ君!アルフさん!」

ユーノとアルフがなのは達の元へ飛んできた

「主よ…貴女の望みを叶えます…愛おしき守護者達を…傷付けた者達を…今…破壊します…」

胸に手を当て、つぶやく

『Gefangnis der Magie』

マスタープログラム  
管制人格を中心に別の空間が広がってゆく

零夜「チツ……！結界か……それも閉じ込める類の……」

フェイト「やっぱり……私達を狙ってるんだ……」

ユーノ「今、クロノが解決法を探している、援護も向かってるんだけど……時間が……」

火彩「解決法か……あることはあるんだがなあ……」

「……えっ？」「」「」

零夜「……成功率10%以下の分の悪い賭だ……」

なのは「それでも、少しでも成功する確立があるなら、賭けてみよ  
うよー……」

フェイト「何もしないよりは、良いと思う!」

火彩「…だってさ」

零夜「…ああ…」

火彩「…やっぱり…ショックか…?」

零夜「…別に…」

火彩「相変わらず素直じゃ無いねえ…ま、それがお前なんだけどな。」

氷雨「それで、何をすればいいの?」

火彩「ああ、やる事は単純だ、アイツに魔力攻撃を当てまくれ。それだけだ。」

なのは「それだけ?」

火彩「そう、それだけ。ただしかなり長期戦になるぞ。」

零夜「…俺一人で十分だ…」

火彩「…はあ…始まった…お前の悪い癖だ…自分の周りの人に何かあれば全て自分で抱え込んで自分だけで何とかしようとする…」

零夜「……………」

氷雨「あ、否定しないんだ…」

火彩「やめる、今のこいつにそう言うこと言ったら泣くから」

零夜「誰が泣くかコノヤロウ!!」

火彩「おっ、元に戻ったな。」

零夜「うっ……」

フェイト「さすが昔からの親友……」

アルフ「扱いがなれてると言うか何と言うか……」

火彩「ともかく、アイツをぶっ飛ばして、中にいる主……はやてを無理矢理目覚めさせる、その状態で内部から夜天の書のバグを切り離してもらい、はやてを中から助け出す、その後、バグをみんなでポコポコにしてハッピーエンドって訳だ……まあ……本来は完成させる前にバグを切り離してから完成させる手筈だったんだが……アホな奴らのおかげでシナリオが丸つぶれた……こっちなら成功確率50%だったんだがな……全く……毎朝話し合って作った計画が台無しだ……」

ユーノ「シナリオ？計画？それどういう事？」

零夜「アホか！なんで全部喋っちゃまうんだよ!!」

氷雨「せっかくバレなうように頑張ってきたのに!!」

火彩「あ……すまん……」

零夜「すまんじゃねえよ！大体全てが狂い始めた原因はお前らが今

日來ること連絡するのを忘れたからだろうかッ！！」

「「うっ！！」」

なのは「三人ともケンカしてる場合じゃないの！！とにかく、〇

H A N A S H Iは後で聞くから！！！」

それはまた別のモノです、とは誰も言えなかった



「スレイプニール、羽ばたいて……」

『Sleipnir』

背中の四枚の翼が一回り大きくなり、鳥のように羽ばたきながら空を舞う……

.....

同時刻、時空管理局

クロノ「リーゼ達の行動は、貴方の指示ですね…グレアム提督…」

リーゼロッテ「違うクロノ！」

リーゼアリア「あたし達の独断だ！父さまには関係ない！」

グレアム「ロッテ…アリア…いいんだよ…クロノも、スカイライン執務官も、あらかたの事はつかんでる…違うかい？」

二人は無言で頷いた

クロノ「11年前の、闇の書事件以降…提督は、独自に闇の書の転生先を探していましたね？」

ヴィンセント「…そして…発見した…闇の書の在処と…現在の主…八神はやてを…」

空中にモニターが現れ、はやてと闇の書が映し出される

クロノ「しかし、完成前の闇の書と主を抑えても、あまり意味はない…主を捕らえようと、闇の書を破壊しようと、すぐに転生してしまっから…」

ヴィンセント「だから、干渉しながら、闇の書の完成を待った」

クロノ「…見つけたんですね…闇の書の…永久封印の方法を…」

グレアム「…両親に死なれ、体を悪くしていたあの子を見て、心は痛んだが…運命だと思った…孤独な子であれば、それだけ悲しむ人は少なくなる…だが…」

クロノ「…思わぬイレギュラーが発生した…それが…あの少年…影宮零夜…」

ヴィンセント「…彼の両親は、元管理局員…それも、名を知らぬものは居ないほどの有名人…」

クロノ「…故に、恐れた…管理局を辞め、行方不明となった彼等を…」

グレアム「ああ…だが、彼の一度は彼も共に封印しようと考えた…だが…彼の力、直感、思考…どう考えても不可能だった…しかし彼を殺すこともできない…」

クロノ「だから、彼をAランク以上の魔導師だけを集め、足止めし、その際に全てを終わらせようとした…」

グレアム「…ああ…」

クロノ「封印の方法は、闇の書を主ごと凍結させて、次元の狭間か、氷結世界に閉じ込める…そんな所ですね…？」

グレアム「そう…それならば、闇の書の転生機能は、働かない…」

リーゼロッテ「これまで闇の書の主だって、アルカンシエルで蒸発させたりしてんだ！それと何にも変わらない！」

リーゼアリア「クロノ、今からでも遅くない、あたし達を解放して凍結が掛けられるのは、暴走が始まる前の数分だけなんだ！」

クロノ「その時点ではまだ、闇の書の主は永久凍結でような犯罪者じゃない…違法だ…」

リーゼロッテ「そのせいで！！そんな決まりのせいで…悲劇が繰り返されてんだ…クライド君だって…アンタの父さんだって、それで…！」

グレアム「ロッテ…」

クロノは立ち上がり、扉へ向かった

クロノ「…法以外にも、提督のプランには、問題があります…まず、凍結の解除は、そう難しくはないはずです…何処に隠そうと、どんなに守ろうと…いつかは誰かが手にして使おうとする…怒りや悲しみ…欲望や切望…そんな願いが導いてしまう…封じられた力へと…現場が心配なので、すみません一旦失礼します…」

グレアム「クロノ」

クロノ「はい？」

グレアム「アリア…デュランダルを彼に…」

リーゼアリア「父さま…！」

リーゼロッテ「そんな…」  
グレアム「私達に、もうチャンスは無いよ…持っていたって、役に  
はたたん…どう使うかは…君に任せる…氷結の杖…デュランダル  
だ…」

中央に菱形の宝石が埋め込まれ、装飾が施された白いカードを手渡  
した

そして、クロノは部屋を出た

ヴィンセント「先ほどの話の補足と言いますか…何と言いますか…  
デュランダルの方で作る氷より、もっと強力な氷を用意しなければ、  
封印は不可能です…そうですね…紅の氷とかなら…封印は不可能で  
は無いですよね…」

ヴィンセントはクロノの後を追い、部屋を出た



零夜「やれ！」

ユーノ「ハッ！」

ユーノが足をチェーンバインドで縛り

アルフ「ハアッ！！！」

アルフは両手をバインドで拘束する

「…砕け…」

『Break up.』

体を縛るバインドを一通り見て、つぶやくとバインドが砕けた

『Plasma smasher.』

フェイト「ファイア！」

『Divin Buster Extension.』

なのは「シュート！」

左右から同時に二筋の砲撃が放たれた

「…盾…！」

両手に障壁を発生させ、防ぐ

火彩「行くぜ！」

氷雨「狙い撃つ…！」

火彩がアサルトライフルを構え、氷雨がスナイパーライフルを構え

火彩「うらあっ…！」

ババババと連射する音とマズルフラッシュと共に魔力弾が放たれ、  
空薬莖が排出される

氷雨「………」

スコープを覗き、照準を合わせ、引き金を引く



バン、と言う音とマズルフラッシュと共に大型の魔力弾が放たれる

両手の障壁を正確に打ち砕く

「…！」

一瞬、マスタープログラム管制人格の表情が驚愕に染まり、ディバインバスターとプラズマスマツシャーが直撃した

だが、無傷だった

零夜「駄目だったか…」

「咎人達に、滅びの光を…」

右手を上げると、巨大なピンクのミッド式の魔法陣が描かれた

その魔法陣の中心に向かって周囲の魔力が流星のように収束される

アルフ「まさか！」

ユーノ「あれは…！」

「星よ集え…全てを撃ち抜く光となれ…」

なのは「スターライト…ブレイカー…？」

さらに収束された魔力が大きな球体になる

火彩「ヤッベ！みんな！逃げろ！死ぬぞ…！」

「貫け…閃光…」

アルフ「なのはの魔法を使うなんて！」

ユーノ「なのはは一度蒐集されてる…その時にコピーされたんだ！」  
アルフがユーノを抱え、猛スピードで逃げる

なのは「ふえ、フェイトちゃん、こんなに離れなくても…」

フェイト「至近で食らったら、防御の上からでも落とされる！回避距離をとらなきゃ！！」

火彩「オイ零夜！離れる！アレはマズい！死ぬぞ！」

零夜「…他の人間の気配がする…」

氷雨「はあ？」

零夜「…いる…確実にいる…このままでは…巻き込まれる…！頼む！探してくれ！俺がアレを何とかする！」

火彩「オイ零夜！無理だ！ありゃあ防ぐとかのモンじゃねえ！オイ  
…クソツ！！」

火彩の制止を聞かず、飛び去る零夜

火彩「ああクソツ！（フェイト！どつかに他の人間が居るみたいだ  
！氷雨と何とかしてくれ！スターライトブレイカーは俺達が時間を  
稼ぐ！）」

フェイト「（えっ！？えええええっ！！）」

零夜「…着弾地点は…この辺りか…よし…」

剣を両手で持ち、野球のバットを振るよつに構える

零夜「極夜、アレやるぞ」



！」

を雄叫びを上げながら剣をさらに振り抜く

火彩「お前は！無茶！しすぎなんだよおおおお！……！」

火彩がバスターソードを零夜の大剣の反対側に叩きつけ、無理矢理  
スターライトブレイカーを吹き飛ばした

零夜「ふう……」

火彩「やったな……」

零夜「全く……よく飛び込んだものだ……」

火彩「お前の無茶に比べたら比べものにならないさ」

零夜「さて……行くか……！」

零夜は飛び出し、マスタープログラム管制人格に向かって飛び出した

零夜「…はやて…」

「貴方は…主の…」

零夜「…はやては…お前の中か？」

「ああ……」

零夜「……素直に解放は……無理か……」

「……」

零夜「……俺のミスだな……昔っから……肝心なところでミスしちゃう……」

「……」

零夜「……言っておくか……シグナムにシャマル、ヴィータにザフィーラを傷つけたのはあの子達じゃない……それだけは解っておいてくれ……」

「我が主は……この世界が……自分の愛する者達を奪ったこの世界が……悪い夢であつてほしいと願った……我はただ……それを叶えるのみ……主には……穏やかな夢の内……永久の眠りに……そして……愛する騎士達を奪った者達には……永久の闇を……！！」

零夜「……夢は確かに必要だ……けどな……その夢を叶えて、はやては本当に喜ぶと思つてるのか！？心を閉ざし、何も考えず、願いを叶えるための道具でいて……お前はそれでいいのか！？」

「……我は魔導書……ただの道具だ……」

零夜「では……なぜ泣いている？心が無ければ、泣くことは出来ない



はずだ！」

「この涙は…主の涙…私は道具だ…悲しみなど…無い…！」

零夜「…そんな顔でそんな事言っただってな！誰も信じるわけが無いだろう！悲しいなら…悲しいと言え！！自分の心を…ちゃんと認める！お前のマスターは…俺の好きな人はやては！必ずそれに答えてくれる！だから…頼む…はやてを…！」

その瞬間、あちこちから火柱が発生した

「…早いな…もう崩壊が始まったか…私もじき…意識を無くす…そうなれば、すぐに暴走が始まる…意識のある内に…主の望みを…叶えたい…」

「…そもそも…はやての夢はなんだ！？お前は！それを解っているのか！？」

「…この…大馬鹿野郎ッ！！」

零夜は大剣を構え、斬りかかった

「貴方も…我が内で…主と共に…眠ってくれ…」

零夜「でやあああああ！！！」

大剣は障壁に防がれた

瞬間、

零夜「ツ！？なんだ！？」

零夜の体が輝きだし、

火彩「零夜！」

零夜は光となって消えてしまった

「全ては…安らかな…眠りの内に…」

火彩「零夜アアアアアア！！」

続く…



A・S 第19話 幻想世界（前書き）

キタアアアアアアア!!

Let's rock!!

A・S 第19話 幻想世界

零夜「…ん…」

此処は…どこだ…？何故俺はベッドで眠っているんだ？

「…ん…」

零夜「ん？…」

ふと、隣から声が聞こえたので覗いた

そして俺は、有り得ない光景を目にした

肩にかかるかかからないかギリギリ程の亜麻色の髪

左右に黄色の髪留め

まだ少し、幼さを感じさせる顔つきとは裏腹に、出るところはでで、  
締まる所は締まったスタイルの良い体

そう

かつて俺がまだ”刀夜”だったころ愛した少女

美月が眠っていた

刀夜（零夜）「…ハア!？」

何故だ！俺はコイツの告白を受けた後、数日で死んだはずだ！

しかもセリフの前の名前が刀夜に変わってる！

「ふったりとも〜！起きてま〜すか〜？」

刀夜「…風花…？」

風花「はい」

刀夜「…何故こうなったし…」

美月「ん…ん…おはよー…刀夜…」

彼女の声を聞いたのは、一体何年ぶりだったろうか

いや、もう聞けないと思っていた

会うことはないはずだった

彼女は、今はもう、俺の思い出の中だけにしか存在しないはずだった

だけど…目の前にいる…

顔を見ることができると…声を聞ける…触れられる…



嬉しかった

美月「…刀夜…？」

刀夜「あ、ああ…なんだ？美月…？」

美月「いや、さっきからずっとぼーっとしてるから…なんかあったんかな？と思って…」

刀夜「あ、ああ…大丈夫だ…」

風花「二人とも、朝ご飯ですよ！ふふふふふ　今日は私のスペシヤル朝ご飯です！」

美月「それは楽しみやなあ、ほな行こか」

刀夜「ああ」



美月「んじゃ、食べよか！頂きます！」

刀夜「…頂きます…」

ちなみに、朝食はパン、スープ、サラダ、ハムエッグだった

刀夜「…美味しい…」

美月「風花はまた料理が上手なっ たなあ〜！」

風花「えっ へんです！」

…そう言うのは言わない方が良いと…いや、良いか…別に…

美月「そう言えば刀夜、今日は仕事の依頼は来てないん？」

…そんな事解るかっ！

刀夜「えっと…その…そうだな…まだ確認してない…」

美月「もし、今日暇やったら、二人でちょっとお出掛けせえへん？」

刀夜「ああ、何もなかったらな」

美月「やったあ！」

刀夜「……」

相変わらず……実年齢と見た目より子供っぽい所あるな……と言っても……この頃だから16歳位だったはずだから……あまり気にはならないけどな……

火彩「よお刀夜！」

刀夜「火彩か…」

どうやらここは龍神傭兵団の本拠地だったようだ  
だから俺は、仕事の依頼が書いた書類が入ってないか確認するため、  
個人用のロッカーを開けようとしていた

火彩「お前、何やってんだ？今日はお前、仕事入らないないって昨日連絡してやっただろ？」

…今日は暇みたいだ…

刀夜「…ああ…そうだったな…」

火彩「珍しいな、完璧超人の刀夜がこんなミスをするなんてな」

刀夜「…そんなときもある…」

火彩「ふーん…で、今日は暇なんだろう？彼女とどっか出掛けねえのか？」

刀夜「…まあ…一応…」

火彩「ヒュ〜 ラブラブだな〜羨ましいねえ…俺も彼女の一人くらい欲しいもんだ」

刀夜「…その性格を少し落ち着かせれば一人くらいはできるさ…多分…」

火彩「マジで!?!」

刀夜「おそらくな…」

火彩「よし、落ち着かせればいいんだな！頑張ってみるか！じゃあな！」

…火彩も昔の性格だ…”今”の性格とは少し違う…

まあ、あれはあれで楽しかったな

「とーう！」

刀夜「うわっ！何すんだ美月！」

部屋に戻った瞬間、美月に飛びかかれ、抱きつかれた

美月「聞いたで〜今日暇なんやって？」

刀夜「まあ…な…」

美月「じゃあ…さっき言った通りに…出掛けよな…」

抱きつかれながら、耳元でささやかれた

刀夜「わかってる…」







美月「けど…刀夜は、いつも命がけなんやなあ…」

刀夜「…俺は死なないさ…お前を置いてはな…」

美月「…ウソツキ…」

刀夜「………」

美月「わかつてる…私らがこうして二人で愛し合えるのも、後どれくらいあるか…せやから、私はこの夢のような時間を大切にしたいねん……」

夢…？そうか…そうだよな…

刀夜「美月…これは…幻想なんだ…」

美月「え？」

刀夜「この世界は…全部…幻想…だって…俺とお前は…同じ世界…同じ時代には…いない…」

美月「…そうや…けど…幻想でもいい…ここに居ようや…そうしたら…私と刀夜は…ずっと一緒に居られる…」

零夜「俺は…俺はもう…刀夜じゃない…俺は零夜だ…だから…」



半開きだった目を大きく開き、言う

「私…こんな望んでない…！貴女も同じはずや！違うか？」

「私の心は、騎士達の感情と深くリンクしています…だから騎士達と同じように…私も貴女を愛おしく思います…だからこそ…貴女を殺してしまう自分が許せない…自分ではどうにもならない力の暴走…貴女を浸食する事も、暴走して貴女を食らい尽くしてしまうことも…止められない…」

はやて「覚醒の時に…今までのこと少しは解ったんよ…望むように生きられへん悲しさ…私にも少しは解る…シグナム達と同じや、ずっと悲しい思い、寂しい思いしてきた…せやけど…忘れたらあかん…！」

はやてが車椅子から少し立ち上がりながら手を伸ばし、顔に触れた

はやて「貴女のマスターは、今は私や、マスターの言うことは、ちゃんと聞かなあかん」

はやての足元に、白く輝く魔法陣が描かれた



美月「ほんまは…もうちょっと長く一緒にいたかった…けど…私はもうおらん…だから…ちゃんと新しい幸せを護るんやで…」

零夜「…ああ…必ず…はやてを護ってみせる…」

美月「…じゃあ…」

零夜「ああ…」

美月と俺は少し見つめ合い、唇そっと重ねた

美月「…大好きやで…零夜…」

そう言つて、美月は光となって消えてしまった

零夜「…ほんと…はやては美月にそっくりだよな…魂の…輝きが…」

.....

はやて「名前をあげる。もう闇の書とか、呪いの魔導書なんか言わせへん、私が呼ばせへん。」

「はっ……」

はやて「私は管理者や、私には、それが出来る」

「無理です…自動防御プログラムが止まりません…管理局の魔導師が…戦っています…それも…」

涙を流しながら、言う

はやて「…とまって…」





零夜「さあ！行くぞ極夜、フルドライブだ！」  
『極めて了解！』

零夜「フルドライブ、六爪！」

両手を広げ、指の間に6本の刀を挟む

零夜「黒雷龍の爪、雷の刃！斬り裂け！雷龍剛爪！！」

両手をクロスさせ、一気に斬り裂く

空間全体にヒビが入り、元の世界へ脱出した



はやて「うん…まあ…何とかしよう…行くか…リインフォース…」

リインフォース「…はい！我が主…！」

続く…！



A・S 第20話 終わり無き闇(前書き)

スーパールボッコタイム!!

Let's rock!!

A・S 第20話 終わり無き闇

火彩「…零夜！」

零夜「…よう」

火彩「生きてやがったか！」

零夜「なんだ？死んだ方がよかったか？」

火彩「んな訳ねえだろうが！」

零夜「…脱出する時、ピンクの光が見えたんだが…」

火彩「ああ…多分、なのはの砲撃だな…」

零夜「君か…ありがとう…俺一人ではあの空間からは出られなかった…」

なのは「い、いや、そんな…」

零夜「つと…どうやら…来るみたいだぞ…」

巨大な黒い球体、その前に白い光が見える

なのは「あの黒い淀みに近づいちゃだめだって！あれが暴走が始まる場所だから！」



はやての周りに紅、薄紫、緑、白の4色の光が現れた

はやて「リンカーコア送還、守護騎士システム、破損修復…」

4色の光が強く輝いた

はやて「おいで…私の騎士たち…！」

そして、強烈な白い光と共に

夜天の騎士が復活した



シグナム「我ら、夜天の主に集いし騎士」

シャマル「主在る限り、我らの魂、尽きること無し」

ザフィーラ「この身に命在る限り、我らは御身の元であり」

ヴィータ「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に！！」

はやて「リインフォース、私の杖と甲冑を」

リインフォース「はい！」

黒と白、黄色の騎士甲冑を身に纏い、剣十字の杖を握る

開いた瞳は、鮮やかな水色になっていた

光がはじけ、中からはやてが現れた

零夜「はやて!!」

はやては笑顔だった

そして杖を掲げ

はやて「夜天の光よ、我が手に集え！祝福の風、リインフォース、セーリット、アップ！！！」

剣十字から黒と白の光が放たれ

腰の左右にアーマー、そして白い上着、白い帽子

そして、髪が薄いクリーム色になり、背中に6枚の漆黒の翼と言つ姿になった

ヴィータ「はやて……」

シグナム「すみません……」

シャマル「あの……はやてちゃん……私達……」

はやて「ええよ……みんな解ってる……リインフォースが教えてくれた……そやけど、細かい事は後や……今は……お帰り……みんな……」

零夜「……はやて……」

はやて「零夜君も…ずっと頑張ってくれてた事…知ってる…」

零夜「…すまない…それと…はやても…お帰り…」

はやて「…うん！」

なのは「はやてちゃん！」

フェイト「はやて！」

なのはとフェイト、火彩と氷雨が飛んできて、足下の魔法陣に降り立った

はやて「なのはちゃんとフェイトちゃんに、火彩君と氷雨君もごめん…うちの子達が、色々迷惑かけてもって…」

火彩「なに、気にするな。俺らも色々やらかしちまってるから。」

氷雨「あ、もう隠すの止めたんだ。」

クロノ「すまないな…水を差してしまうが…時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ…時間が無いので簡潔に説明する…」

ヴィンセント「同じく…ヴィンセント・スカイラインだ…空気を読まず、失礼する…それと火彩、後で話を聞かせてもらおうぞ」

火彩「ゲツ…マジかよ…」

クロノ「あその黒い淀み…闇の書の防衛プログラムが、後数分で暴走を開始する…僕らはそれを何らかの方法で止めないといけない…停止のプランは現在2つある…1つ、極めて強力な氷結魔法で停止させる…」

デュランダルのカードを見せながらクロノが言う

クロノ「2つ、軌道上に待機中の艦船アースラの魔導砲、アルカンシエルで消滅させる…これ以外に、何かいい方法はないか？闇の書の主と、その騎士達に聞きたい…」

シャマル「えつと…最初のは多分、難しいと思います…主の無い防衛プログラムは、魔力の塊みたいなモノですから…」

シグナム「凍結させても、コアがある限り、再生機能は止まらない…」

ヴィータ「アルカンシエルも絶対ダメ！！こんなところでアルカンシエル撃つたら、はやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか！」

なのは「そ、そんなに凄いの？」

なのはが隣のユーノに尋ねる

ユーノ「発動地点を中心に、百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら

ら反応消滅を起こさせる魔導砲、って言うと、だいたい解る？」

氷雨「と言うか、下手したらこの惑星<sup>ほし</sup>ごと吹き飛びかねないんだけど」

「「「な、なんだってええええ!!」「」」

なのは「あの、私もそれ反対!!」

フェイト「同じく、絶対反対!!」

クロノ「僕も艦長も、本当は使う気は無いんだけど…」

零夜「使う気が無いなら始めから選択肢にあげるな馬鹿者。」

クロノ「んなつ!?!」

ヴィンセント「…だが、あれの暴走が本格的に始まれば…被害それより遥かに大きくなる…」

ユーノ「暴走が始まると、触れたものを浸食して、無限に広がって行くから…」

氷雨「厄介だね…」

零夜「…どうやら時間も無さそうだ…おい真つ黒少年」

クロノ「…え？僕か？」

火彩「逆にお前以外に誰が居るんだよ？」

クロノ「……………」

零夜「その…アルなんとかは今軌道上…つまり宇宙にあるのだろうか？」

クロノ「ああ…そうだが…」

零夜「なら、アレを宇宙に吹き飛ばすなり、転送するなりして地球外…宇宙空間でアルなんとかを撃てばいいのでは無いか？どうせどこでも発射は出来るのだろう？」

ヴィンセント「なるほど…それなら被害はゼロで破壊可能だ…考えたな…」

クロノ「…実に個人の能力頼りで、ギャンブル性の高いプランだが…まあ…このメンバーなら不可能では無いだろう…そんな気がする…」

エイミー「ク、クロノ君…一応、理論上は可能だよ…それと、暴走開始まで10分を切ったよ！」

はやて「防衛プログラムのバリアは、魔力と物理の複合6層式…まずはそれを破る…」

フェイト「バリアを抜いたら、本体に向けて私達の一斉砲撃で、コアを露出……」

なのは「そしたらユーノ君達の強制転移魔法でアースラの前に転送……」

リンディ「後は、アルカンシエルで蒸発……」

クロノ「提督……見えますか……？」

グレアム「ああ……よく見えるよ……」

モニター越しに、はやて達の姿が移っていた

クロノ「闇の書は、呪われた魔導書でした……その呪いは……いくつもの人生を喰らい、それに関わった多くの人の人生を狂わせてきました……アレのおかげで、僕の母さんも……他の多くの被害者遺族も……こんなはずじゃない人生を進まなきゃならなくなった……それはきつと……貴方も……リーゼ達も……無くしてしまった過去は、変えることは出来ない……」





はやて「あつ、なのはちゃん、フェイトちゃん。」

傷だらけのなのはとフェイトを見てはやてが呼び掛けた

はやて「シャルル！」

シャルル「はい！お二人の治療ですね！」

はやてに呼ばれたシャルルは笑顔で答えた

シャルル「クラーヴイント、本領発揮よ」

『Ja』

シャルルがクラーヴイントに口付けした

「静かなる風よ、癒やしの恵みを運んで！」

緑色の光と共になのはとフェイトの体から傷が綺麗に消える

シャルル「湖の騎士シャルルと、風のリング、クラーヴイント。  
癒やしと補助が本領です！」

フェイト「すごいですー！」

なのは「ありがとうございます！シャルルさん！」

アルフ「あたし達はサポート班だ、あのウザいバリケートを上手く止めるよ」

ユーノ「うん！」

ザフィーラ「ああ」

海中から黒い柱が立ち上がり、触手の動きが激しくなる

クロノ「始まる……」

はやて「夜天の魔導書を……呪われた魔導書と呼ばせたプログラム……」

闇の書の…闇…」

黒い柱が消え、巨大な黒い球体がさらに黒く染まる

黒い球体が消え、中から異形のモノが現れる

カニのような脚に、岩龍のような前脚、少し捻れた赤い四本の角に、巨大な口、背中にはヒレのようなモノに黒い翼、そして頭部と思われる場所には人のようなモノが付いていた

アルフ「チェーンバインド！」

ユーノ「ストラグルバインド！」

複数のバインドで触手を引きちぎる

ザフィーラ「縛れ！鋼の頸木！でいやあああああ！！！！！」

白い鞭のようなモノが触手を一掃する

ヴィータ「ちゃんと合わせろよ！高町なのは！」

なのは「ヴィータちゃんもね！」

ヴィータ「鉄槌の騎士ヴィータと！鉄の伯爵くろがねグラーファイゼン！」

『Gigant from』

グラーファイゼンがカートリッジをロード

先端のヘッドの部分が大型のハンマーへと変わる

ヴィータ「轟！天！爆！砕！」

足下に、紅のベルカ式の魔法陣が描かれ、ヴィータが振り回すと巨大なハンマーがさらに巨大化、もはやバグを押しつぶしてしまいうなサイズへと変わる

ヴィータ「ギガント・シュラー……ク……！」

巨大なハンマーを叩きつけ、一枚目のバリアを粉碎した

なのは「高町なのはと！レイジングハート・エクセリオン！行きま  
す！」

ピンクのミッド式の魔法陣が描かれ

『Load cartridge.』

カートリッジを4発ロード、空薬莖を排出し、4枚の翼を展開する

そして、レイジングハートを構える

なのは「エクセリオン…バスターー……ッ！！」

触手がなのはに向けて襲いかかる

『Barrel shot.』

不可視のバインドで触手を粉碎、

なのは「ブレイク！！」

リングが形成され、大きな球体に魔力が集まり、四本の砲撃が放た

れる

四本の砲撃が同時にバリアに衝突するが、破ることは出来ない

なのは「シュー……ト……!!」

四本の砲撃の中心からさらに強大な砲撃が放たれ、一つの砲撃へ纏まる

そして、一気にバリアを撃ち抜く

シャマル「次！シグナムとテストアロツサちゃん!!」

シグナム「剣ツルギの騎士、シグナムが魂、炎の魔剣、レヴァンティン。刃と連結刃に続く、もう一つの姿……」

レヴァンティンの柄の底に、鞘を押し付け、カートリッジをロードすると、鞘が光り、繋がる

そして、全体が輝き、巨大な弓へと姿を変える

『Bogenform!』

弦を引くと、矢が現れる

そして、上下からカートリッジをロードして空薬莖を排出する

シグナムの足下の薄紫色ベルカ式魔法陣から炎が吹き出す

シグナム「疾走よ、隼かけ!!」

『Sturmfalken!』

矢が輝き、放たれる

放たれた矢は、炎を纏い、燃え盛る

そして、バリアに直撃し、大爆発を起こし、バリアが碎け散る



フェイト「フェイト・テストロッサ、バルディッシュザンバー！行きます！」

大剣を振りかざし、足下に金色のミッド式魔法陣が描かれる

三発のカートリッジをロード、大剣で回転斬りを繰り返し、物理的な衝撃波を打ち出す

通り道の触手を斬り裂き、バリアにダメージを与える

大剣を振り上げると、剣先から稲妻が迸る

フェイト「撃ち抜け、雷神！！」

『Jet Zamber』

振り下ろした大剣の刃が長く延び、バリアを斬り裂く

ヴィンセント「…では氷雨、久々にアレをやるとしよう」

氷雨「アレですか…良いですね！やりましょう！」

ヴィンセント「風よ、斬り裂く刃となりて吹き荒れろ！」

氷雨「氷よ、打ち砕く弾丸となりて吹雪となれ！」

「ダイヤモンドダスト烈風の吹雪！！」

巨大な氷の塊を氷雨が作り出し、ヴィンセントが鎌鼬を放って細かい弾丸のように削りながら風と共に飛んで行く

氷と風が連続でバリアを攻撃

バリアにヒビが入る

「「砕け散れええええええええええ！！」」

とどめと言わんばかりに巨大な氷の杭を叩き込み、バリアを砕く



そして火彩は3回転して両手の大剣を振り抜き、巨大な龍のような形の蒼い炎を撃ち出す

2つの龍は融合し、2つの頭と一つの体の、蒼き炎と黒き雷で作られた龍が翼を広げ、爪を振り上げ、バリアを粉碎し、それだけでなく、本体をも斬り裂いた

火彩「つしゃあ!!」

海中から触手が出てきて、砲撃を放とうとする

ザフィーラ「盾の守護獣ザフィーラ! 砲撃なんぞ! 撃たせぬ!!」

鋼の頸木が触手を貫き、砲撃を阻止した

シヤマル「はやてちゃん!!」

はやて「彼方より来たれ、やどりぎの枝、銀月の槍となりて、撃ち貫け!!」

はやてが夜天の書を開き、足下に白く輝くベルカ式の魔法陣が描かれると共に、バグの頭上にも描かれ、6つの光の玉が現れた

はやて「石化の槍、ミストルティン!!」

シュベルトクロイツを振り下ろし、光の玉から槍が撃ち出され、バグを石化させていく

バグの体の一部が碎けるが、再生され、さらなる異形へと姿を変えて行く

アルフ「うわわっ!!」

シャマル「なんだか、凄いことに…」

エイミィ「やっぱり、並の攻撃が通じない!!ダメージを入れたそ

「ばから、再生されちゃう!!」

クロノ「だが、攻撃は通ってる!! プラン変更は無しだ!! いくぞ、デュランダル!」

『Ok Boss』

クロノ「悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて永遠の眠りを与えよ…」

足下に水色のミッド式の魔法陣が描かれ、雪のような塵が海ごとバグを凍てつかせる

クロノ「凍てつけっ!!」

『Eternal coffin』

氷雨「吹雪、フルドライブ、行くよ」

『はい!』

氷雨「フルドライブ、ツインガンブレード!!」

左手にはリボルバー機構のついた大きな刃の銃のような片手剣

右手には刀型の銃のような剣

両手にガンブレードを手にした

氷雨「紅の息吹、紅氷龍の怒り！永久に続く戒めの氷！！氷龍氷水ひょうりゅう  
うひすいは  
破！！！！」

右手の刀型のガンブレードに紅の氷を纏い、引き金を引きながら一トリガー  
閃、巨大な紅氷の龍を撃ち出し、バグの体を凍らせながら砕く

氷付けになり体が碎けるも再生し、暴れる

しかし足止めはできた

零夜「いまだ！！撃て！！」

なのは「行くよ！フェイトちゃん、はやてちゃん！！」

フェイト「うん！！」

はやて「うん！」

『Starlight Breaker』

なのは「全力全開！！スターライトオ…」

足下となのはの目の前にピンクのミッド式の魔法陣が描かれ、流星のように周囲の魔力が集まって行く

フェイト「雷光一閃！プラズマザンバー…」

足下に金色のミッド式の魔法陣が描かれ、大剣の刃に稲妻が集まり、激しく放電する

はやて「…ごめんな…お休みな…」

夜天の書を広げ、掲げたシュベルトクロイツに黒いと白の光が集ま





零夜（…なぜだ…なぜ…こんなにも…嫌な予感がする…）

エイミィ「駄目！闇の書の再生が、計算よりも早い！！」

クロノ「なんだって！？」

シャマル「これじゃあ、本体コアを露出できない！！」

ヴィンセント「彼女達も…魔力はもう…」

なのは「そんな…！」

フェイト「あれだけの砲撃を食らって…まだ…」

はやて」「…もう…あかん…」

クロノ「万事休すか…!？」

続く!!

A・S 第20話 終わり無き闇（後書き）

夜影ラジヲ、Let's rock!!

「スーパーフルボッコタイムツ!!」

零夜「原作と違い、トリプルブレイカーを食らいながらも驚異の再生能力で生き長らえた闇の書の間!!」

火彩「残り魔力も少なく、打つ手はあるのか!？」

氷雨「闇は終焉を迎え、夜天へ還る事は出来るのか!？」

「次回！ 夜の終わり、旅の終わり、夜天の影 ！！」

「「「「Let's rock!!!」」」」













A・S 第21話 夜の終わり、旅の終わり、夜天の影（前書き）

さあて……決めるか……

L e t · s r o c k ! !

A・S 第21話 夜の終わり、旅の終わり、夜天の影

零夜「…やるか…」

火彩「おう！氷雨、お前も付き合え。」

氷雨「始めからそのつもりさ。」

零夜「行くぞ！！」

三人は再生し、さらなる異形と化したバグへ接近した

クロノ「おい！君たち！！」

零夜「まずは新たなバリアを切り裂く！！」

火彩「よっしゃあ！行ツツツくぜえええええええ！！！！！！」

両手のウイングセイバーの柄を底で連結させ、グルグルと回す  
片刃はそれぞれ反対を向いている

火彩「かけ翔ろ炎翼！えんりゅうくれん炎龍紅蓮霸斬！！」

合体させた大剣を回転させながら、振り回しながらバリアに向かってゆく

すると大剣から蒼い炎の翼が現れ、長さをぐんぐん伸ばして行く

そして

火彩「ブった斬れえええ!!!」

一体何枚あったのか分からないほどのバリアを一撃で全て焼き尽くす

フェイト「凄い…あれだけの枚数のバリアを…一撃で…」

火彩「氷雨!やれ!」

氷雨「疾走れ息吹!氷龍零氷霸斬!!!」

両手のガンブレードの刃が凍り付き、右手の刀型のガンブレードを引き金を引きながら横に一闪、さらに左手の大型のガンブレードの

トリガー  
引き金を引きながら縦に一閃

巨大な氷の塊が剣のように鋭い刃、そして冷気が吹雪のように同時に飛び、バグの体を貫き、紅の氷に包みながら氷の刃が周囲から発生、体中に突き刺さりバグの行動を拘束する

クロノ「まさか…あれが真の紅の氷…？」

氷雨「さあ！後は任せたよ！」

零夜「斬り裂け雷爪！雷龍迅雷霸斬！！」  
らごうりゅうでんぱくせん

両手の六爪の一本一本の刀から黒い稲妻が迸り、振り上げた両手を  
一気に振り下ろした

6つの黒雷が斬り裂き、撃ち抜き、体を破壊し尽くす

ついに闇の書の闇、バグのコアが露出した

火彩「零夜！今だ！」

零夜「ハアアアア…ハアツ！！」

両手の六爪を鞘に納め、巨大な悪魔デビルプリンガーの右腕を展開し、コアを掴み、握り潰さんと力を込める

零夜「てめえのせいで、何人の人間が犠牲になったことか…！！」

右腕が輝き、零夜の右腕が赤と黒と青の三色の異形の右腕、悪魔の右腕へと変わる

右腕からは淡く、黒い光が放たれていた

零夜「てめえのせいで…明けない夜が続き…夜天は封じられ、闇が支配してしまっただ…」

展開した巨大な右腕の末端部…二の腕らしき部分から光の粒子が放たれる

零夜「だが…それも終わりだ…！！」

零夜の黒い眼が深紅に変わると同時に、右腕の末端部から巨大な”人型のナニカ”が形成された

それは、人と言うには余りにも異形で、化物と言うには人に近すぎた

頭には角のようなモノ

左手には鋭い爪

鬼のような顔

体には甲冑のよいなモノを纏っているように見える

しかし、上半身しか存在しない

零夜「さあ…終わりだ…」

右腕にさらに力を込め

零夜「もう…夜明けの時間だ！！！！」

グシャア、と言う音が鳴り響き、ついにコアを握り潰した

展開した悪魔デビルリングの右腕の拳を開くと虹色の光が放たれ、消え去った

エイミー「闇の書の反応…完全消滅…再生反応…ありません…!？」

クロノ「あ…有り得ない…こんなにあっさりと…」

零夜「フウ…」

火彩「よし…」

氷雨「ハア…」

零夜「…終わった…」

火彩「ああ…」

氷雨「うん…」

なのは「も…もしかして…あの三人って…」



フェイト「物凄く強いなんてレベルじゃ無いんじゃない……」

なのはとフェイトが苦笑いをしながら言う

零夜「…さて…面倒くさい時間の始まりだ……」

ヴィータ「はやて！」

シャマル「はやてちゃん！」

零夜「はやて!?!」

零夜が振り向くと、はやてがシグナムに抱きかかえられ、気を失っていた

零夜「…大丈夫だ…多分…魔力の使いすぎだろう…初めてにも関わらず、あんな強力な魔法を連続で使用したからな…無理もない…しばらく休んでいれば治るはずだ……」

ヴィータ「ほ、ホントか!?!」

零夜「…ああ…だが、詳しい事は専門職の人間に聞かねば解らん…俺のわか仕込みの知識では…どうも……」

シャマル「…良かった……」



火彩「…ん？零夜、お前そんな指輪してたか？」

零夜「これか？これはな…まあ…その…なんだ…大切な人に貰ったんだ。」

火彩「大切な人？はやてか？」

零夜「いや、違う」

火彩「は？じゃあ…み…いや…それは無いか…」

零夜「当たりだ。あの時…俺が吸収された時…夢の中で貰ったんだ…」

火彩「夢の中で？じゃあなんでお前の手に指輪があるんだよ」

零夜「…もしかしたら…あれは…あの美月は、幻想じゃ無かったのかもしれないな…」

火彩「話が全くわかんねえ…」

零夜「まあ、お前は細かいことは余り気にしないで。……多分…」

火彩「多分てなんだよ多分って！」

零夜「気になるのは美月の言葉…あの子達ってのはどういう意味なのか…」

火彩「人の話聞けよ」



クロノ「…あのですね…何かあったらどうするんですか!？」

リンディ「大丈夫よ、彼はそんな事しないだろうし、火彩君も居るでしょう?」

零夜「…随分俺の事を信用してるみたいだな…」

リンディ「ええ、貴方の両親とは何度か会ってるし、よく話も聞いていたわ。元気にしておられるのかしら?」

零夜「…半年程前に死んだ…両親共にな…」

リンディ「死んだ…?」

零夜「…殺された…誰にやられたかは知らん…解るのは次元世界一つ丸ごと消されたって事だけだ…」

クロノ「バカな!そんな事があれば、すぐ解るはずだ!」

零夜「…何…?知らないのか!?!いや、だが消滅はしているはずだ…どうやっても転送出来ないからな…: まあいい…その事は後だ…で?事情聴取、とやらを始めたらどうだね?」

クロノ「…わかった…では…単刀直入に聞こう…君は何者だ?」

零夜「刀やら銃を使う魔導師」

クロノ「そう言う事じゃなあああい!!有り得ないだろう!!闇の書のバグを破壊してしまうなんて!そしてその右腕!コアを握り潰して完全消滅させるなんて、もうロストロギアとかの次元じゃ無

いぞー！」

零夜「そう言われてもな…俺もこの右腕はよくわからんからな…気が付いたらこうなっていた」

クロノ「ハア…」

零夜「それよりもな…俺もアンタらに聞きたいことがある…」

クロノ「…なんだ…」

零夜「プロジェクトF・A・T・E、ソルジャー戦士、ライトニングシャドウスカイライト・ブレイズ雷光の影、蒼天の焔、龍神傭兵団、ベルカの魔王、プロジェクトS・R、…いずれかの言葉に聞き覚えは？」

クロノ「…一つ目の…プロジェクトFなら…」

零夜「…チツ…やはりか…まあいい…どうやら俺自身の説明をする前に聞いておいて良かった…」

火彩「…零夜、止めとけ…」

零夜「だがな…彼女達のためだ…」

火彩「…わかった…」

零夜「まず、俺達は、プロジェクトF・A・T・Eによって一強制的に生き返らされた《……………》かもしれない命だ」

リンデイ「そんな！一体誰が！」

零夜「アンタら時空管理局さ、十中八九な。それもかなり上層部…最高部辺りじゃないか？」

火彩「確かそうだ、最高評議会…とかなんとか言ってた気がする」

零夜「まあ…何時何処の人間が元になってるかと言われれば、旧暦、古代ベルカの戦争中のだ真ん中で…と言っても一番激しい時代の少し前くらいに傭兵やってて勝手に死んだ奴だ。と言うか本人だ。」

火彩「ちなみに、無限書庫で調べても出てこないのも悪しからず。」

零夜「で、悪いが細かいことは省かせてもらおうぞ？長くなるからな。大体4時間掛かる話だから。まあとにかく俺は管理局を全く信用していないし、何があるかと所属する気は無い。墓の中で寝てた俺達を無理やり叩き起こして自分達の駒として使おうなどと考えれ輩が居る場所など死んだ方がマシだ。まあ、どうせ死んだらまた生き返らされるんだろうがな」

火彩「…やっぱり二人とも鳩が砲撃食らったみたいな顔してやがるな…」

零夜「ああ、それと砲撃ではなく集束砲…じゃなかった、豆鉄砲だ…」

火彩「物凄い差だなオイ」

クロノ「…その話…証拠は？」

零夜「いや、全部消された。俺が以前住んでた世界ごとな。全部俺

の両親が持ってたんだがな。ちなみ俺は元々記憶が無かったが火彩と再会して記憶を取り戻した訳だ。」

火彩「あ、それと俺が記憶喪失するのは嘘だから。」

クロノ「じゃあ、もう検拳は…」

零夜「されたはずだ。」

リンディ「なら…貴方の事はこちらで保護は…出来そうに無いわね…」

零夜「無論だ。俺は死んだことになってるはずだ。管理局に世話になるくらいならこの身を細胞一つ残さず消す。アルカンシエルでも無理矢理撃たせてでもな。…さて…俺の話は終わりだ、そろそろ本題と行こう。」

リンディ「…本題？」

零夜「この指輪。この中に…」

-----



- - - - -

アースラ艦内、はやての病室

リインフォースを含む守護騎士が眠っているはやての周りに集まっていた

リインフォース「やはり、破損は致命的な部分にまで至っている…  
防御プログラムは停止したが…歪められた基礎構造がそのままだ…  
私は…夜天の魔導書本体は…遠からず新たな防御プログラムを精製し、また暴走を始めるだろう…」

シグナム「やはり…か…」

シャマル「修復は…出来ないの？」

リインフォース「無理だ…管制プログラムである私の中からも、夜天の書本来の姿が消されてしまっている…」

ザフィーラ「元の姿が解らなければ、戻しようも無いと言う事が…」

リインフォース「そう言う事だ…」

シグナム「主はやては…大丈夫なのか？」

リインフォース「何も問題は無い。私からの浸食も完全に止まっているし、リンカーコアも正常作動している…不自由な足も、時を置けば自然に治癒するだろう…」

シャマル「そう…じゃあ、それならまあ…よしとしましょうか…」

シグナム「ああ…心残りは無いな…」

ヴィータ「防御プログラムが無い今、夜天の書の完全破壊は簡単だ…破壊しちやえば暴走する事も二度と無い…代わりに、あたしらも消滅するけど…」

シグナム「すまないな…ヴィータ…」

ヴィータ「何であやまんだよ…いいよ別に…こうなる可能性があったことくらい…みんな…知ってたじゃんか…」

リインフォース「いいや…違う…」

リインフォースの言葉に守護騎士4人がリインフォースの方を向く

リインフォース「お前達は残る…逝くのは…私だけだ…」

零夜「まだ諦めるには少しばかり早いかも知れないぞ？リンフォ  
ース」

病室の扉が開き、零夜がニヒルな笑みを浮かべて立っていた

続く…

A・S 第21話 夜の終わり、旅の終わり、夜天の影（後書き）

夜影ラジヲ、Let's rock!!

零夜「一応この話クリスマスの日だよな」

「ああ」

零夜「クリスマスに投稿するはずが出来なかったんだよな」

「忙しくてな」

零夜「遊びまくってたからだろうが！この雑種ううう！！」

火彩「またギル様化！？」

「いや〜つい夢中になって…」

零夜「ほう、なら何故友人とクリスマスにゲーセンで頭文字D Aをやりに行っていたのだ？」

「…俺の魂がそう言ったか」

零夜「失せる雑種ううう！！！！」

火彩「ギャー！！またゲートオブバビロンみたいなのが！！」

「ウオヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲー！！！！ッ！！」

火彩「また作者がバーサーカーになったあああ!!!」

零夜「せめて散り際で我<sup>オレ</sup>を楽しませよ、雑種」

火彩「何なんだよこの空間はああああああああああああああああああああああ!!!」

続かなければ生き残れない!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8266w/>

---

魔法少女リリカルなのは～夜天の光の影～

2011年12月28日23時54分発行